

第三篇 進攻作戰

第一章 南方攻略作戦の初動

大東亜戦争開戦の火蓋は、日本時間昭和十六年十二月八日午前三時二十分、海軍の真珠湾に対する奇襲攻撃によつて切つて落されたように謂われている。

極東国際軍事法廷は、右攻撃が、野村駐米大使の日米交渉打ち切り通告に先だつ一時間前に行われたことを強く論難した。しかし十二月八日未明香椎丸乗船の第二揚陸団長は、マレー沖より軍機電報を以て、參謀総長宛「八日一時三十分コタバル東岸に上陸成功す」と報じている。それは勿論日本時間であつて、正しく真珠湾攻撃に先だつ一時間五十分であつた。即ち開戦の火蓋は、わが南方軍の先鋒たる佗美支隊の英領マレー上陸成功の時を以て切つて落されたのである。

ハワイ作戦は米海軍と決戦を行い、これが勝敗により戦争の決を一挙に求めようとするものでは固よりなかつた。それは日米海軍勢力均衡保持のための米海軍戦力漸減戦略の一環であり、且つ南方攻略作戦の遂行を容易ならしめんとするものであつた。ただこの目的の達成を米太平洋艦隊の根拠地たるハワイに求めようとしたに過ぎなかつた。戦争初期の作戦の主体は、固より南方に対する進攻作戦にあつたのである。

而して進攻作戦もまた戦運は我に幸いした。十二月八日未明、マレー上陸軍は奇襲上陸に成功して遠距離渡洋進攻作戦の新機軸を開き、香港攻略軍は英支国境を突破した。陸海軍航空部隊の比島米空軍に対する航空撃滅戦は、十二月八日の一日を以て早くも勝敗を決し、西太平洋の制空制海権は概ね日本軍の手中に帰した。

かくして今や陸海軍の精銳は、マレー、ボルネオ、フィリピン、香港、グロム、ウェーキ等の攻略作戦を一斉に開始したのであ

る。

註 南方攻略作戦の全般並にマレー及び比島作戦については附図第二を参照せられたい。

1 南方軍及び聯合艦隊の指導

〔南方軍の統帥発動〕 昭和十六年十一月六日、南方軍総司令官に親補せられた寺内陸軍大將は、同日大本営陸軍部において、參謀総長杉山大將から「南方要域の攻略を準備すべき」旨の大本営命令の伝宣を受けると共に、「南方軍作戦要領」及び「南方作戦陸海軍中央協定」を示達せられた。この際參謀総長は、南方軍総司令官に対し左の如き要望を開陳した。

皇国非常の秋に際し閣下南方軍統率の天命を拜せられ闊外の重任に就かる誠に慶祝の至りに堪へざる次第なり

就ては左に若干の要望を述べんとす

昨五日御前會議に於て帝國は対米英蘭戦争を決意し武力発動の時機を十二月初頭と定め作戦準備を完整すると共に対米交渉を継続し十二月一日零時迄に之が成功を見ざる場合には断乎武力を発動すべき御聖断下されたり

而して右の御決定は対米交渉成立せざる場合に於て武力発動を実施する如く定められあるを以て特に軍は天命の下其進止を明かにすることは勿論他面向後に於ける対米交渉経過の如何に拘らず作戦準備の完整に邁進し聊かの懈怠あるを許さざるは茲に多言を要せざる所なり本件決定國策の趣意を体し且統帥部の真意を諒とせられ度切望に堪へざる次第なり

尚命令中にも示されたる如く作戦準備間一英蘭軍の攻撃を

受けたる場合は自衛の爲之を邀撃することを得るも此際紛争の事態を局地に解決し不期の開戦に至らざる如く特に万全の注意有らんことを切望す又作戦準備間は固より作戦実施間に於ても印度支那及泰國に対しては従来通り勉めて友好關係を保持し政略上大局の不利を来さざる如く留意せられ度

而して一度開戦とならんか帝國は政戦両略の手段を尽して戦争の短期終結に勉めざるべからず然りと雖も其終末は遽かに予測を許さざるものあり正に肇國以来の大業にして軍の責務真に今日の如く重且大なるはなし希くば作戦の企画指導宜しきを制し特に帝國海軍との協同に遺憾なからしめ速かに作戦目的を完遂し全局の戦争指導に絶大の寄与有らんことを切望して止まず尚作戦計画其他に關しては後刻幕僚をして説明せしむ

寺内大將は當時の陸軍における現役大將の長老であり、それまで軍事參議官の職にあつた。南方軍總司令部は、秘密裡に陸軍大学校において編成せられ、總參謀長以下幕僚の補職を見、直ちに作戦準備業務を開始した。總參謀長には特に參謀次長塚田攻中將が選ばれた。

寺内總司令官は、大本營より示された作戦要領及び陸海軍中央協定に基き、南方軍の作戦計画を策定し、十一月十日隷下各軍司令官等を大本營陸軍部に招致してこれを内示し、作戦準備に關する命令を下達した。

又同日寺内總司令官は、聯合艦隊司令長官山本五十六大將及び聯合艦隊麾下の南方部隊指揮官たる第二艦隊司令長官近藤信竹中將と陸軍大学校において会見して、南方作戦に關する所要の協定を行い、更に十四日には寺内大將隷下各軍の指揮官及び幕僚は山本大將麾下各艦隊の指揮官及び幕僚と山口県岩國において会同し、協同する陸海軍毎に所要の協定並びに作戦打合せを実施した。

かくして作戦準備業務が逐次進捗するうち、十一月十五日午前零

時を以て南方軍戦闘序列に基く各軍及び部隊の隸屬關係が成立し、ここに南方軍の統帥は發動せられたのである。尤もそれ以前においても南方軍總司令官は作戦準備に關し各軍を区処し得る如く定められていた。

〔南方軍の作戦計画〕 右南方軍統帥發動の日に、南方軍總司令官は、既述の如く「南方要域を攻略すべき」旨の大本營命令を受領した。任務達成のための南方作戦計画の骨子は次の通りである。

南方作戦の目的は、東亞に於ける米國、英國及び蘭國の主要なる根拠を覆滅して、南方要域を占領確保するにある
作戦はこれを三期に区分し概ね左の如く指導する

第一期作戦

馬來に対する先遣兵団の上陸と比律賓に対する空襲とを以て同時に作戦を開始し、続いて航空作戦の成果を利用し、主力を以て先づ比律賓に、次いで馬來に上陸せしめ速に比律賓及び馬來を攻略する。別に開戦初頭一部を以て英領ボルネオの要地を急襲占領する

以上の間成るべく速に蘭領ボルネオ、セレベス、モルッカ並にチモールの要地を、次いで馬來作戦の進捗に伴ひ、南部スマトラの要地を占領し、爪哇に対する作戦を準備する

第二期作戦

速かに爪哇方面の敵航空兵力を制圧して同島を攻略する

第一期第二期作戦間機を見て、南部緬甸の航空基地を奪取する

第三期作戦

占領地域を安定確保し、状況之を許す限り緬甸処理の爲の作戦を行ふ

右作戦の爲南方軍に充當される兵力は、十一箇師団と二箇飛行集團を基幹とし、各方面に対する兵力部署の概要を次の如く定める

一、比島方面

第十六師団、第四十八師団及び第六十五旅団を基幹とする第十四軍をして作戦せしめ第五飛行集団をこれに配属する

二、馬來方面

近衛師団、第五師団、第十八師団（川口支隊欠）及び第五十六師団を基幹とする第二十五軍をして作戦せしめ、第三飛行集団を南方軍直轄の下に主として馬來方面の航空撃滅戦及び地上作戦協力に任せしめる

但し近衛師団は初期第十五軍司令官の指揮下にあつて泰國の安定確保に任ずる

三、泰國及び緬甸方面

第三十三師団及び第五十五師団を基幹とする第十五軍を以て泰國を安定確保すると共に、馬來方面の作戦を容易ならしめ、併せて緬甸方面に対する作戦を準備する

初期近衛師団を其の指揮下に入らしめ、又比島方面の情勢許すに至れば、第五飛行集団を該方面に転用する

四、仏領印度支那方面

第二十一師団を以て安定確保に任じ、特に重慶軍の侵入に対し警戒する

五、蘭領印度方面

第二師団、第三十八師団、第四十八師団及び混成第五十六歩兵団を基幹とする第十六軍を以て作戦せしめ、第三飛行集団を馬來方面の作戦に引続きこれに協力せしめる

但し第三十八師団及び第四十八師団は、夫々開戦当初香港及び比律賓の攻略に任じたる後之を転用せしめられる

六、ボルネオ方面

第十八師団の歩兵第三十五旅団（一聯隊欠、旅団長川口清健少将）を基幹とする川口支隊を以て作戦せしめる

〔南方攻略命令〕 寺内総司令官は大本営命令及び右作戦計画に基

き、十一月二十日東京において、隸下各部隊に対し左の如き要旨の南方攻略に関する命令を下達した。

一、大本営は帝國の自存自衛を完うし大東亜の新秩序を建設する為南方諸地域の攻略を企図せらる

二、南方軍は海軍と協同し速かに南方要域を攻略せんとす
主作戦を先づ馬來及び比島方面に指向し兩方面に対する同時作戦を開始し短期間に作戦目的を完遂す

進攻（進入）作戦開始に関しては別命せらる
三、第十四軍は左記に拠り比島方面の敵を撃破し其の主要根拠特に首都マニラを迅速に攻略すべし

1 開戦劈頭呂宋方面の敵航空勢力に対し空襲す

2 先遣諸隊を以て航空第一撃の前日以降夫々其の集合点を出発し呂宋島北部及びレガスピ附近に上陸し航空基地を占領す

航空部隊は右に伴ひ航空基地を推進し航空作戦を続行す

3 軍は右作戦の成果を利用して作戦第十五日頃迄に主力を以てリンガエン湾附近に一部を以てラモン湾附近に上陸し速かにマニラを攻略す

四、第二十五軍はシンガポール攻略の為左記に拠り先づ馬來方面に急襲上陸を敢行し且勉めて南方に地歩を獲得すべし

1 有力なる先遣兵団を以て作戦開始日零時以降泊地に進入し中部馬來半島東岸に急襲上陸し速かに航空基地を占領し且勉めて前方に地歩を獲得す

2 軍主力は概ね作戦第二十六日頃迄に夫々南部泰に上陸を開始し当面の敵を撃破しつつ馬來西海岸方面を南下突進す

五、第十五軍は開戦初頭泰國に進入し第二十五軍の作戦を容易ならしむると共に勉めて同國の安定を確保し且同方面よりする對蔣封鎖を実施し併せて緬甸に対する爾後の作戦を準備すべし

六、第三飛行集団は開戦初頭先づ主として英領馬來方面敵航空勢力を攻撃し次いで一部を以て緬甸方面敵航空部隊を撃滅すると共に主力を以て第二十五軍一部を以て第十五軍の作戦に協力すべし

七、第十六軍は速かに一部を以てダバオ、ホロ島及びタラカン島を次いでバリックバパンを占領し所要の航空基地を獲得すると共に資源要域を確保すべし

第十六軍はバラオ島集合点に於ける警戒等に関し第十四軍の部隊を区処すべし

ダバオ占領部隊の集合点出發日時に關しは第十四軍の区処を受くべし又ダバオ占領後第十四軍の部隊は同軍に復帰せしむべし

八、川口支隊は開戦後集合点を出発し先づミリ、セリヤを攻撃して資源要域並に航空基地を確保し引続き成るべく速かにクチン附近飛行場を占領すべし

九、比島、英領馬來及び緬甸等の占領地に対しては治安を恢復し国防重要資源を取得し且軍自活の途を確保する為第十四軍、第十五軍、第十六軍、第二十五軍及び川口支隊は夫々当該方面の軍政施行に任ずべし

十、作戦時刻は日本中央標準時に依るべし

十一、予は東京に在り十一月二十五日出發先づ台北に到る

右命令は、開戦後四十日乃至五十日間における隸下各軍及び兵団の作戦行動を律せんとするものであつた。そこで第十四軍に対しては、比島方面の作戦目標たるマニラ攻略までの任務を与えられたが、その他の軍に対しては、作戦初動の任務のみが与えられた。命令を直接伝達するため総軍作戦參謀荒尾興功中佐は、飛行機で台北、広東、西貢に飛んだ。当時第十四軍司令部は台北、川口支隊司令部は広東、第十五、第二十五軍司令部及び第三飛行集団司令部は

西貢にそれぞれ位置していた。

〔「寿甲第五号」発令〕 寺内総司令官及びその幕僚等は、隠密裡に十一月二十五日台北に進出した。

寺内総司令官は、和戦の廟議決定が十二月初頭になされることを知っており、又その幕僚は大本營幕僚との間に、開戦の場合における進攻作戦開始の命令、即ち既述の大陸命第五六九号（驚）について予め打合せが済んでいた。

十二月二日、南方軍は大本營より右驚命令発令の軍機電報に接するや、午後四時四十一分隸下各軍に対し、「寿甲第五号ヤマガタとす」と緊急打電した。この電報受領と共に開封すべき密封命令が予め各軍に送達せられていた。それは云うまでもなく十二月八日進攻作戦を開始すべき南方軍命令であつた。

南方軍総司令官は十二月四日西貢に進出し第二十五軍先遣兵団は、同日早朝三亜を出港した。又第三飛行集団は華南及び北部仏印の中間展開位置より南部仏印に進出して、五日展開を完了した。この頃南方軍は英軍が我先だち泰國に進入した場合、又は英軍、時として米軍が真面目な空海の先制攻撃を加えて来た場合等の作戦指導に關しても、真剣に画策し、これに伴う作戦命令を準備していたが、いづれも発動には至らなかった。

〔聯合艦隊の作戦要領〕 十一月五日、聯合艦隊司令長官山本五十六大將は、作戦準備実施に關する大本營命令を受領するや、同日直ちに佐伯灣旗艦長門において、「聯合艦隊命令作戦第一号」を以て、聯合艦隊の作戦計画を示達した。この作戦計画は固より大本營との内連絡に基き、事前に作成せられていたものである。

海軍は南方要域の攻略概成までの間の作戦を第一段作戦、爾後の作戦を第二段作戦と区分し、聯合艦隊は第一段作戦を更に左記の如く三期に区分した。

第一期作戦

開戦より概ね比島攻略陸軍主力上陸完了までの作戦

第二期作戦

第一期作戦後より概ね英領馬來攻略陸軍主力上陸完了までの作戦

第三期作戦

第二期作戦後より蘭印攻略作戦一段落までの作戦

第一段作戦中に米国主力艦隊が米攻ずるかも知れぬということは当然予期し且つ懸念せられた。この場合においても大本営は比島及びマレー作戦は依然これを継続する方針であつて、聯合艦隊は第三艦隊及び南遣艦隊をこれに充てるが、その他の部隊は挙げて対米遠撃作戦に転移する計画であつた。

〔海軍南方部隊の作戦要領〕 第一段作戦において、南方軍と協同して南方攻略作戦に任ずる海軍は近藤第二、第三艦隊司令長官の指揮する南方部隊であつた。南方部隊は、第二艦隊、南遣艦隊及び第十一航空艦隊を基幹とするもので、その作戦方針は概ね次の如きものであつた。

南方部隊は局所に優勢を持しつつ比律賓、英領馬來及び蘭印方面

部 方 南		部 隊
隊 部 島 比	隊 部 方 南 本	指 揮 官
司 隊 艦 三 第	率 直	兵力の概要(時期により若干の変更がある)
重巡五、輕巡五、空母一、水空母三、駆二九、根拠地隊二、搭載機一〇四 航空兵力の一部は馬來部隊	戰二、重巡二、駆一〇、搭載機一二	方面作戦 の位置
島 比	比 南 海 支 那	開戦時
美大島 方面	馬 公	任 務 の 概 要
一、所在方面敵艦艇擊滅 二、開戦劈頭バタン島を占領すると共に、陸軍と協同アバリ、ビガン、ラオアグ、レガスビー及ダバオを攻略、航空基地を整備し次いで成るべく速かにホロ島を攻略す		開戦初頭馬公方面に在りて敵有力艦艇の出現に應ずる態勢を整えつつ全作戦を支援す

所在の敵艦隊を掃蕩擊滅すると共に陸軍と協同して左の如く作戦す

- (イ) 英領馬來及び比律賓に對し同時に作戦を開始し同方面所在敵航空兵力及び艦隊に對し先制空襲し反覆攻撃すると共に、成るべく速かに陸軍先遣兵団を馬來及び比律賓次いで英領ボルネオの要地上陸せしめ航空部隊を推進し航空作戦を強化す
 - (ロ) 前項作戦の成果を待ちて陸軍攻略兵団の主力を比律賓次いで馬來に上陸せしめ速かに之を攻略す
 - (ハ) 作戦初期セレベス次いで蘭領ボルネオ、南部スマトラの要地を、又機を見てマラッカ諸島、チモール島の要地を占領し所在の航空基地を整備す
 - (ニ) 前項の航空基地整備次第逐次航空部隊を推進して爪哇方面敵航空兵力を制圧し其の成果を待ちて陸軍攻略兵団の主力を爪哇に上陸せしめ同島を攻略す
- 前記作戦方針に基く南方部隊の兵力部署の概要は左表の通りである。

2 対泰進駐

〔進駐交渉開始時刻〕 泰国を日本の陣営に引入れ、これが安定確保を図ることは、南方攻略作戦及びその後の長期持久作戦遂行のため絶対不可欠の要件であつた。然し既に述べた如く、泰国の動向は、ビボン首相の親日的態度と独裁力とに多分に期待しながらも、

隊 指 揮 官		
隊 部 空 航	隊 部 来 馬	官 長 令
官長司令隊艦空航一十第	官長司令隊艦遣南	官 長 令
陸上航空隊五隊半、駆二、所属機三〇八	重巡五、輕巡三、練巡一、駆一六、潜一六、水空母三、陸上航空隊二隊半、根拠地隊二、所属及搭載機一九一 航空部隊の一部は中途比島部隊より増加	に中途増加
オネルボ及印蘭島比	来 馬 及 部 南 印 仏	面
主力台 湾 一部パ ラオ	主力三 重及仏 印南部 潜水艦 新嘉坡 方面一	一部パ ラオ方 面
一、比島に対する先制空襲を以て作戦を開始し速かに同方面敵航空兵力を撃滅す 二、作戦の進捗に伴ひ漸次基地を進出して蘭印方面敵航空兵力を撃滅す 三、常に作戦海面の索敵を行ひ敵艦艇を捕捉撃滅す 四、ミリ、クチン占領に伴ひ一部を同方面に進出対馬來航空戦に参加す	一、所在方面敵艦艇撃滅 二、開戦劈頭第十五軍の一部及第二十五軍の先遣兵団を泰南南方に揚陸速かに航空基地を確保すると共に陸軍と協同対馬來航空作戦を実施す 三、開戦後成るべく速かに陸軍と協同ミリ次いでクチンを攻撃急速に航空基地を整備し海軍航空部隊の一部を進出せしむ 四、×十〇日頃第二十五軍主力を泰南部方面に揚陸す（護衛兵力の一部は比島部隊）	三、×十〇日頃第十四軍主力をリンガエン湾附近に一部をラモン湾附近に揚陸す 四、比島作戦一段落後一部を以て比島作戦を続行し大部を以て蘭印作戦を開始す

その複雑な国内事情からして、遽かに逆略し難いものがあるとされていた。又わが方が将に実施せんとしている進駐要領と相似形の措置を、英側が一步先に行うのではないかとの懸念がある状況であつた。当時泰国は厳正中立を強く標榜してはいたが、それは日英いづれに対しても所詮不可能な実情にあつた。

大本營は、既に述べた大本營政府連絡會議決定「対泰措置要領」

に基き、十一月二十四日南方軍総司令官に対し、「對泰措置要領」を示すと共に大要次の如く指示した。

一、南方軍総司令官は海軍と連繫し駐泰大使の実施する交渉に伴ひ進入に関する一切の軍事的事項に関し泰國当事者との交渉に任ず

二、前項の交渉開始の時機は××日十八時以降×日零時以前と予定す

三、南方軍総司令官は駐泰大使に対し同大使の実施する對泰交渉開始の決定時刻を努めて××日十八時以前に通報し且右交渉を援助するものとす

四、進入は對泰交渉の成否に拘らず予定の通実施するものとす但泰國東部国境よりの進入開始並盤谷に対する直接上陸の時機は情況之を許す限り日泰兩軍の衝突を回避する如く決定するものとす

五、情況に依り進入以前に交渉を開始するを不利と認むる場合に於ては予め報告し中央の指示を受くるものとす

六、作戰開始(×日)の命令発令以後我進入に先だち英軍泰に進入するか又は英軍の先制攻撃を受けた場合並右命令発令以前命令に依り進入する場合の措置は概ね前諸項に準ず

これで明かなように、對泰交渉開始の日時は、大本營及び政府は十二月七日午後六時以降八日午前零時以前と概定しているが、その確定的時刻の決定は作戰と密に吻合させるため南方軍総司令官にまかされたのである。而して南方軍総司令官は、その決定した時刻を七日午後六時までに坪上駐泰大使に連絡しなければならなかつた。寺内総司令官は七日に至り、交渉開始時刻をその日の午後十二時と決定した。

【ヒボン首相の苦慮】 さて日英兩國勢力の間に立つて、山雨將に至らんとする無気味な情勢下に、ヒボン政府の苦心は実に容易なら

ざるものがあるだろうことは明かであつた。十一月二十七日夕、ヒボン総理はラジオ放送を以て左の要旨を國民に訴えた。

タイ國人は何れの外國人にも殊更に敵意を持つべきでない。英領マレーや仏印に外國の軍隊が集結したからとて驚く必要はない。外國の宣伝に禍されて輕率盲動するな。タイ國は宜しく國防力を増進し一朝有事の際に備へるべきである。

英、米兩國大使は共に親善條約に基き友好關係を増進することを希望し、日本大使は日本軍の仏印進駐は決してタイ國を侵略する為のものではないと言つてゐる。

タイ國民は一致團結して政府の方針を支持することを希望する。

十二月四日駐泰陸軍武官田村浩大佐は、西貢に到り南方軍に対し、仏印より陸路中部泰への進駐を、南部泰進入より暫く遅らせるよう要望した。その理由に関し、田村大佐は西貢より大本營に対しても、次の如き報告を寄せた。

小官三日十五時ヒボン首相と會談し「日本軍が中央泰への進入を暫定期間控制し泰政府の面目を重んぜられるに於ては日本軍のブラチャップ以南泰領への進入は妨害せず且成るべく速かに挙國積極的に協力する決心なり」との確約を得たり願はくは泰國政府の大乗の希望を察納せられ此の歴史的瞬間に日泰結合の実を打樹て得る如く御処置賜り度

因みにヒボン首相は強烈なる意志を以て泰國政府を指導掌握しあること確実なり

そこで南方軍は、友好進駐実現のために中部泰への進駐を八日正午頃まで遅らせることとした。

【第十五軍の進駐準備】 先ず泰國に進入してこれが安定確保に任じ、爾後ビルマ作戰を担当すべき部隊は第十五軍(軍司令官飯田祥二郎中将、軍參謀長諫山春樹少將)で第三十三師団及び第五十五師団を基幹とするものであつた。

第十五軍司令部は大阪において編成せられ、十一月二十七日西貢に到着した。

四国において編成せられた第五十五師団（師団長竹内寛中将）は、海路十一月二十六、七日頃主力を以て海防、宇野支隊（宇野節大佐の指揮する歩兵第百四十三聯隊基幹）を以て西貢に到着し、又第三十三師団（師団長桜井省三中将）は当時なお華中に位置し開戦後海路バンコックに前進する如く予定されていた。第五十五師団主力は海防より逐次鉄道輸送により南下する予定であるが、その行動開始は開戦後に控制せられた。従つて開戦と共に第十五軍が直ちに使用し得る兵力は、僅かに宇野支隊だけであつた。そこで南部仏印に位置する第二十五軍隷下の近衛師団（師団長西村琢磨中将）が、泰国進駐兵力として一時第十五軍司令官の指揮下に編入されたのである。

第十五軍は前記十一月二十日発令の南方軍命令に基き、翌二十一日近衛師団、次いで二十五日宇野支隊の泰国進駐を部署した。近衛師団は主力を以て陸路より、吉田支隊（吉田少佐の指揮する歩兵一大隊基幹）を以て海路よりバンコックに進駐し、又宇野支隊は海路南部泰寄りの泰湾沿岸の各飛行場に進駐し、次いで速かに南部ビルマ印度洋沿岸の要地ヴィクトリアポイントを攻略する任務であつた。近衛師団主力の進駐開始は十二月八日払暁と予定されたが、十二月五日に至り、既に述べたような経緯で十二月八日正午頃まで遅らせることとなつた。

十二月三日飯田軍司令官は、サンジャック沖に宇野支隊の状況を視察し、伏見丸上において宇野支隊に対し、十二月八日泰国進駐を開始すべきを命令した。

これより先第十五軍は、進駐に伴う泰国との軍事折衝処理のため参謀副長守屋精剛少将以下をバンコックに先遣した。守屋少将は嘗て駐泰陸軍武官を勤めた泰国通であつた。

〔ビーン行方不明―友好進駐成る〕 坪上大使は、南方軍総司令官からの通報に基き、十二月八日午前零時泰国との交渉を開始せんとした。交渉相手は直接ビーン首相であることが是非必要であつた。然るに七日夜遇然にもビーン首相は視察のため東部国境に出張不在であつた。海軍大臣もサヒップ軍港に出張していた。交渉は図らずも大なる齟齬に逢着し、已むなく坪上大使は八日午前一時五十分要求事項を外務大臣に交付した。当時大本営にはビーン首相の行方不明が報ぜられ、日泰両軍の衝突惹起が憂慮せられた。正に九俎の功を一簣に欠く感があつた。果せる哉、泰側の回答は午前三時を過ぎるも到着せず、寺内総司令官は全般の情勢上予定を変更し速かに陸路進駐を決行するに決し、八日午前三時三十分これに関する命令を下達した。

近衛師団主力は十二月八日朝国境を越えて前進し、九日払暁その先頭を以てバンコックに到着した。吉田支隊は六日フコク島を出発し、八日未明バンブ海岸に上陸し夕刻師団主力に先だちバンコックに入つた。

交渉の妥結を見ることなく進駐したため、二、三の地点において若干の紛争を見たが、間もなく泰側は抵抗を中止すべき措置を取り、大事に至らなかつた。そして八日正午には日本軍の通過容認並びにこれに伴う便宜供与及び日泰両軍衝突回避措置の実行に関し、日泰両国間の諒解が成立した。

他方宇野支隊は、十二月五日サンジャック沖を出航し、海軍護衛の下に八日午前八時乃至九時の間主力を以てチュムボン各一部を以てブラチャップキリカン、バンドン及びナコンに上陸し、泰国政府の停戦命令徹底するに従ひ、各上陸点附近の飛行場に友好裡に進駐した。支隊主力はチュムボンにおいて爾後の前進を準備した後、十二月十一日泰緬国境のクラ河畔に進出し、第十飛行団の協力を得て、十四日夜ヴィクトリアポイントを攻略した。

〔日泰同盟条約の締結〕 日本軍進駐後における泰国の態度は急速に好転を見、十二月十日ビボン首相は坪上大使に対し同盟条約締結を確約した。これに関する坪上大使の東郷外務大臣宛十二月十一日発信の電報は左の通りである。日泰同盟条約は十二月二十一日に至り正式に締結された。

一、八日の諒解後軍側の希望もあり更に軍事同盟へ進展方工作中的の所本十日午後七時ビボンより電話あり陸海軍武官帯同往訪す左記趣旨の応酬ありたる後、「対泰措置要領別紙攻守同盟」(但し註を除く)其の儘受諾せしめたり

二、劈頭ビボンより所見を述べると自分(ビ)は予て御約束せし通決して日本を敵とすることなし即ち此の際泰としては対英戦争を決意する一途あるのみなる所国民の親英伝統永く其の輿論を対英戦争に導くこと容易ならず依つて右指導工作第一着手として本夜九時より英国重慶等の謀略を封ずる為全市に戒厳令を布くべく又近く内閣改造を行ふべし即ち日本側の希望せらるる軍事同盟迄には右の如き段階を要すべきものと思はるる所御意見如何と言ふ

依つて本使より閣下の御決意は多とし之を信するも今日此の際右は何等か具体的に実証せられざる限り閣下の誠意を日本国民將又当地駐在の日本軍に知らしむる由なしと協定案を示し本使として直ちに之に御署名を希望致度と言へるにビは一読後応諾の意思を表明直ちに署名すべしと答へたり

三、然るに生憎当方用意の案文に余部なかりし為明朝案文を用意し署名を了すべき旨約束を取付け引取りたり尚其の節本協定は記録の性質を有すべき旨説明し置きたり

右同盟条約の確約を契機として、泰側の態度は更に協調的となり、十二月中旬にはビルマ作戦に関する日泰両軍共同作戦の要綱が決定された。

3 マレー作戦の発起

マレー作戦は、南方攻略作戦中の重点作戦として、最大の努力と苦心とが払われた。この作戦は、敵空海軍の抵抗を排除して行く遠距離渡洋上陸に始まり、約一千軒に及ぶマレー半島の長隘路突破を経て、近代要塞化されたシンガポール要塞の攻略を以て終るのであつて、種々困難な戦略戦術上の問題を含んでいた。而して作戦上最大の問題は云うまでもなく作戦初動における上陸作戦に不可避な危険性の存在であつた。この危険を除くために、事前に敵空海勢力を撃破して制空制海権を獲得した後上陸するのが、上陸作戦の常套戦法である。

しかるに日本軍は既述の如き経緯を以て開戦劈頭の奇襲上陸により、この危険を克服せんとした。そしてそれは見事に成功したのである。

〔マレー方面の敵情、氣象〕 マレーの英当局は日本との衝突不可避と判断したもの如く、陸空軍兵力を北部マレー方面に移動せしめ、十一月下旬にはケダー平地一帯において陸海空軍の大規模な演習を実施した。十二月初頭英国海軍は新東洋艦隊の編制を発表し司令官フィリップス中将は最新式有力戦艦プリンス・オブ・ウェールズに坐乗し、戦艦レバルスを伴つてシンガポールに入港し、極東の事態に睨みを利かせていることを明かにした。

マレー英空軍はその主力をシンガポールに、一部を泰王国境方面に配備し、シンガポール東方海面の艦艇、航空機による哨戒は相当嚴重で、コタバル、クワンタン方面に対しても既に飛行哨戒を開始した。泰王国境方面には有力なる陸軍部隊を配備し、コタバルには少くも九千、ケダー州地区には約二万の兵力がおるものと判断せられた。

マレーにおける氣象の特性は、日本軍の企画した奇襲作戦の成否

に重大な影響を有していた。元来マレー半島は南支那海とベンガル湾とに挟まれているが、その両海湾に生ずる颱風の影響を蒙ることは殆どなく、ただ顕著な季節風の影響がある。即ち十一月頃から翌年三月に至る間は一般に北東信風期で、北東風強く且つ降雨を伴うため、東海岸においては荒天を呈し、その到来はマレーの北部に至るに従つて早いのを常とする。この北東信風期には波高一・五米乃至二米に達し、上陸作戦は殆ど不可能であると見るのが常識であつた。陸海軍統帥部が、開戦時機の決定に関しこの点をかなり重視したことは既述の通りであるが、北東信風期に入つた後において、この作戦が行われたことは敵の意表に出ることになつたのである。又北東信風期には、中央山脈の影響によつて東岸一帯は降雨が多いのに反し西岸は概して晴天である。これもまた航空作戦遂行上かなりの影響があつて、概して日本軍にとつて不利ではあるが、奇襲上陸達成のためには敵機の偵察を困難にする利点があつた。

〔第二十五軍の作戦計画〕 マレー作戦に任ずる部隊は、陸軍は主として第二十五軍と第三飛行集団であり、海軍は南遣艦隊を基幹とするマレー部隊でその麾下に第二十二航空戦隊が属していた。

第二十五軍(軍司令官山下奉文中将、軍参謀長鈴木宗作中将)は、当初近衛師団、第五師団(師団長松井太久郎中将)及び第十八師団(師団長牟田口廉也中将)を基幹とし、十一月二十七日に至り内地で動員した第五十六師団(師団長渡辺正夫中将)を増加せられた。第五師団は上陸作戦専門の師団で、支那事変以来各地に転戦した歴戦の精鋭部隊であつた。

関東防衛軍司令官たりし山下中将は、十一月十五日西貢に到着し十一月二十日前記南方軍命令を受領した。これより先、既に内示せられた南方軍の作戦計画に基き、第二十五軍の作戦計画は十分に研究が進められ、軍司令官着任と共にこれを確定し、第十五軍司令官、第三飛行集団長、南遣艦隊司令長官、第二十二航空戦隊司令官

との間に協定を定つた。

第二十五軍作戦計画の概要は左の如くであつた。

第一 方針

一、軍は開戦劈頭航空部隊及び海軍と協同し主力を以て馬來半島頸部以南の地区に上陸し英國軍を撃破しつつペラク河の線に向ひ突進す第一次上陸に引き続き逐次兵力を増強し航空部隊と協同してクアラルンプールを経てジョホール水道の線に進出し諸準備を整えたる後シンガポールを攻略す

此の間機を見て一兵団を馬來東南海岸に上陸せしめ軍主力の作戦を容易ならしむ

二、状況により軍主力を以てする第一次上陸困難なるを察せらるる場合に於ては一部を南部泰に進駐せしめ同地附近に航空部隊の進出を待つて軍主力の上陸作戦を実施することあり

第二 要領

三、第五師団を基幹とする軍主力部隊は三亞港に集合し海軍護衛の下にペラク河同港を出発しX日払曉主力を以てシンゴラ一部を以てバタニに上陸し夫々飛行場を占領すると共に機を失せず国境を突破し所在の敵を撃破してアールスター及びベトン方面よりペラク河の線に向ひ突進し該橋梁を確保するに努む

四 佯美支隊(筆者註、第十八師団の歩兵第二十三旅団長佗美浩少将の指揮する歩兵第五十六聯隊基幹)は三亞港に集合し軍主力と共にペラク河海軍護衛の下同港を出港しX日払曉コタバルに上陸し所在の敵を撃破して同地附近の飛行場(コタバル東北側飛行場とし状況之を許す限り速かにタナメラ及びクアラベルト飛行場)を占領し爾後軍主力方面の作戦進捗に伴ひ逐次トレンガヌ及びクワンタン方面に機動して飛行場を占領す

状況止むを得ざる場合に於ては軍主力の上陸に遅れて上陸することあり

五、状況により軍主力を以てX日上陸困難なる際に於ては一部を以て馬來半島頸部に上陸進駐せしめ第十五軍と共同し該地附近の飛行場を整備せしめ航空部隊一部の躍進を待つて其の掩護下に軍主力を上陸せしむることあり

六、近衛師団は開戦初頭第十五軍司令官の指揮の下に泰國に進駐したる後陸路及び海路逐次馬來軍主力方面に転進し第五師団の後方に集結し状況により第五師団を推進又は超越突進す特に歩兵約三大隊を基幹とする部隊を遅くもX+15日頃迄に第五師団の後方に集結せしむるに努む

七、第三飛行集団はX+3日迄に南部仏印に展開し一部を以て輸送船団の掩護に任ずると共に開戦初頭海軍航空部隊と協同し主として馬來北部の飛行場を攻撃し敵航空機を撃滅して軍主力の上陸を掩護す爾後主力を以て敵航空を制圧し一部を以て地上作戦に協力す

八、第二次上陸部隊はX+3日迄にカムラン湾に集合しX+8日頃シンゴラ、パタニー、コタバルに上陸し第一次上陸部隊を増強す

軍主力は台灣及び広東附近に於て集合し適時出發海軍護衛の下にX+15日頃主力を以てシンゴラ一部を以てパタニー附近に上陸し第五師団に追及す

九、ベラク河の線に進出せば態勢を整へたる後ベラク河を渡河し(X+15日頃と予定す)クアラランブルに向ひ突進し該地を占領したる後引続き敵を撃破しつつジョホール水道に向ひ前進す

此の間一部を以て舟艇により西海岸を機動し軍主力の作戦を容易ならしむ

十、第十八師団主力は速かに馬來半島頸部に上陸後ベナン島を攻略してベラク河以北の軍の後方地区を安定確保し該方面よりス

マトラに向ふ作戦を準備す

十一、第五十六師団主力は軍主力の作戦進捗に伴ひクワンタン—メルシン間の地区に上陸しジョホール方面に進出し軍主力の作戦に策応す

十二、ジョホール水道の線に進出せば全戦力を集結しシンガポールの攻撃を準備したる後主力を以て陸橋以西の地区よりジョール水道を渡過しシンガポールを攻略す

十三、軍戦闘司令部はX+15日頃西貢出發三連に到り竜城丸に乗船し第五師団第二次上陸部隊と共にX日払暁シンゴラに上陸す爾後状況の進展に伴ひ逐次タイビン、クアラランブル、クルアンに躍進す

第三 実施の細部

一、上陸点及び上陸順序

第一次

1 シンゴラ東側海岸 (右翼隊)

第五師団司令部
歩兵六大隊
砲兵四中隊
戦車三中隊
航空関係部隊

2 パタニー河口西側海岸 一部タバ(左翼隊)

歩兵三大隊
砲兵二中隊
戦車一中隊
航空関係部隊

3 ケランタン河口東側海岸 (佯美支隊)

旅団司令部
歩兵三大隊
砲兵一中隊
航空関係部隊

第二次

主力シンゴラ、一部パタニー及コタバル

第五師団主力の車輛
重砲一大隊
戦車四中隊
佯美支隊の車輛及馬

の如く命令した。

一、軍の任務は神速にシンガポールを攻略し英国極東軍の根拠を覆滅するにあり

南遣艦隊、第三飛行集団及第十五軍は軍の作戦に協力す

二、軍は海軍と協同しX日払暁馬來半島中部東側海岸方面に上陸し主力を以て一挙にベラク河の線に突進し渡河点及飛行場を占領確保して爾後の作戦を準備せんとす

X日は別命せらる

三、第五師団はX-4日朝三亜港を出港しX日払暁主力を以てシンゴラ方面一部を以てタバー及バナニ方面に上陸し飛行場を占領すると共に一部を以てサダオ及ベトン附近以北の要点を確保し爾後成るべく速かに主力を以てサダオ方面、一部を以てベトン方面よりベラク河左岸の線に突進し渡河点及飛行場を占領確保して爾後の作戦を準備すべし

四、佗美支隊は第五師団に続行しX日払暁コタバル方面に上陸し敵飛行場群を占領し軍主力の作戦を有利ならしむべし

状況により上陸を延期する場合にはX-1日一〇〇〇迄に別命す此の際其の船団はフコク島附近に待機すべし

五、第二次上陸の各部隊は戦車第六聯隊長の指揮を以てX-5日頃カムラン湾を出発しX-10日頃主力を以てシンゴラ附近、一部を以てバナニ附近に上陸し速かにスングエイバナニ方面に進出すべし

六、鉄道第九聯隊長は日泰間の協定成立に伴ひ成るべく速かに同鉄道を開拓利用し機を失せずアラカンサルに向ひ突進し軍の作戦を容易ならしむべし

七、予は十一月二十五日以降三亜にあり後電城丸に乗船し第五師団と共にX日払暁シンゴラに上陸す

〔マレー作戦を貫く精神〕 マレーに対する作戦計画及び上陸部署

を貫く精神は、奇襲と突進とに徹するということであつた。

乙案（敵航空勢力撃破後上陸）によることなく、甲案（航空撃滅戦開始と同時に上陸）を採択し、作戦の運命を奇襲の一途に托したことは、既に述べた。更に英領マレーの航空基地たるコタバルに対する上陸に關し、大本營の計画によれば、主力の南部泰上陸後、同地域における航空基地整備の状況が許す限り、成るべく早く実施するのを立前としているが、現地陸海軍は、主力に先だち遅くもそれと同時に決行しようとしている。

又大本營の計画によれば、第二十五軍は先遣兵団を先ず上陸せしめ、その掩護の下に軍主力が上陸して先遣兵団の戦果を拡張する趣旨になつてゐるが、第二十五軍は第五師団を先遣するのではなくして、第五師団を基幹とする軍主力を以て先頭に上陸し、そのまゝ一千料のかなたにあるシンガポールに向つて突進するという精神である。これ正しく超人的突進作戦であつた。

なお南部仏印の基地からする航空協力を以てしては、上陸点附近の制空に欠陥を生ずる虞れがあつた。これを補うためにマレーとの最短距離にあるフコク島に特に予め戦闘飛行場を推進したほか、上陸部隊を以て最も速かに上陸点附近の飛行場を占領確保し、航空部隊をしてこれに膚接して進出させるという戦法を重視した。この方式は、その後反攻米軍が常套的に採用した戦法であつた。

〔第三飛行集団〕 南方軍直轄の下に、マレー方面及びビルマ方面の航空作戦に任ずべき第三飛行集団（集團長菅原道大中将）は、第三、第七、第十二飛行団、第十五独立飛行隊、飛行第八十一戦隊及び航空地上部隊等よりなり、別に第五飛行集團の第十飛行団を増加配属せられ、戦闘約一八〇機、輕爆約一〇〇機、重爆約一三〇機、司令部偵察約四五機計約四五〇機の勢力であつた。なお比島作戦の一段落に伴い、ビルマ方面作戦強化のため、第五飛行集團が泰方面に転用される予定であつた。

南京に司令部を置き、中国方面の作戦に任じていた第三飛行集団は、戦闘司令部所を十一月十六日西貢に、十二月一日更にブノンペンに進め、作戦準備の促進を図った。

これがために航空地上部隊は、飛行部隊に先だち十一月末までに、主として南部仏印に展開を終り、飛行部隊の大部は、既に述べた如く開戦の廟議確定を見るまでは北部仏印以北の地域に中間展開し、十二月二日進攻作戦開始の発令に伴い、直ちに南部仏印に進出して五日概ね作戦展開を完了した。

第三飛行集団は、主力を以てマレー方面、第十飛行団を基幹とする一部を以てビルマ方面の航空作戦に任せしめる方針の下に兵力を部署した。その開戦劈頭に直面する作戦の山は、マレー方面の航空撃滅戦、輸送船団の上空直衛及び第二十五軍の上陸に膚接する航空部隊のマレー躍進であつた。

集団長はこれらに関し周到な計画を策定した。航空撃滅戦は飛行

機の性能上、陸軍航空は北部英領マレー、海軍航空は南部英領マレーに対し行う如く計画せられ、第三飛行集団は攻撃の重点を敵の雷撃隊飛行場に指向し、特に戦闘隊の焼夷弾、炸裂弾及び銃撃による対地攻撃を重視した。又航空部隊の上陸に膚接するマレー躍進においては、遅くも開戦第二日に、第十二飛行団を基幹とする先鋒部隊を挺進させる如く部署した。この第十二飛行団は嘗てノモンハン事件において勇名をはせた陸軍戦闘機部隊の最精鋭であつた。

〔海軍マレー部隊〕 マレー作戦及びタイ国進駐に陸軍と協同する海軍部隊は、南遣艦隊司令長官小沢治三郎中将の指揮するマレー部隊で、その兵力は南遣艦隊に第七戦隊、第三水雷戦隊、第四、第五潜水戦隊及び第二十二、第十二航空戦隊等を加えたものであつた。第二十五軍第一次上陸に策応するためのマレー部隊の兵力部署の大意は左表の通りである。

護 衛 本 隊			馬 来 部 隊 主 隊	軍 隊 区 分
本 隊	第一護衛隊	第二護衛隊	第七戦隊	部 隊
本 隊	第三水雷戦隊	香 椎、占 守	全 作 戦 支 援	任 務
一、敵海上兵力の撃滅 二、輸送船団の護衛	一、第二十五軍先遣兵団第一次上陸部隊を直接護衛し之をシンゴラ、タバー パタニー、コタバールに上陸せしむ 二、敵海上兵力の撃滅	第十五軍の一部を直接護衛し之をナコン、バンドン、チュムボン、プラチャ ッブ等に上陸せしむ		

隊部 水潜		根 拠 地 部 隊	第 二 航 部 空 隊	第 一 航 空 部 隊
第五潜水部隊	第四潜水部隊			
第五潜水戦隊	第四潜水戦隊	第九根拠地隊	第十二航空戦隊	第二十二航空戦隊
三、敵状況偵察		一、輸送船隊の間接護衛 二、シンゴラに上陸根拠地（状況によりパタニーに補助上陸根拠地）設置 三、シンゴラ水上基地設置援助	一、輸送船隊航行中の護衛、シンゴラ、パタニーの泊地対空警戒 二、シンゴラ水上基地設置	一、敵航空兵力及艦艇攻撃 二、索敵偵察 三、シンゴラ、パタニー泊地の対空警戒 四、輸送船隊航行中の対空警戒 五、航空基地の対空警戒
二、シンガポール海峡に機雷敷設 一、主としてシンガポール方面より北上する敵艦艇攻撃				

右兵力部署に基き、マレー部隊の主力は十一月二十六日海南島三亜に集結を終り、航空部隊は十二年六日までに南部仏印に基地を推進し、且つその水上機部隊は仏印沿岸を基地とする輸送船団警戒の配備に就いた。

【奇襲上陸成功——我が領事館熱睡中】 第二十五軍司令官は、十一月二十五日正午、参謀長以下の幕僚を随え空路西貢より三亜に到着した。この頃第一次及び第二次上陸部隊は、計画に基き各方面より集合点たる三亜に向い集合中であつた。軍司令官は同日夕、松井第五師団長、牟田口第十八師団長、佗美支隊長及び鉄道第九聯隊長等を集め、上陸に関する前記命令を下達した。

十二月二日夕刻、第二十五軍は「春甲第五号」の発令に接し、四日午前六時三十分マレー部隊護衛の下に勇躍三亜を出港した。それは海軍機動部隊がミッドウェー東北方海面において、ハワイに向つて南東に変針した直後であつた。第二十五軍の将兵は、遙か太平洋のかたにおいて、かかる壮挙が行なわれんとしていることを全く知らなかつた。

航路は計画に従い三亜出港後五日夕までは真南に南下し、それより印度支那半島南方海面を西航し、六日夜半進路を西北方に転じ、恰もタイランド湾をバンコックに向う如く装い、七日正午フコク島西南方の地点において急遽西南に進路を変更してシンゴラ、パタニ

一、コタバルに分進するものであつた。この航路は、これより先印支ルート遮断のため泰方面に兵力を派遣するとの陽言を放ち、これを裏書する如く選んだものであつた。

船団は六日正午頃敵機の接触を受け、七日敵艦隊シンガポールを出撃したる疑いありとの海軍情報に接し、頓に緊張を加えたが、何等の妨害を受けることなく、予定より早く七日午前十時三十分分進点に到着した。七日朝来第三飛行集団は常時数機の戦闘機を以て上空を掩護した。船団はこれより上陸点に向い、西南に分進を開始し、七日夜正子前後それぞれ泊地に進入した。当夜は日没午後八時、月出午後十一時、月齢十八であつた。

シンゴラ、パタニー方面の第五師団は、泊地進入後直ちに上陸用舟艇の泛水及び移乗を開始した。作業は月明に助けられたが、前夜来荒天の余波により、波高一・五米乃至三・二米に達して困難を極め、予定より著しく時間を要した。しかし幸にも遂に敵の発見を受けず、シンゴラにおいては午前四時十分、パタニーにおいては同四時三十分いづれも何等の抵抗なくして上陸に成功した。この附近民家は煌々と燈火がともり、シンゴラの我が領事館は日本軍の上陸を知らず熟睡中であつた。

山下軍司令官は第二回上陸部隊と共にシンゴラに上陸した。

●「コタバル強襲 淡路山丸沈没」 一方コタバル方面佯美支隊の上陸は、果然空陸の敵の抵抗に際会した。淡路山丸、綾戸山丸、佐倉丸の三隻よりなる優秀船団は、第三水雷戦隊司令官橋本少将の指揮する第一護衛隊主力護衛の下に、七日午後十一時三十分頃泊地に進入投錨し、第一回上陸舟艇群は早くも八日午前一時三十分敵岸に向つて発進した。潮流のため西方敵陣地に近く流され、敵銃砲火を排して上陸を敢行した。時に午前二時である。

午前三時三十分頃から、敵機三、四機反復来襲し、果敢なる対空応戦によりその七機を撃墜したが、淡路山丸は直撃弾多数を受け、

午前五時三十分火災を起し、綾戸山丸、佐倉丸もまた被害を生じた。佯美支隊長は第二回上陸終了を以て揚陸を中止し、八日夜これを再興するに決し、第一護衛隊指揮官は、綾戸山丸、佐倉丸を伴つてパタニー方面に避退した。日没後反転し、九日黎明より揚陸を再興し、九日夕までにこれを完了した。淡路山丸は沈没し、他の二隻も大破したが航行は可能であつた。この淡路山丸の沈没は、大東亜戦争における船舶喪失の最初のものであつた。

〔青木戦艦飛行団〕 第三飛行集団は、八日天明と共に航空撃滅戦を開始した。その第一撃をコタバル及びケダー地区の敵航空に指向し、開戦二日にして敵を圧倒し、マレー英空軍の約三分の一を屠り、敵航空をシンガポール地区に退避潜伏せしめた。

第十二飛行団長青木武三少将は、八日仏印基地において上陸部隊の飛行場占領の報を鶴首待機していたが、午前九時に至るも確報に接せず青木飛行団長は敵中着陸を予期し、全力を以て出動、飛行第一戦隊をシンゴラ飛行場、飛行第十一戦隊をパタニー飛行場上空に前進せしめた。飛行団長は先頭にあつて飛行第一戦隊を直接指揮しシンゴラ上空を游弋したが敵影を見ず、飛行場既に我軍の手中にあるを知り、午前十一時十分敢然シンゴラ飛行場に着陸し、パタニー飛行場浸水大なるため飛行第十一戦隊も亦これに続いた。

海軍の第二十二航空戦隊は八日未明長駆シンガポールの航空兵力及び軍事施設に第一撃を加えて敵の心胆を奪い、翌九日午後クワンタン飛行場を銃爆し、かくしてマレー方面航空撃滅戦の大勢は既に決した。

4 英東洋艦隊の覆滅

〔プリンス・オブ・ウェールズの出現〕 英国東洋艦隊の主力たる戦艦プリンス・オブ・ウェールズ及びレパルスの動静は、マレーに対する第一次上陸作戦中全軍の齊しく関心を寄せたところであつた。

十二月八日午後第二十二航空戦隊の空中偵察によれば、シンガポール湾内には戦艦二隻、巡洋艦二隻、駆逐艦四隻を確認し、この戦艦はプリンス・オブ・ウェールズ及びレパルスであると判断せられた。翌九日午後の空中偵察でもその在泊が報ぜられ、敵主力は依然シンガポール湾内に待機中なるものと推定された。

然るに九日午後五時十分、突如伊六十五潜水艦に坐乗した第三十潜水隊司令より「敵レパルス型戦艦二隻見ゆ。地点プロコンドル島の一九六度、二二五哩、針路三四〇度、速力一四節」との警報が発せられた。敵主力艦は我が上陸船団を襲うべく正にトレンガヌ沖を北上中である。

上陸海面からカムラン湾に向け引揚中のマレー部隊は、直ちに遠撃配備に就き、上陸点の輸送船は、タイランド湾に速かに避退する如く措置せられた。

マレー部隊指揮官小沢中将次いで南方部隊指揮官近藤中将の示達した戦闘方針は、航空機及び潜水艦によつて極力接触を確保し、翌十日天明を待ち、航空部隊の全力を挙げて敵艦隊を攻撃し、且つ水上部隊を集結してこれに策応するにあつた。

九日夜から十日にかけて、マレー部隊は搭載機及び潜水艦により、躍起となつて敵艦の接触に努めたが、降雨に妨げられて敵を見失ひ勝ちであつた。十日午前三時四十一分、伊五十八潜水艦は反転南下中の敵艦隊を発見し、洋上速力一六節を以てこれを追蹕したが、午前四時三十分遂に接触を失つてしまつた。

南下中の南方部隊主隊と北上中のマレー部隊とは、十日午前四時頃プロコンドルの東南方約五十哩の地点で合同し、敵艦隊を索めて南下を続けたが、右報告に接し、到底追及の見込みなしとして午前八時十五分追撃を断念した。

〔チャーチル首相の落胆〕 一旦見失われた敵艦は、十日午前十一時五十六分クワンタン東方約四〇哩附近を南下中なることが発見さ

れた。第二十二航空戦隊を基幹とする海軍航空部隊は全力を挙げた。敵艦隊に殺到し午後零時十四分から午後二時五十分迄に亘りこれに猛撃を加え、遂にプリンス・オブ・ウェールズ及びレパルスを撃沈した。

我方は自爆三機、戦死二十一名を出したに過ぎなかつた。国民は歓喜し、全軍の将兵は海軍航空の敢闘に心からの感謝を捧げた。

チャーチルは「第二次大戦回顧録」において、この時のことを次の如く述べている。

十日の日に私が書類筐をあけていると寝台の電話がなつた。それは軍令部長であつた。彼の声はへんだつた。せきをしているようでもあり、込み上げてくるものをこらえているようでもあり、初めは明瞭に聞きとれなかつた。「総理、プリンス・オブ・ウェールズとレパルスが両方とも日本軍に——飛行機だと思ひます——沈められたことを報告しなければなりません。トム・フィッブスは水死しました。」「その通りかね。」「全く疑いの余地はありません。」「で私は受話機を置いた。私は一人きりであつたことが有難かつた。戦争の全期間を通じて、私はこれ以上の直接の衝撃を受けたことはなかつた。

5 比島作戦の発起

フィリピンは大小七千余の島からなつており、最大の島はルソン島で朝鮮の約半分位、第二のミンダナオ島が北海道より稍々小さく、第三はサマール島で四国より稍々小さく、以下ネグロス島、パラワン島、バナイ島、ミンドロ島、レイテ島、セブ島が順次これに次ぐ大きさである。

然し開戦初頭において日本軍が直面した比島作戦は、主としてルソン島にある首都マニラの攻略とミンダナオ島のダバオの占領とであつた。マニラは米国の極東における根拠地と共比島の政治、

軍事、経済の中核であり、又ダバオは南部比島の政治、軍事、経済の要衝である。両者を我が手中に収めれば即ち全比島を制し得て、既に述べたような比島攻略の戦略目的を達成出来ると考えられた。

尤もルソン島の作戦終了後、残敵掃蕩のため一部の作戦を中部比島方面に続行する必要は予想せられていた。

〔正攻法の上陸作戦〕 比島攻略に任ずる部隊は、陸軍は第十四軍（軍司令官本間雅晴中将、軍参謀長前田正実中将）及び第五飛行集団（集団長小畑英良中将）海軍は第三艦隊を基幹とする比島部隊（指揮官高橋伊望中将）及び第十一航空艦隊（司令官長官塚原二四三中将）のほか、南方部隊本隊及びマレー部隊がこれを支援することとなつてゐた。

第五飛行集団は比島作戦間第十四軍司令官の指揮下に入らしめられた。第十四軍は第十六師団（師団長森岡⁺中將）第四十八師団（師団長土橋勇逸中將）及び第六十五旅団（旅団長奈良晃中將）を基幹とする兵力で第六十五旅団は守備兵団であつた。なお我が航空勢力は、第五飛行集団が約二〇〇機、第十一航空艦隊が約三〇〇機、計約五〇〇機であつた。

既に述べた如く、マレー作戦は奇襲上陸を主眼として航空攻撃と上陸とを同時に実施したが、比島作戦においては上陸作戦の正攻法を採用した。それは即ち先ず航空撃滅戦を行い制空権を得たる後、上陸作戦を開始せんとする方式である。この航空撃滅戦は、比島に對しては主として彼我航空の戦力及び配置に鑑み、我が方に十分な自信を持ち得たのである。

然し航空撃滅戦を有利に遂行するためには、比島においてもやはり速かに敵地に航空基地を推進する必要があつた。而して比島の地勢は、ルソン島内といえどもその軍事中核より隔絶した要地に一部兵力の先遣による航空基地の推進確保を容易ならしめていた。

〔作戦計画の一般構想〕 かくして比島攻略作戦計画は次の如き一

般構想に基き策定された。

一、作戦の成否を航空撃滅戦の帰趨に賭け開戦劈頭より陸海軍基地航空兵力を以て台湾及びパラオを基地としてルソン島の米空軍に對する航空撃滅戦を遂行する

此の間一部の母艦航空兵力を以て、ミンダナオ島方面を攻撃して右航空撃滅戦に策応せしめる航空撃滅戦の分担は、北緯十六度（概ねリンガエンを東西に通ずる線）以北を陸軍、同以南を海軍とする

二、 $\times$ 12日乃至 $\times$ 14日陸海軍先遣部隊を以て、バタン島（バシー海峡）アバリ、ビガン、ラオアグ、レガスビー（以上いずれもルソン島）の各所在飛行場を占領確保し、これを前進航空基地として航空作戦を強化す

敵航空主力の撃破は開戦後概ね三日、残存勢力の撃滅は開戦後概ね九乃至一二日を以て達成するを目的とする

三、 $\times$ 15日頃攻略部隊たる第十四軍の主力をリンガエン湾に、一部をラモン湾に上陸せしめ、マニラを挟撃攻略する

ルソン島に於ける米比軍との会戦をマニラ周辺地区に予期し、マニラ市の攻防戦により敵野戦軍を撃破す マニラ市の占領を $\times$ 15日頃と予定する

四、 $\times$ 16日頃第十四軍の一部を以て蘭印攻略軍たる第十六軍の一部と協力して、ミンダナオ島のダバオを占領し、邦人約二万三千の救出及び航空基地の推進を図るのほか、比島の背後を戦略的に分斷す

〔兵力部署の概要〕 右作戦構想に基く第十四軍の兵力部署の概要は左表の通りである。

十一月六日戦闘序列の発令以来、第十四軍の作戦準備も、さきに述べた如き他軍と同様の経過を以て着々進歩した。

〔分進合撃のための集中展開〕 十一月十五日統帥発動当時にお

陸 上 次 一 第	隊 部 遣 先				軍 隊 区 分
	三 浦 支 隊	木 村 支 隊	菅 野 支 隊	田 中 支 隊	
リンガエン (軍の主力)	第四十八師団の台湾歩兵第二聯隊(一大隊半欠)基幹 航空地上勤務部隊の一部 船舶工兵の一部等	第十六師団の歩兵第三十三聯隊(一大隊欠)基幹 海軍航空地上勤務部隊の一部 船舶工兵の一部等	台湾歩兵第二聯隊の一大隊半基幹 航空地上勤務部隊の一部 船舶工兵の一部等	第四十八師団の台湾歩兵第二聯隊(一大隊半欠)基幹 航空地上勤務部隊の一部 船舶工兵の一部等	任 務
軍司令部 第四十八師団(台湾歩兵第二聯隊基幹欠) 第十六師団の歩兵第九聯隊基幹軍直轄の各種特科部隊の大部 航空地上勤務部隊の大部 船舶工兵の大部等	歩兵第三十三聯隊の一大隊基幹 海軍航空地上勤務部隊の一部 船舶工兵の一部 第十六軍の坂口支隊(混成第五十六歩兵団基幹)の指揮下とす	レガスピー飛行場占領確保	ビガン及びラオアグ飛行場占領整備	アパリ飛行場占領整備	
リンガエン湾に上陸し主力を以てカバナツアン方面一部を以てタルラック方面よりマニラに向ひ敵野戦軍を撃破してマニラを占領す	ダバオ飛行場の占領確保 爾後坂口支隊はホロ島を経てタラカンに向ふ	オ ラ パ	公 馬	公 馬	点集合
雄高・公馬・隆基	オ ラ パ	日 X	日 X	日 X	日 出発
X + 9 ~ 10日頃	日 X	日 X	日 X	日 X	日 時 発
湾ンエガンリ	オ パ ダ	ーピスガレ	ン ガ ビ	リ パ ア	点 上 陸
X + 15日	X + 6 日	X + 4 日	X + 2 日	X + 2 日	日 上 陸 時

る第十四軍隷下部隊の態勢は、軍司令部は台北、第四十八師団は主力台北一部海南島、第十六師団は京都師管区内、第六十五旅団は広島師管区内、爾余の軍直轄部隊は中国、満洲及び内地にそれぞれ位置していたが、大本营所定の集中計画に従い、逐次前記兵力部署に基く集合点に向い集中し、鋭意作戦發起態勢の整備に努めた。

団集行飛五第	次三第 隊部陸上	次二第 隊部陸上	隊部 （隊ラ 軍）モン （の一）湾上陸部
計直重輕戰偵第十飛行第四 協爆爆爆察一立飛第二飛行 一九二二五七二七二七四 機機機機機機機機機機機	船兵鐵道 船站部部 工部隊隊 兵の一 の一	船兵第六 船站部部 部隊隊 の一 の一	第十六師團（步兵第九、第三十三聯隊基幹欠） 軍直轄の各種特科部隊の一部 兵站部隊の一部 船工部兵の一部
一、台湾に展開し台湾及パラオ等に展開せる海軍航空部隊と協同し比島方面敵航空勢力を撃破す又開戦劈頭海軍の急襲占領する 二、先遣各支隊の航行並に上陸に方りては主力を以て之に協力す又海軍航空部隊は木村及三浦支隊の上陸並に爾後の作戰に協力す 三、躍進し航空作戰を続行す 四、北部ルソンに於ける航空基地の整備に伴ひ台湾より速かに之に躍進し航空作戰を続行す 五、リンガエン湾及ラモン湾に對する上陸作戰に當りては密に之に協力し作戰の進捗に伴ひ逐次基地を南方に獲得整備す 六、作戰目的を達成せば泰方面に転進せしめらる	リンガエン湾に上陸夫々の任務に就く	主力を以てリンガエン湾に上陸し ルソン島各地の守備に任ず	ラモン湾に上陸しラグナ湖南側を経てマニラに向ひリンガエン上陸部隊と協力して敵野戦軍を撃破しマニラを占領す
雄 高	雄 高	雄 高	島大美文
X+30日頃	X+16~17日頃	X+9~10日頃	
湾ソエガシリ	湾ソエガシリ	湾ソモラ	
X+35日頃	X+25日頃	X+17日	

第二十五軍の集合点及び上陸点は概ね一箇所にかたまつていたが、第十四軍のそれは数箇所に分散し、第二十五軍は一縦隊でレールの上をシンガポールに向つて走つてさえおればよかつたが、第十四軍は数縦隊でマニラに向つて分進合撃しなければならなかつた。マレー作戦は、奇襲、突進を旨としたが、比島作戦は、合理、巧妙

を旨とした。

即ち先遣部隊たる田中支隊及び菅野支隊は、高雄で乗船して馬公に集合し、名古屋で乗船したる木村支隊及び三浦支隊はパラオに集合した。これら各先遣部隊はいずれも十一月末までに集合を完了した。ラモン湾上陸部隊たる第十六師団主力は十一月二十五日大阪を出港して十二月一日奄美大島に到着し、リンガエン湾上陸の軍主力は、十二月六日頃までに高雄、馬公及び基隆に三船隊に区分せられて集合した。以上輸送船の総数は約一二〇隻の多数に及んだ。

又北滿に位置していた第五飛行集団は十一月十五日頃機動を開始し、十一月末までに南部台湾に集中展開を完了した。

十二月一日、第十四軍司令官は軍戦闘司令部を台北より高雄に推進し、翌二日進攻作戦開始に関する南方軍命令を受領した。これより先軍司令官は十一月二十日発令の南方軍命令に基き、先遣部隊、第十六師団及び第五飛行集団等に対し各個に十一月二十四日から二十七日に亘り進攻作戦開始のための部署を発令し、今や開戦日を待つばかりであった。

〔濃霧航空撃滅戦を利す〕 十二月八日早朝、南部台湾に展開した陸海軍航空部隊は大挙して航空撃滅戦の火蓋を切らんとした。我が兵力陸海軍合して約五〇〇機、在比米空軍約二〇〇機、勝算既に我にあった。

然るに合情にも、この日朝来南部台湾一带は濃霧が西方台湾海峡方面より東南方に流れ襲つたようである。

航空作戦は、予測し難い敵の自由なる意志の外に、天候気象という自然現象によつて大きく左右される。而して無限に変化する敵の意志も、我が方が主動的に行動すれば、自らこれに追隨して来るが、自然の現象はこれを克服することは出来なかつた。

台南市南方の飛行場を基地とする第十一航空艦隊は、固より離陸が不可能であつた。然るにその東南方屏東、佳冬、潮州の各飛行場

を基地とする第五飛行集団は、濃霧の来襲に先だち危機一発離陸に成功した。勇躍して北部ルソン上空に達したが敵機を見ず、ツゲガラオ飛行場及びバギオ附近兵營を爆撃して空しく帰還した。

午前九時頃濃霧漸く去つて晴天となり、第十一航空艦隊は午前十一時基地を発進して、南部ルソン上空に向つた。時あたかも敵航空の主力は、午前の出動を終り着陸したばかりであつた。その出動が、我が機動部隊のハワイ攻撃又は陸軍機の北部ルソン空襲のいづれに対応するためのものであるかは不明である。午後一時三十分海軍機は、クラークフィールド及びイバの両基地を攻撃し、撃墜炎上大破約一〇〇機と称せられる戦果を収め、第一撃を以て勝敗を一挙に決してしまつた。

爾後十一航空艦隊は十日マニラ周辺、デルカルメンの両基地及びマニラ湾在泊艦船等に対し第二撃、十三日クラークフィールド、イバ、マニラ周辺の三基地に対し第三撃、十四日デルカルメン、ニコルスフィールドの両基地に対し第四撃を加えた。

一方第五飛行集団は、航続距離の関係上南部ルソンに進攻する能力なく、十二月八日より十一日に至る間、主として田中及び菅野両支隊の船団掩護とその上陸戦闘直接協力に任じ、北部ルソンにおいて散発的に敵機と交戦する程度に止まつたが、十二日以後先遣部隊の占領したアバリ、ビガン、ラオアグ等の飛行場に、逐次躍進するに伴い、殆ど連日南部ルソンの敵航空撃滅戦に参加し、第十一航空艦隊の戦果を拡大した。

かくして、十二月八日より十五日に至る約一週間の作戦を以て、航空撃滅戦は略々その目的を達成した。残存敵機は爆撃機約一〇機、飛行艇十数機、戦闘機約二〇機に過ぎず、主として中南部比島に散在しているものと推定せられた。

〔先遣部隊の上陸〕 航空撃滅戦の開始に伴い、各先遣部隊もルソン島周縁の敵飛行場に向い、概ね一斉に行動を起した。

十二月七日午後五時馬公を出発した田中支隊及び菅野支隊は、第五水雷戦隊又は第四水雷戦隊直接護衛の下にバシー海峡を横断し、十日払曉田中支隊はアパリ附近、菅野支隊はビガン附近の上陸に成功し、所在飛行場を占領した。これと呼応して海軍部隊及び陸軍航空地上部隊は、八日バタン島を占領し、十一日早くも第五飛行集団の戦闘機一八機は、ビガン飛行場に躍進した。

第十四軍司令官は右の状況に鑑み、敵は北部ルソンにおいて積極的企図なきものと認め、田中、菅野両支隊の主力を南下せしめ、軍主力の作戦に策応する如く部署した。両支隊主力は、田中支隊長指揮の下に十二月二十二日朝サンフェルナンドに進出した。

一方十二月八日午前九時バラオを出港した木村支隊は、十二日午前二時四十五分レガスピ附近に上陸し、所在飛行場占領の後、軍主力に策応するため北上を開始した。

又三浦支隊は第十六軍坂口支隊長指揮の下に、十七日午後二時バラオを出港し、二十日午前四時敵の抵抗を受けることなく、ダバオ東北地区に上陸し、ダバオ西北地区に上陸した坂口支隊と呼応して、約三五〇〇の敵を撃破し、午後三時頃ダバオ市及び飛行場を占領した。同地の在留邦人約二万三千は救出された。坂口支隊は二十日ホロ島に転進した。

〔軍主力比島上陸〕 これより先、本間軍司令官は高雄戦闘司令部において、十二月五日までの軍主力のリンガエン湾に対する上陸部署の発令を終っていた。

上陸兵団の骨幹は、いうまでもなく第四十八師団の精鋭である。上陸点は敵が待ち受けていると予想されるリンガエン湾の湾底附近を敢えて避けた。昭和二十年一月米軍のルソン反攻は、この正面から行われた。然し我が第十四軍の上陸点は、リンガエン湾東岸のバギオ山系西麓海岸に選ばれた。それは、中部ルソン平地に位置すると予想される敵主力に成るべく遠く、且つ敵の準備せざる正面に敵

の意表に出て上陸せんとする狙いであつた。

即ち第十四軍の一般構想は、バギオ山系西麓海岸に東面して上陸し、先ず上陸の安全確実を期した後、右向け右をして南面し、狭小な海岸地帯をルソン平地に向つて隘路進出をなさんとするものであつた。そこでその隘路口を制扼する要衝のロザリオ附近を速かに占領確保することが重視せられた。なお軍司令官は軍の左翼を掩護すると共に上陸根拠地の設定を容易ならしめるために、歩兵一大基幹の一支隊を以て上陸正面左翼の要地たるサンフェルナンド附近を占領する部署をとつた。それは歩兵第九聯隊長上島大佐の指揮する上島支隊である。当時田中及び菅野両支隊主力の南下は予想されておらず、その後両支隊の南下を部署したときも、そのサンフェルナンド附近進出には長時日を要するものと考えられていた。

第十四軍主力は、十二月十七日午後五時乃至翌十八日正午の間、高雄、基隆、馬公を出航し、第三艦隊主力護衛の下に、上陸点たるリンガエン湾に向つた南下した。それは三箇の船隊に区分せられた七六隻の大輸送船団であつた。

船団は二十二日夜リンガエン湾に到着し、午前二時十分泊地に進入した。予定泊地はサンフェルナンドよりアリンガイ河口に亘る正面であつたが、アリンガイ河口の発見が出来なかつたため、船団は湾内深く進入して南方に偏位した。この夜泊地進入頃より天候急変して、雲低く垂れ、約二米の巻浪を生じ、上陸作業困難を極めた。

第十四軍は上陸を敢行した。第四十八師団は敵一部の抵抗を排して、午前五時十七分アゴー南方地区及びアリンガイ附近の上陸に成功し、同日夜その一部は早くも要衝ロザリオを占領した。上島支隊は午前七時三十分バウアン西方に上陸し、頑強な敵の抵抗を排除して東方に地歩を拡張すると共に、この日朝サンフェルナンドに進出した田中支隊と連絡を遂げた。上陸泊地が南方に偏したため、右上島支隊の上陸は舟艇機動に時間がかかり、天明後となり、水際敵陣

地の猛射を受けた。

本間軍司令官は、二十三日朝パウアンに上陸して、同地に戦闘司令部を開設した。

一方軍主力と呼応して十七日午後一時奄美大島を出航した第十六

第二章 中国方面の作戦

米英の極東における三大根拠は、シンガポールとマニラと香港であつて、香港の覆滅は南方攻略作戦の一環であつた。開戦劈頭南方軍のシンガポールとマニラを目指す渡洋進故作戦と併行し、中国においては支那派遣軍によつて香港攻略作戦が行われ、且つ支那事変遂行の痛となつていた敵性租界の処理とこれに伴う在華米英武力の掃蕩が実施せられた。

右のほか支那派遣軍は、重慶をして香港、仏印、泰等において作戦する友軍の側背に策動するが如きことを封ずるために、長沙作戦を行つて敵を華中方面に牽制し、南方作戦に策応した。

1 香港攻略作戦

〔開戦前の準備——前年来の懸案〕 香港攻略は昭和十五年夏以来の懸案であつた。即ち既述の如く、南方問題解決のため武力を行使する場合、香港は当然その対象に含まれており、しかも大本営は昭和十五年七月末いち早く、香港要塞の攻略に備えて、攻城重砲兵を動員して、これを華南に派遣した。それは重砲兵第一聯隊（二十四榴榴砲）、独立重砲兵第二、第三大隊（十五榴加農砲）砲兵情報第五聯隊等を基幹とする第一砲兵隊であつた。徒勞に終つたか見えたこの大本営の処置も、開戦にあたり遂に実を結んだのである。

昭和十六年秋頃、華南方面に作戦中の第二十三軍（軍司令官酒井隆中将、軍參謀長樋口敬七郎少将）は、第十八、第三十八、第四百四

師団主力は、第二艦隊一部の護衛の下に南下し、十二月二十四日未明敵の抵抗を排除してラモン湾岸の上陸に成功した。第十六師団は直ちにタヤバス山系以西の地区に向い前進を開始した。

師団、独立混成第十九旅団及び第一砲兵隊等を基幹とし、主力を以て広東周辺地区を占拠して、十数箇師よりなる敵第四戦区軍と対峙していた。その一部は汕頭附近及び北部海南島を占領し、第一砲兵隊は固より英支国境線近く深圳附近に位置していた。開戦に先だち大本営は、満洲駐屯の第五十一師団を第二十三軍に増加し、その到着に伴い第十八師団をマレー攻略軍たる第二十五軍に編入した。

〔香港要塞〕 所謂香港は、概して英国領土たる香港島と英国の租借地たる九龍半島とからなり、城門貯水池以南の九龍半島と香港島とがヴィクトリア港を挟んで、両者相俟つて一つの香港要塞を構成していた。陸正面の本防禦線は、城門貯水池以南の東西の高地線に数線のトーチカ式陣地を以て編成せられ、これを突破すれば、香港島は眼下に俯瞰することが出来るのであつた。香港島は全島概ね山地を以て蔽われ、最高峯ヴィクトリア山において標高五五〇米を算え、香港要塞の海正面における堅固なる要害たると共に、陸正面に対しては最後の復讐陣地を形成するものと認められた。四周に大小口径の火砲を配置し、海岸には防禦設備を施していた。要塞内の九龍東側に啓徳飛行場を擁し、ヴィクトリア港は良好な艦船泊地であつた。しかし香港要塞は所詮日本軍の絶対制空制海權下に取残された孤塁に過ぎず、その弱点は約一八〇万に及ぶ人口の過大と給水の困難とにあつた。

当時香港を守備していた英印軍の兵力は、陸軍約一万と少数の海

空軍部隊であつた。

〔攻略計画及び準備〕 既に述べたように、大本営は十一月六日支那派遣軍総司令官に対し、第二十三軍司令官の指揮する第三十八師団を基幹とする部隊を以て香港攻略を準備すべき命令を与え、且つ準備すべき作戰要領を示して十一月末までに作戰準備を完了すべきを指示した。

右命令に基き、支那派遣軍総司令官は第一飛行団の一部及び飛行第四十五戰隊（軽爆）等特に第二十三軍司令官の指揮下に入らしめた。かくして香港攻略作戰に任ずる兵力は、第三十八師団（師団長佐野忠義中将）第五十一師団の歩兵第六十六聯隊、第一砲兵隊（司令官北島驥子雄中将）及び前記の航空部隊等を基幹とし、これに支那方面艦隊の第二遣支艦隊（司令官新見政一中将）が、海上より協力することとなつた。

大本営は従来からの作戰準備の成果を活用し、正攻法により陸正面より香港要塞を攻略する方針であつた。海正面より一挙に香港島を攻略する策案もあるが、全般兵力運用上主として陸軍独力で香港を処理する必要があつた。

第二十三軍は大本営より示された作戰要領に基き、次の如き趣旨の香港攻略計画を策定した。

一、第二遣支艦隊と協同し主として陸正面より速かに九竜半島及香港島を攻略す

作戰開始は南方軍の馬来方面上陸（空襲）確認後とす

二、開戦劈頭航空部隊を以て香港附近敵航空勢力を撃滅し且つ在泊敵艦艇及軍事中樞機關を撃破す

三、航空部隊の第一撃と概ね同時に攻略部隊は国境線を奇襲突破し敵前進部隊を努めて捕捉殲滅し逐次抵抗の企図を挫折せしめ一挙に大帽山東西の要線に進出す

四 攻略部隊は城門貯水池南方高地線に在る敵主陣地に対し概ね

大帽山東西の線に於て攻撃準備を整へたる後攻撃の重点を城門貯水池正面より金山に指向し一挙に敵陣地を突破し九竜北端に進出す

この際一部の海上機動部隊を以て青衣島（筆者註、九竜北西方の島）方面に作戰し主力の攻撃を容易ならしめ又一部の兵力を沙田海を越えて馬鞍山西南側地区に上陸せしめ敵陣地の右翼を攻撃せしむ

五、九竜半島を攻略せば速かに香港島に対する攻撃を準備す

攻撃は強襲に依り北岸に上陸し逐次戦果を拡張す此の際一部船舶を以て香港島南岸に陽動す

六、状況に依り香港島を攻略することなく封鎖に依り作戰の目的を達成することあり

軍司令官は右計画に基き、作戰兵力を佐野兵团（第三十八師団基幹、北島部隊（第一砲兵隊基幹）、軍飛行隊（飛行第四十五戰隊基幹）、荒木支隊（歩兵第六十六聯隊基幹）等に区分して作戰を指導した。右荒木支隊は淡水附近に位置して攻略部隊の背後を掩護する兵力であつた。なお香港作戰間第二十三軍の主力は、概ね現在の占拠地域を確保する如く計画せられ、又第三十八師団は香港攻略後南方に転用する如く内示せられていた。

〔廣「発令」——「ハナサク」〕「ハナサク」 十二月二日、既に述べた如く、香港攻略の命令が発令せられた。それは「大陸命第五七二号（廣）発令あらせらる」という電報であつた。第二十三軍は予ての計画に基き行動を起し、仏山、三水附近に集結していた佐野兵团主力は、英支国境線に向つて前進を開始した。昼間の移動は厳禁せられ、夜間にのみ隠密に行われた。マレー又はフィリピン方面と異なり、敵の先制攻撃を受ける虞れは殆どなかつた。

これより先佐野兵团の先遣部隊（第三十八歩兵团長伊東武夫少将の指揮する歩兵第二百二十九聯隊、同第二百三十聯隊、山砲兵第三

十八聯隊基幹）は開戦の機切迫に伴い、密かに英支国境に近く展開し、随時国境線を越えて前進し得る態勢を整えていた。しかし国境の突破は、固よりマレー方面の上陸又は空襲を確認した後でなければならなかった。

十二月八日、大本営はマレー攻撃を開始した旨の現地軍の電報を傍受するや、直ちに午前三時四十分、支那派遣軍総司令官、第二十三軍司令官及び後述する敵性租界処理等に任ずる北支那方面軍司令官、在漢口第十一軍司令官、在上海第十三軍司令官に宛てて、「ハナサク」「ハナサク」と緊急打電した。それはマレー方面では既に上陸を開始したということを通報する隠語電報であつた。

右電報に重ねて支那派遣軍総司令官及び第二十三軍司令官に対しては、普通の暗号電報を以て「E方面（筆者註、マレー方面の略号）の本格的作戰開始せられたり」と打電し通達の万全を期した。

第二十三軍司令官は右の電報受領と共に、十二月八日午前四時攻略部隊に進攻作戰開始を命令した。

八日早朝軍飛行隊は、敵の啓德飛行場を攻撃して敵航空勢力を撃破し、第二遣支艦隊は香港を海上より封鎖した。佐野兵团の先遣部隊は、これと前後して大なる抵抗を受けることなく深圳東方地区において国境を突破して前進した。

〔若林中尉の独断——挙攻略〕 軍司令官は敵がその防禦線において、真面目なる抵抗をするものと判断し、九日午前十時三十分敵主陣地に対する攻撃準備に関する部署を命令した。それは攻撃準備期間を約一週間と予定し、佐野兵团主力を大帽山東西の線に展開して周到な攻撃を準備させ、この間北島部隊を以て敵主陣地の敵砲兵の制圧を行わんとするものであつた。即ち軍司令官は堅固なる破壊と陣地に対する攻撃の原則に従い、整然たる組織的攻撃を指導しようとしたのである。

然るに戦況は第一線尖兵長の勇敢且つ機宜に適した独断により、

思いがけなくも有利に發展して行つた。先遣部隊の後方を前進して来た佐野兵团の歩兵第二百二十八聯隊は、この日軍司令官の右部署の結果、展開のため第一線に進出しつつあつた。その尖兵長は若林東一陸軍中尉であつた。若林中尉は聯隊の先頭にあつて、城門貯水池南方の敵主陣地の要点たる標高二五五高地を偵察中、この附近の敵兵力配備の欠陥と警戒の虚に乘じて、九日夕刻独断敵陣地に突入してこれを奪取してしまつた。歩兵第二百二十八聯隊主力は機を失せずその戦果を拡大した。これを契機として佐野兵团は所定の攻撃準備期間を待つことなく十日攻撃を開始し、北島部隊もこれに呼応して敵砲兵就中昂船洲砲台を制圧し、第二十三軍は敵の大なる抵抗を受けることなくして、十二日敵本防禦線突破に成功した。これは敵としても予期しない作戰の蹉跌であつた。香港要塞をあえなき崩壊に導いたこの若林中尉は、その後南東太平洋のガダルカナル島に転戦し、勇敢敢闘遂に壮烈な戦死を遂げた。若林中尉は、香港攻略戦の偉功とガダルカナル島戦における決死敢闘とに対し、再度に亘り軍人最高の榮譽たる感状が授与された。

一方佐野兵团の青衣島攻略部隊は、遠く西方を迂回して十一日これを占領した。又左側支隊たる歩兵第二百二十九聯隊を基幹とする部隊は、十日沙田海を渡り、十二日石塚附近敵本防禦線の右翼を突破し、その一部は啓德飛行場を占領した。かくして十四日九竜半島全部の掃蕩を完了した。敵の大部は香港島に退却した。

〔香港島攻略準備と降伏勧告〕 軍司令官は迅速なる攻撃進捗の好機に乘じ、概ね次の如き要領で、敵に準備の余裕を与へざる如く速かに香港島を攻略するに決した。

一、北島部隊は九竜北側高地附近に陣地を占領し軍飛行隊と相まつて極力香港島の敵砲兵及び海岸防禦施設を破壊する。

二、佐野兵团は香港東北側海岸に上陸し沿岸の敵陣地を突破したる後右旋回し西方に向ひ戦果を拡張す

三、渡海は奇襲を旨とし折疊舟を以て隠密に行ふ

第二遣支艦隊は上陸当日香港島南岸に上陸するが如く陽動を行ふ

既に述べた如く、わが軍は敵が陸正面の本防禦線を固守するものと判断し、この線を突破すれば、香港要塞は自ら崩壊するものと考へ、香港島内に敵が立籠つた場合の攻撃要領に関する検討は十分ではなかつた。

香港島東北角と九竜側の鯉魚門と間の鯉魚門水道は最も狭く、僅かに約二千米を距てるに過ぎなかつた。佐野兵团は奇襲上陸を立前として、かねて考へていたところの一部の兵力を泳いで上陸させる案の能否を、オリンピックで有名な小池礼三少尉等をして現地につき検討させるといふ苦心もあつた。

第二十三軍は香港島に対する本格的砲爆撃の開始前と上陸開始前の二回に亘り、軍使として軍參謀多田督知中佐を香港島に派遣し、降伏勧告を行つた。それは多数の無辜の非戦闘員に対する人道上の配慮のほかに、香港島に立籠ることが戦略的に無意味であるといふ考へからして、降伏するかも知れぬとの樂觀的觀察もあつたのである。ヤング総督は二回ともこれを拒絶したが、軍使との応酬の間に、日本軍が一度香港島の一角に上陸すれば、これを契機として降伏するのではないかとの印象を与えた。事実、日本軍は渡海上陸を重視して、香港島上陸後の戦闘はあまり深く考へていゝなかつた。

〔渡海攻撃——英軍白旗〕 十二月十三日降伏勧告を拒絶せられた第二十三軍は、翌十四日本格的砲爆撃を開始し、爾後連日攻城重砲兵は香港島に向つて巨弾を浴びせた。十八日再度の降伏勧告を行つた後、同日午後九時佐野兵团は、歩兵団長の指揮する右翼隊（歩兵第二百二十八、第二百三十聯隊各主力基幹）を以て九竜及び大全湾附近より香港島北角附近に、左翼隊（歩兵第二百二十九聯隊基幹）を以て官囂仔附近より同島東北部の筲箕湾附近にそれぞれ渡海を開

始した。奇襲上陸に成功し、香港島東北部を占領した。敵はニコルソン山以西又は以南の地区に退却しつつ頑強なる抵抗を続けた。

上陸後間もなく、佐野兵团は、峻峻錯雜なる地形、山麓のホテルに拠る敵の猛射、射撃設備を有する堅固なる掩蔽部群等に遭遇して前進を阻止せられ、戦闘は十九、二十日の両日諸所において紛戦状態を呈した。然し二十一日概ねニコルソン山南北の線において西面する戦線を構成し、爾後頑強に抵抗する敵を逐次に撃破して、西方に地歩を拡張し、この間一部を以て赤柱半島を攻略した。今や佐野兵团は初めて香港要塞の本格的抵抗に直面したのである。

既に我が手中に帰した黄泥涌山峽において貯水池が発見せられた。数人の中国人が密かに残存給水施設を動かしていた。得たりとばかり忽ち香港市街は全面断水となり、敵をして白旗を掲げしめる直接の動機ともなつた。又右黄泥涌山峽において、敵の戦死者から香港島内配備図を拾つた。全島内の配備、就中山峽に秘匿せられてゐる防禦火点は一目明瞭となつた。直ちに攻城重砲兵にも通報せられ、爾後の攻撃を著しく容易ならしめた。

かくして香港島西部の複郭陣地に拠つて、余喘を保つていた英軍は遂に白旗を掲げた。正に十二月二十五日午後五時五十分である。午後七時三十分現地陸海軍指揮官は停戦を命令し、ここに香港攻略作戦は終末を告げた。

連日の勇敢戦闘に漸く疲労を感じては来たが、前途尚多難の戦闘を覚悟していた第二十三軍将兵にとつては、あつけない幕切れであつた。英軍ボクサー參謀の言によれば、英軍は約半年位は持久する考へで、これに必要な兵器、彈藥、糧食等を準備していたとのことであつたが、我が第三十八師団の精銳と攻城重砲兵等の威力は、僅かに十八日を以てこれを粉碎した。

〔香港占領地總督部〕 香港に対しては、支那事変による占拠地域とは截然區別して、占領地行政が施行せられ、その軍政の主担任は

陸軍であつた。大本営陸軍部は大本営直轄の香港占領地総督を置き、香港の防衛及び軍政の施行に当らしめることとした。昭和十七年一月十九日香港占領地総督部が編成せられ、陸軍中将磯谷廉介が総督に任命せられた。いうまでもなく総督部は、純然たる統帥機関で、一般軍司令部と同一の性格を有するものであつた。その隷下で作戰兵力として、歩兵三大隊基幹の香港防衛隊が附せられていた。而して総督部の業務は、支那派遣軍が華南において実施する作戰、兵站、情報収集及び封鎖等と深い関係があるので、総督はこれらの事項に関し、支那派遣軍総司令官の区処を受ける如く規定せられた。

2 租界の処理と米英武力の掃蕩

在華敵性租界の処理も、支那事変多年の懸案であつた。中国には英、仏等列国の専管租界のほか、上海の共同租界と北京公使館区域とがあり、更に各地に列強の權益が存在した。

これらのうち特に上海共同租界と英国乃至は仏国の租界は、日本に対する敵性拠点であり、且つ重慶の抗日策動の根拠でもあつたのである。支那事変解決のために、これら租界の敵性を排除し、為し得ればこれを我が方の実権下に収めることは、多年の願望であつた。既述の昭和十五年七月二十七日、及び昭和十六年七月二日の新国策決定においても、いずれも敵性租界接収問題を取扱つてゐる。然しこれは、その性質上米英等に対する戦争決意にも触れる問題であつて、当時としては到底実行し得べきものではなかつた。

今や対米英蘭開戦に臨み、敵性租界及び權益の処理は戦争相手国に対する限り、これに伴う武力の掃蕩と共に当然実現し得る事柄となつた。

〔中国に於ける対米英蔣措置〕決定 昭和十六年十一月の御前會議決定の「帝国内閣策遂行要領」に基き、大本営及び政府は十一月三

十日の連絡會議において、開戦に伴う中国における対米英蔣措置として、大要次の如きことを決定した。

一、在支米英武力を一掃す

二、在支敵性租界（北京公使館区域を含む）及敵性重要權益（海關、鈔山等）を我実権下に把握す但し我が国の人的並に物的負担を成るべく輕からしむる様留意するものとす

（註）共同租界及び北京公使館区域は敵性武力を一掃して我実権下に収むるも友好国權益をも混入するを以て接収等の型式を取らざるものとす

三、前諸項の発動は我企画を暴露せざる為我対米英開戦後とす

四、重慶に対する交戦権の発動は特に宣言等の形式を以てするごとく対米英開戦を以て事実上其の实效を収むるものとす

五、在支敵国系權益中国民政府に關係あるものも必要に応じ差当り我方実権下に把握するものとし之が調整は別に措置す

右決定に基き、大本営は十一月二十一日支那派遣軍総司令官に対し、敵性租界及び權益処理のため、武力を行使することある場合を考慮し、所要の準備を実施すべきを命令し、且つ枢軸側諸国及び第三国の權益に対して、無益の紛争を惹起しない如く留意すると共に、我が企圖の秘匿を嚴重にすべき旨を指示した。

次いで十二月二日、大本営は次の如き要旨の命令を発令した。

支那派遣軍総司令官は天津英国租界及上海共同租界其の他の在支敵国權益を処理すべし

所要に応じ武力を行使することを得

以上の如き大本営の措置は、支那方面艦隊に対しても、同様に取り運ばれ、これらに基く支那派遣軍及び支那方面艦隊の準備は着々進捗した。

〔十二月八日一斉に処理〕 かくして中国における敵性租界及び權益の処理並びにこれに伴う米英軍の掃蕩は、十二月八日未明マレー

方面攻撃開始の通報を受けるや、間もなく、在華陸海軍部隊の手によつて機敏に実行せられた。

先ず八日午前五時十五分、我が支那方面艦隊の軍使は、上海在泊の米砲艦ウェーキ号に艦長スミス少佐を訪問し、次の勧告文を手交した。スミス艦長は直ちに降伏した。

大日本帝国と貴国とは既に戦争状態に入った。本職は上海在泊中の貴国各艦艇の降伏を勧告する。本勧告に対し直に本軍使に回答せらるべし。本勧告を拒絶し、又は躊躇し、或は船体、兵器等を破壊し、或は戦闘配備に就くを認める場合は、本官は兵力を以て直ちに攻撃すべし。

別の軍使は同時に英艦ベートル号を訪れ、同様の降伏勧告文を手交したところ、同艦長は即座にこれを拒絶した。このことあるを予期して準備を完了していた我が艦隊は、午前五時三十分ベートル号に対し砲撃を開始し、午前六時五分これを撃沈した。

午前八時堀内上海総領事は、陸海軍参謀等と共に工部局を訪問して、日本軍の租界進駐を通告し、工務局当局の諒解と協力を要請した。その結果上海租界に対する進駐は、午前十一時を期して行われ、海軍陸戦隊はバンド南京路を中心とする旧英国警備区域に、陸軍部隊はその他の租界の重要地点にそれぞれ進駐し、正午までにこれを完了した。

華北方面においては、八日午前八時我が軍は天津、塘沽及び秦皇島の米英の権益を接収した。その主要なるものは天津の英租界、英米の兵營、警察局、碼頭、塘沽及び秦皇島の碼頭、倉庫等であつた。この際仏租界側は極めて協力的であつた。米国海兵隊は北京、天津、秦皇島において我が武装解除の要求に応じたので、同日午後武装を解除した。

華南方面においては、沙面英租界に対し八日午前八時三十分、平穩裡に進駐を完了した。

3 開戦に伴う対重慶作戰

開戦に伴う陸軍の対重慶作戰要領は、既述の通りで、從來と大なる変化はなかつた。大本營はこれに基き、十二月三日支那派遣軍總司令官に対し、概ね現在の態勢を保持し、特に對敵封鎖を強化して敵總戦企図の破挫衰亡に任ずべき趣旨の新任務を発令し、開戦に伴う対重慶作戰の大綱を律するところがあつた。

〔第二次長沙作戰〕 戦争が開始されるや、当時漢口にあつて作戰に當つていた第十一軍司令官阿南惟幾中将は、重慶軍を牽制して南方攻略作戰を容易ならしめるため、江南地区に攻勢を執るべき意見を支那派遣軍總司令官に具申した。總司令官畑俊六大將はこの意見実現の必要を認め、第十一軍をしてその計画に基く作戰を実施せしめることとし、華北の独立混成第九旅団を同軍司令官の指揮下に入らしめ、且つ第一飛行団をして協力せしめる如く部署した。この作戰を第二次長沙作戰と呼称した。

第二次長沙作戰は第三、第六、第四十師団、独立混成第九旅団を基幹とする兵力を以て、洞庭湖東側地区を長沙に向ひ攻勢を執り、別に南昌方面にあつた第三十四師団及び独立混成第十四旅団をして、当面の敵に対して攻勢を執り、軍主力の作戰に策応せしめる計画であつた。第十一軍は十二月二十四日攻勢を開始し、優勢なる敵の抵抗を排除して南進を継続し、昭和十七年一月四日に至り長沙の大部を占領した。

ここにおいて軍司令官は概ね牽制作戰の目的を達成し得たものと判断して、反転作戰に移る如く部署した。反転作戰は優勢なる敵の急迫を受け、難戦苦闘の後一月十五日概ね新牆河以北に撤退を完了した。

この作戰で對戦した敵は、第十、第二十、第三十七、第九十九の四箇軍のほか、西南第六戰区方面より第二十六、第七十三の二箇軍

を、広東、広西方面より第四、第七十四、第七十九の三箇軍を、又撈刀河以北の地区より第二十八、第五十一、第七十八の三箇軍等を

第三章 中南部太平洋方面攻略作戦

進攻作戦は広く中南部太平洋方面においても、大胆に繰り広げられた。この方面の作戦は、海軍が主としてこれに当り、陸軍は南海支隊を以てグワム島及びラバウルの攻略に協同せしめた。

この方面の作戦を担当した海軍部隊は、第四艦隊司令長官井上成美中将の指揮する南洋部隊（第四艦隊基幹）であつて、その任務は内南洋の哨戒防備と海上交通線の保護とに任ずると共に、グワム、ウエーキ、ラバウルを攻略するにあつた。

南洋部隊は開戦と共にその航空部隊を以てグワム島、ウエーキ島及びハウランド島の敵航空基地を急襲し、これを制圧し、十二月十日、南海支隊と協同してグワム島を攻略すると共に、ギルバート諸島北部のマキン島、タラワ島を占領した。又この日ウエーキ島に対しても、攻撃を開始したが成功せず、十二月二十二日攻撃を再開してこれを占領した。

次いで昭和十七年一月二十三日、南洋部隊は南海支隊と協同し、第一航空艦隊の協力を得てラバウルを攻略すると共に、カビエンを占領し、その航空部隊の一部はこの方面に進出して、東部ニューギニア及びソロモン群島方面に蠢動する敵機を掃蕩した。開戦当初敵潜水艦の活動は微弱にして見るべきものがなかつた。

註 挿図のほか附図を参照せられたい。

1 グワム島の攻略

グワム島は東京を距る約一千四百哩の米海軍の航空基地で、開戦前の情報によれば、海兵隊約三百が駐屯するほか、土民兵約千五百

牽制し、相当の犠牲を払つたが、作戦目的は克くこれを達成した。

を有し、海岸及び島内数箇所に砲台を構築しているものと判断せられた。

〔南海支隊の任務——陸海軍現地協定〕 既に述べたように、十一月六日南海支隊の戦闘序列を令ぜられ、グワム島攻略準備に関する大本営命令が発令せられた。南海支隊は四国にある第五十五師団の一部を以て編成せられ、第五十五歩兵団長陸軍少将堀井富太郎の統率の下に、歩兵第四百四十四聯隊、山砲兵第五十五聯隊第一大隊、工兵第五十五聯隊第一中隊を基幹とする部隊であつた。

堀井支隊長は十一月八日大本営に出頭して右命令の伝達を受け、且つ本作戦に関する作戦要領及び陸海軍中央協定を指示せられた。次いで大本営の指導により、同月十四、十五の両日岩国海軍航空部隊において行われた陸海軍現地協定には、南海支隊長と第四艦隊司令長官との間に細部の協定が行われた。

陸海軍中央協定の要旨は左の如くであつた。

一、陸海軍協同して開戦初頭グワム島を攻略し機を見てラバウルを攻略し航空基地を獲得す

二、グワム島に対する攻撃は対米航空第一撃を確認したる後之を開始す

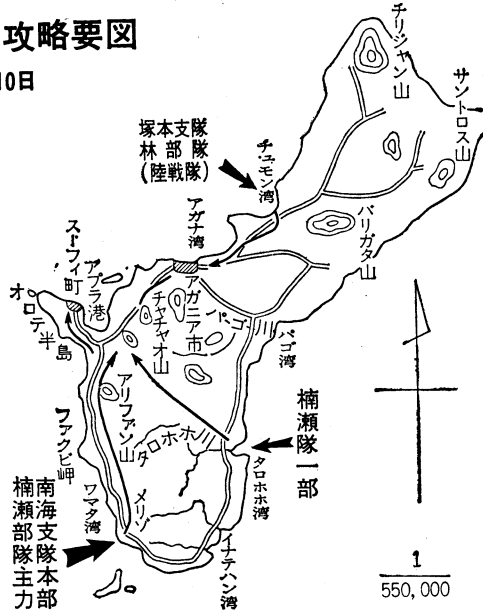
海軍航空部隊は開戦初頭サイパン島方面よりグワム島の敵艦艇、防備施設等を攻撃撃砕す

三、海軍は陸軍のグワム島に到る輸送を護衛し且其の上陸作戦に協力す

陸軍はグワム島に上陸せば主力を以てアブラ要地を攻略すると

グワム島攻略要図

12月10日



- 共の一部を以てアガニャ市を占領し引続き島内の残敵を掃蕩す
- 四、陸軍はグワム島の掃蕩完了せば海軍部隊と同島の守備を交代し海軍護衛の下にトラック諸島に転進しビスマルク諸島方面に對する作戦を準備す
- 五、海軍は先づビスマルク諸島方面に對する航空偵察を実施し要すれば適時攻撃を行ふ
- 海軍護衛兵力の状況之を許すに至らば機を見て陸海軍協同してラバウルを攻略し同地の航空基地を占領す又海軍は状況に依りカビエンの航空基地を占領す
- 六、陸軍はラバウル占領後状況之を許す限り速かに同地の守備を海軍部隊と交代し海軍護衛の下にパラオ附近に集結す
- 七、集合点
- グワム作戦
- 小笠原諸島
- ビスマルク作戦
- トラック諸島
- 〔内南洋唯一の米軍基地覆滅〕 南海支隊は輸送船九隻に乗船して、隠密裡に四国坂出港を出発し、十一月二十八日小笠原諸島母島の沖港錨地に集合を了つた。支隊長は十二月二日、母島において進攻作戦開始に關する大本營命令を受領し、十二月十日を期してグワム島上陸の壮舉を決行することとなつた。
- 十二月四日午前九時、南海支隊は母島を出発し、第四艦隊護衛の下にマリアナ諸島東方航路を経てグワム島に向つた。支隊長は軍艦津輕にあつた。船団は途中敵と遭遇することなく、八日ロタ島附近において上陸部署に随いそれぞれ泊地に分進した。
- トラック島にある第四艦隊所屬の海軍航空部隊及び水上機母艦聖川丸の飛行部隊は、十二月八日以後グワム島に對し攻撃を加え、警備艦ベンギンを撃沈し、主要軍事施設を破壊した。
- 各船団は十日午前零時乃至一時の間前後して泊地に進入し、概ね午前二時三十分前後各方面とも上陸を開始した。上陸部署の概要

は、支隊本部と楠瀬部隊（楠瀬正雄大佐の指揮する歩兵第四百四十四聯隊（第一大隊欠）基幹）を以てグワム島南部の東西両岸に、塚本支隊（塚本初雄少佐の指揮する歩兵第四百四十四聯隊第一大隊基幹）を以て北部西岸に、林部隊（林海軍中佐の指揮する海軍陸戦隊）を以て塚本支隊に続き、北部西岸に上陸する計画であつた。

上陸は塚本支隊方面において若干の交戦があつたほかは大なる抵抗なく、十日午前中に島内要地を悉く占領し午後四時三十分アガニア市にあるグワム政庁を占領し、同島総督マック・ミラン海軍大佐以下約三百三十名の米軍守備部隊は降伏した。我が委任統治の南洋群島内に盤踞していた右米海軍の根拠地は、ここにあえなくも覆滅したのである。

2 ウェーキ島の攻略

ウェーキ島の攻略は、日本海軍だけで行つた作戦であつて、前述の如く開戦初頭の第一次攻撃は失敗に帰し、十二月二十二日攻撃を再興してこれを攻略した。

〔第一次攻撃——失敗〕 開戦と共に南洋部隊はウェーキ島を空襲し、地上にあつた敵戦闘機八機を炎上せしめ、爾後連日空襲を反覆して軍事施設を破壊すると共に、潜水部隊を以て同島を監視した。

南洋部隊に属するウェーキ攻略部隊は、第四艦隊司令部特別陸戦隊及び第六根拠地隊派遣陸戦隊を以て編成した上陸部隊と、第六水雷戦隊（朝風、夕風欠）金竜丸、金剛丸、第三十二、第三十三哨戒艇等の海上部隊とであつて、これが支援部隊たる第十八戦隊及び航空部隊、潜水部隊等の協力の下に作戦を実施したのである。

同攻略部隊は、支援部隊援護の下に、奇襲上陸の企図を以て十二月十日未明ウェーキ島に近接したが、暗夜風波のため上陸用舟艇の泛水遲滞し、天明後に強行上陸を行うの已むなきに至つた。天明後果然残存敵航空機及び砲台の猛烈な反撃を受けた。特に二、三機の

敵戦闘機は反復銃爆撃を行い、駆逐艦疾風、如月は相次いで轟沈せられ、他の艦艇にも損害を蒙るの状況となつた。わが方はこの敵機を直ちに制圧する方法なく、遂に一時攻撃を中止して避退するに至つたが、この攻撃の失敗は他方面の赫々たる勝利の蔭にかくれ大なる反響はなかつた。

〔第二次攻撃——苦戦の末占領〕 マーシャル群島のルオート島に避退したウェーキ攻略部隊は、陸戦隊を増強し、グワム島攻略作戦を終了した第六戦隊を支援部隊に加えて陣容を立て直し、十二月二十日必勝を期して第二次ウェーキ攻略に向つた。

これより先、航空部隊は連日昼夜に亘りウェーキ島に爆撃を加え、更に二十一日よりは、ハワイ攻撃の帰途にあつた機動部隊の一部即ち第八戦隊及び第二航空戦隊の協力を得て、残存敵機を掃滅することが出来た。

攻略部隊は二十二日夜半ウェーキ島に近接した。風波依然として強く、金竜丸の上陸舟艇は前回同様夜間の泛水が不可能となつた。

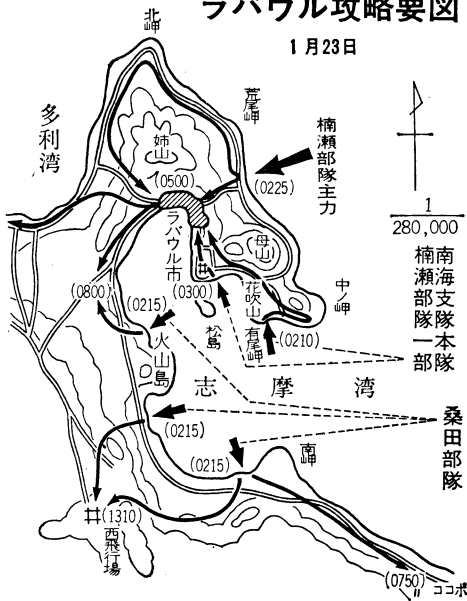
ここにおいて攻略部隊指揮官は悲壮なる決心の下に、第三十二、第三十三号哨戒艇をウェーキ本島南岸に擱坐せしめ、この両艇に乗っている陸戦隊の直接上陸を行うと共に、両艇から泛水した大発動艇二隻を以て、一部の陸戦隊をウィルクス島南岸に上陸せしむる如く命令した。

第一次攻撃によつて我が企図を知つていた敵は、日本軍攻撃の再挙を予期すると共に、当時の天象上、ウェーキ本島の上陸点が南岸一帯に限られていたので、多数の銃砲をこの方面に配備し防備を固めていた。

二隻の哨戒艇はこの敵の準備した真只中の敵砲台の直前に擱坐し、大発動艇の一隻はウィルクス島南岸の予定地点に達着したが、他の一隻は敵探照燈の照射と砲撃によつて針路を失し、ウェーキ本島南部の西端附近に達着した。各方面の部隊は敵の猛射を蒙り又も

ラバウル攻略要図

1月23日



容易ならざる状況を呈したが、リーフ上を匍匐接岸して上陸を強行し、両島一帯に激戦を展開した。奮戦の後遂に米軍指揮官カンニングム海軍中佐以下を俘虜とし、この日全島を占領した。

以上二次の戦闘において、わが方は如月、疾風の両艦を失い、哨戒艇二隻を廃艦とし、多数の戦死傷者を生じた。

3 長駆ラバウルの攻略

開戦以来、日本軍の攻撃により、太平洋方面の敵は逐次撃破せられ、今や敵はニューギニア、ビスマルク諸島、ソロモン群島を連る線を以て対日作戦の前進拠点とし、併せて濠洲防衛の第一線としていくようであった。

ラバウルは二つの飛行場と良好な艦船泊地を擁し、南東太平洋方面における敵の有力な基地であった。約五百の濠洲陸軍部隊がこれを守備し、近く更に約千五百の増派があるという情報に接していた。

ウェーキ島作戦一段落を見た後、第四艦隊の主力はトラック島において、又南海支隊は予定を変更してグвам島において、それぞれビスマルク諸島に対する作戦を準備中であつた。

〔ラバウル作戦発動〕 南海支隊長堀井陸軍少将は、一月三日グвам島からトラック島に到り、軍艦香取において第四艦隊司令長官井上中将及び直接護衛艦隊指揮官志摩少将との間に、ラバウル攻略作戦に関し協定を行った。

大本営は各方面における作戦の順調なる進捗に鑑み、既定方針に基きラバウル攻略作戦を実行するに決し、一月四日南海支隊長に対し「海軍と協同し概ね一月中旬以降成るべく速かにビスマルク諸島を攻略すべき」命令を発令した。而して既定計画によれば、南海支隊はラバウル攻略後は、状況これを許す限り、速かに同地の守備を海軍部隊と交代してバラオに集結することになっていた。然し大本営

は初期作戦の有利な進展により、全般兵力運用の余裕を得るに至つたので、ラバウル攻略後も、南海支隊をして依然同地を確保せしめ、爾後における同方面の作戦の要請に即応せしむることに変更した。

支隊長は一月八日、グワム島旧政府の支隊司令部において、ラバウル攻略に關し「支隊は主力を以てラバウル市及びラバウル東飛行場を、有力なる一部を以てラバウル西飛行場を攻略す。上陸日は一月二十三日と予定する」旨の支隊命令を下達した。

一月四日以来第四艦隊は、トラックを基地としてラバウルに対する航空攻撃を開始し、二十日以後は、先にハワイ作戦に任じた第一航空艦隊もこれに参加し、ラバウル、カビエン、サラモア等を空襲して敵航空勢力を制圧した。

〔南海支隊の行動〕 南海支隊は一月十四日午後一時三十分グワム島アブラ港を出港し、計画の如く当初真西に向い、夜に入り航路を東南に転じ直路ラバウルに向つた。船団は敵の妨害を受けることなく、十九日赤道を通過し、二十二日午後初めて島影を見る。既にニューアイルランド島とニューブリテン島との中間に進入したのであつた。船団は予定の上陸時刻に時間を延ばすため、両島の間を減速を以て時刻まで「之」字運動を続けた。

敵はこの行動を以てラバウルの南方ココボ附近に上陸するものと判断したもの如く、ラバウルに直接配備していた部隊を撤去してココボ正面に配備を変更した。南海支隊は幸運にもこの敵の虚に乗じて、比較的容易に上陸することが出来たのであつた。

船団は予定の上陸部署に従つて、一月二十二日午後十時三十分頃上陸海岸の三乃至五連沖合に漂泊した。この夜雲低く垂れて南十字星を見ず、約一米の微風あり。二、三の敵機上空に飛来し、照明弾

を投ずるも、遂に我が船団を発見するに至らず。ラバウル湾口を扼する敵の中岬砲台（筆者註、占領後命名）は既に爆砕せられ、活火山花吹山（筆者註、占領後命名）の煙光は暗夜に方向判定の好目標となつた。

上陸部隊の舟艇は、二十二日午後十一時四十分から二十三日午前一時五分の間、逐次発進し、主力を以てラバウル市東方海岸、一部を以てラバウル南方海岸に上陸を開始し、殆ど交戦なくして（二十三日）午前中にラバウル市及び東飛行場を占領し、西飛行場に向つた部隊は、ジャングル内において激烈な戦闘を交えた後、午後これを占領した。ラバウルは椰子林にかこまれた高層赤屋根の白人都市であつた。

〔鑑定——カビエン、スルミ占領〕 敵主力はニューブリテン島北岸に沿うて退却し、戦車、装甲車、自動車等をケラバット河岸に遺棄してジャングル内に遁走していつた。この敵を追撃中の歩兵第四十四聯隊主力はジャングルを伐開し、架橋によりウダル河を渡河し二十六日夕刻アンドレモ附近に到着したが敵を捕捉することが出来なかつた。一月末敵の一部はオーブン湾岸に、主力はワイド湾北方森林中にあつて、共に投降を希望しているとの情報により、部隊を両方面に派遣し、前者は一月末、後者は二月六日それぞれ投降した。投降者はベージ総督以下一千名であつた。

第十八戦隊を基幹とする海軍部隊は、一月二十日トラック島を発進し、二十三日ニューアイルランド島のカビエンに上陸してこれを占領し、航空基地を設定した。又別の一部隊は二月五日ニューブリテン島中部南側海岸の要地スルミを占領し、同地に前進航空基地を設定した。

第四章 南方攻略作戦の進展

一 シンガポールの攻略

1 ベラク河に向う突進

〔ジットラインの突破〕 昭和十六年十二月八日未明、シンゴラ附近に奇襲上陸した第五師団主力は、一挙ベラク河左岸に突進して同河渡河点及び飛行場を占領すべき重任を荷つて突進中、急遽国境方面より北進して来た英軍機械化部隊をサダオ附近において夜襲潰乱せしめ、息つく暇もなく、搜索第五聯隊長佐伯中佐の指揮する搜索第五聯隊主力及び戦車、野砲各一中隊を基幹とする佐伯挺進隊を先鋒とし、所在の敵を撃破して一意猛進した。

挺進隊は、九日以降歩兵第九旅団長河村少将の指揮下に入り、十一日正午より、折からの激しいスコールを衝き、戦車を先頭とし敗敵に混入して南下し、十一日夕刻ジットラインの前面に進出した。

ジットラインは、敵が少くも三箇月は日本軍を阻止し得ると誇称した数線の堅固な陣地で、歩兵九箇大隊及び戦車九十輛を基幹とする兵力で守備されていた。

挺進隊は、同夜直ちに夜襲を決行したが、敵の集中火を蒙り、突破するに至らずして十二日を迎えた。河村旅団長は、更に兵力を増強して、同夜夜襲を再興すべく準備中、同刻夕敵は全面的に退却を開始した。

軍の先陣として緒戦に快勝を博した第五師団は、更に突進を続行し、十三日ケダー州の首都アールスターを、次いで河村少将の指揮する歩兵第四十一聯隊主力は、十七日航空基地スングエイパタニー

を占領して、これを整備した。

第一次上陸部隊と共にシンゴラに上陸した山下軍司令官は、十六日アールスターにその戦闘司令部を推進した。

パタニーに上陸した歩兵第四十二聯隊長安藤大佐の指揮する同聯隊及び野砲兵二箇中隊基幹の安藤支隊は、ヤラー―ベトン道方面より国境を突破し、破壊された道路橋梁を補修し、敵の逐次抵抗を撃破しつつ、二十四日クアラカンサル附近に進出した。

十五日、師団は歩兵第四十一聯隊第三大隊（二中隊欠）基幹の部隊をベナン島に派遣し、十九日同島を無血占領した。

コタバルに上陸した第十八師団歩兵第二十三旅団長佗美少将の指揮する歩兵第五十六聯隊、山砲一中隊基幹の佗美支隊は、激戦の後コタバル市を占領し、更に南進して、十三日タナメラ飛行場を、又十九日クアラクライ飛行場を占領し、ここにマレー北部の敵重要軍事基地は完全に覆滅されるに至つた。

〔航空基地の推進〕 突進する地上部隊は、占領飛行場を速かに整備して、第三飛行集団の基地推進を容易にするため多大の努力を払つた。

第十二飛行団（戦闘二箇戦隊）の一部は、八日シンゴラ飛行場の整備と共に、これに着陸して軍の上陸を掩護した。

北部マレーの基地は、着々と整備された。

十九日第三飛行団（戦闘一箇戦隊、軽爆二箇戦隊）はスングエイパタニーに躍進して、第五師団の追撃に密に協力した。正に痒いところに手の届くような協同振りであつた。

次いで第三飛行集団長菅原道大中将もまた二十二日勇躍同地に躍進し、その他の航空部隊も逐次北部マレーに基地を推進し、年末ま

でにこれを完了した。

かくて、開戦前最も憂慮された基地の離隔に因る作戦上の危機は、未然に防ぐことができた。

軍隷下の近衛師団が、泰国安定確保のため、一時第十五軍司令官の指揮に属していたことは、既に述べたが、同師団は、十一日原所属復帰を命ぜられ、鉄道により逐次南下し、師団長は、二十三日アロールスター軍戦闘司令所に到着した。師団はタイピン附近に進出して爾後の作戦を準備した。又戦車部隊及び第五師団の車輛等を主とする第二次輸送部隊は、十六日シンゴラその他に上陸した。かくて軍の戦力は飛躍的に増強されるに至つた。

この頃、第十五軍の宇野支隊は、十四日ヴィクトリヤポイントを、又南方軍直轄の川口支隊は、十六日北部ボルネオの要地ミリーをそれぞれ占領し、軍の両翼は掩護される態勢となつた。

〔軍作戦計画の修正〕 軍は、一般の情勢特に海軍及び第三飛行集團の緒戦における予期以上の戦果と軍従来の戦績とに鑑みて、既定作戦計画の一部を修正又は具体化するの必要を認め、十七日アロールスター戦闘司令所において、修正作戦計画を策定した。即ち第五師団と近衛師団とを以て、西海岸に沿ひクアラルンプール方面に突進し、佯美支隊を速かにクワンタン方面よりクアラルンプール又はゲマス方向に前進して軍主力の作戦を容易にし、又第三次輸送部隊としてシンゴラに到着する第十八師団を、到着後一時同地に待機させ、好機に乗じてマレー南東海岸のメルシン附近に上陸し、速かにクラン及びジョホールバルに進出して敵主力の退路を遮断させる。かくして第五師団、近衛師団、佯美支隊及び第十八師団を以て、ジョホール洲以北、クアラルンプール以南の地域において、敵主力をシンガポールより分断して捕捉しようとする従来の作戦構想を具体化したものであつた。

〔ベラク橋梁破壊〕 当時敵は、緒戦における急襲と甚大なる打撃

のため全く受動に陥り、今後敵の取る方策は、道路及び橋梁の破壊と逐次抵抗とによつて我が進撃を遅滞させ、この間兵力の増勢を図らうとしているようであり、正に破壊力と修理力との角逐が予想された。これら敵の企図は、作戦開始前より予期されたことであり、これを封殺する手段としては、ただ神速なる突進あるのみと考えられた。この見地において、従来の作戦計画においても、特にベラク河橋梁の占領を重視したが、修正の作戦計画においても、第五師団に対し、万策を尽してこれが確保に勉める如く要求された。蓋し該橋梁を敵に破壊された場合においては、突進は少くも一週日は遅延するものと予想されたからである。

山下軍司令官は、二十二日スンゲイパターニーに第三飛行團長を訪れ、敵のベラク河橋梁破壊の防遏に協力せられたい旨要請した。飛行團長は、この戦闘が極めて至難であることは十分承知していたが、第二十五軍爾後の作戦に影響するところ大なるを思い、その熱望に応えてこれを快諾した。

第三飛行集團長また山下軍司令官のこの要請を重視し二十三日第三、第七、第十二各飛行團の全力を挙げて、ベラク河橋梁確保に協力する如く部署した。

二十三日朝、第三飛行團の飛行第六十四聯隊及び第十二飛行團はベラク河橋梁附近に出勤したが、惜しむべしこの時橋梁は既に破壊されていた。

第五師団は、二十五日ベラク河畔のクアラルンプール附近に到着したところ、敵は既に同河左岸に退却し、橋梁は、クアラルンプール及びプランチャ附近において破壊されていた。師団主力は、已むなくタイピン附近に集結して、ベラク河の渡河を準備することとなつた。

2 ベラク河を渡河、クアラルンプールへ

〔追撃部署〕 南方軍は、第二十五軍の戦況順調に進展しつつあるを見、二十三日軍に對し、迅速なるシンガポールの攻略を命ずると共に、速かにクワンタン飛行場を占領整備して、第三飛行集團の推進を促進させた。

全軍志を一にして突進を敢行した目標のベラク橋梁は、遂に破壊された。これは又予期したことでもあり、渡河のための準備には遺漏はなかつた。然し、我が神速なる突進が、敵の戦意を喪失させたことは確實である。

軍は、この機に乗じて、一挙にベラク河を渡河し敵をしてカンパル以南の長隘路に扼る余裕なからしめる如くクアラランブルに向い敵を急追するに決し、二十五日夕各部隊長をタイピンに招致して、これに関する軍命令を下達した。

この頃に至り、軍は、敵の増援來着の情報にも鑑みて、戦果を犠牲にし多少敵を逸しても、時日を短縮して、速かにシンガポールを占領するの必要を痛感するに至つた。

この命令において、近衛師団を第五師団の後方に続行させたのも、近衛師団を以て、隨時第五師団を超越させ、常に突進威力に新鋭を保持して突進速度を増大しようというこの構想に基いたものであつた。而して、敵若しカンパル又はタンジョンマリムの線において、真面目に抵抗する場合は、適時近衛師団を第一線に増加し、しからざる場合は、第五師団を一举クアラランブルに突進させ、同地附近において近衛師団を超越交代させる腹案であつた。

〔放胆な舟艇機動〕 第五師団の河村部隊は、二十六日夜、ブランチャ附近においてベラク河を渡り、センル——ゴベル——カンパル——ターバードを追撃した。然るところ、二十八日以降、カンパル東北側に陣地を占領する敵の抵抗に會して戦況進展せず。

師団長は、予め準備したところに基いて、歩兵第十一聯隊長の指揮する歩兵一箇大隊半を基幹とする辺渡支隊を編成して、舟艇機

動により敵の背後を遮断させた。

支隊は、十二月三十日夜ルムトを出発、洋上に元且を迎え、途中敵機の攻撃を受けつつも機動に成功し、一月四日スンカイに進出して、軍主力方面の敵退路を脅威した。これがため、さしも頑強に抵抗した敵も、一月二日退却を開始するに至つた。

ここにおいて、師団は、歩兵第四十二聯隊を第一線とし、河村部隊を超越して、クアラランブルに向い急追させた。

この日、フィリッピン方面においては、第十四軍はマニラの攻略に成功した。

近衛師団は、第五師団と併列して、二十六日朝クアラカンサル附近においてベラク河を渡り、二十八日イポーに突入し、同飛行場を占領整備した。爾後、第五師団に続行し、軍命令により、近衛歩兵第四聯隊長国司大佐の指揮する同聯隊（第三大隊欠）を基幹とする国司支隊を編成して、第五師団の戦闘に協力させた。

支隊は、九日以後、一部を以て西海岸に海上機動を実施し、数次に亘り敵の退路を脅威又は遮断して、第五師団の追撃に密に協力した。特に、その第二大隊の海上機動によるクアラランブル南方の要衝カザン附近の占領は、同方面の戦況進展に絶大なる寄与をなした。

制海権なき海上において、一見無暴なるが如きこの種舟艇機動が、英軍をして絶えず背後に脅威を感じさせ、常に過早に退却する動機を作つたものようであつた。

〔スリムの殲滅戦〕 カンパルの戦闘に敗れた敵はスリム附近において新たに増援を得、再び地の利に拠つて頑強な抵抗を試みた。

第五師団歩兵第四十二聯隊は、五日スンカイに達し、七日早朝より、スリム附近の敵に對する攻撃を開始し、歩戦砲工密に協同し、約三時間を以て縦深六村に亘る七線の陣地を果敢に穿貫突破してトラックに進出し、陣頭を突進した戦車中隊は、猛火を冒しつつ敵

背後のスリム橋梁に突進して、完全に敵の退路を遮断し、同日夕までに、歩兵二箇旅団、砲兵三箇聯隊を基幹とする敵に潰滅的打撃を与えた。

師団長は、歩兵第四十二聯隊の赫々たる戦果を拡張するため、爾後歩兵第十一聯隊を突進部隊とし、歩兵第四十二聯隊を超越して敵を急追させた。

歩兵第十一聯隊は、随所に敵を撃破しつつ、近衛師団国司支隊の一部が敢行した海上機動による退路遮断の成果を利用して、十一日午後八時敵の抵抗を受けることなく連邦首都クアラルンプールに突入し、師団司令部また十二日朝同市に進入した。

〔クワンタン飛行場の占領〕

クワンタン飛行場占領の目的を以て、十二月二十三日トレンガヌを出発した佗美支隊は、二十七日クワンタン北方地区に進出して、当面の敵に対する攻撃を準備し、主力を以て二十九日より攻撃を開始し、三十一日クワンタンを奪取し更に頑強に抵抗する敵に対し、一月三日夜襲を敢行して同飛行場を完全に占領した。

第十八師団の歩兵第五十五聯隊長木庭大佐の指揮する同聯隊（一大隊欠）を基幹とする木庭支隊は、海路クワンタンに上陸し、同地飛行場を占領する予定であつたが、佗美支隊のクワンタン進出が予想以上に早かつたため、予定を変更してコタバルに上陸し、陸路南下、一月上旬クワンタンに進出し、佗美支隊長の指揮下に入つた。

3 ジョホール水道への突進

〔ゲマス突破〕 この頃敵は、マラッカ、ムアル、ゲマスの線为主抵抗線とし、ジョホール洲の確保を企図すると共に、シンガポールの増強を図り、航空勢力の挽回に努力しているものと判断せられた。

而してこれを裏書する如く、一月十五日兵員千六百名を搭載した軍艦がシンガポールに到着、十六日更に増援隊到着、P四〇型駆逐機五〇機及びB一七爆撃機到着等の情報か、次から次へと入手された。

一月十日、山下軍司令官は、シンガポールに向い敵を急追するに決し、近衛師団にはマラッカを経て、又第五師団には、タイピン、ゲマス、クルアンを経て、それぞれシンガポールに向い敵を急追させると共に、戦車第一聯隊長向田大佐の指揮する同聯隊を基幹とする向田支隊を軍直轄とし、近衛師団主力の後方を統行し、クアラルンプール附近において第五師団を超越して、カヂヤン——セレンバン——タイピン——ゲマス道を、先ずゲマスに向い急追させた。

向田支隊は、十二日第五師団を超越し、突進に突進を重ねて、十四日午後早くもゲマス西方十軒附近に達した。この頃、支隊進路の道路及び橋梁は悉く破壊せられ、側方行動不如意なる路上において、支隊は、空地よりの熾烈なる攻撃を受けて損害続出し、攻撃更に進展せず、かかる状況において軍は、第五師団を推進し、向田支隊をその指揮下に入らしめた。

第五師団長は、河村旅団に向田支隊を配属してこの敵を攻撃させた。旅団は、包囲迂回を併用してこれを力攻、十九日未明敢行した夜襲により敵第一線を突破し、同日夜、敵は退却を開始した。

〔バクリの敵殲滅〕 近衛師団は、ラワン附近において第五師団を超越して、セパン河に進出し、近衛歩兵第四聯隊を基幹とする国司追撃隊を以て海岸道方面より、近衛歩兵第五聯隊長岩畔大佐の指揮する同聯隊を基幹とする岩畔追撃隊を以てマラッカ西側を経て、共にムアル河の線に沿ひ急追させた。追撃隊は、一部を以て海上機動を併用しつつ突進し、十五日目標線に進出した。

十六日未明、ムアル河を渡河して、追撃を続行中の国司、岩畔追撃隊は、十八日朝バクリ附近において、頑強なる敵の抵抗に会した。激戦死闘力攻するも、敵は頑強に抵抗して譲らず、阿追撃隊の

各一部は全圖を秘匿して敵の背後深く迂回し、その退路を遮断するに及び、敵は、周章狼狽死物狂いの脱出を試みたが、既に二重の鉄環内に捕捉せられ、逐次圧縮せられて、二十二日潰滅するに至つた。

〔シンガポール望見〕 第五師団杉浦旅団の歩兵第二十一聯隊は、河村旅団を超越して敵を急追し、二十一日ラピスに、二十四日ヨンベンに達した。爾後、師団は杉浦、河村両旅団を、或は超越交代させ、或は併列して突進を続け、二十五日クルアンを占領した。

ジョホール州内における敵の道路及び橋梁の破壊は、極めて大規模且つ徹底的となり、その抵抗は一層強靱となつたが、師団は依然突進を続け、一月三十一日午後三時三十分、待望のジョホールバルに突入した。

近衛師団また二十五日バトバハに、三十一日夕ジョホール水道の線に進出した。

第三次輸送部隊として、脾肉の歎をかこちつつ待機していた第十八師団は、十二月二十日カムラン湾出航、二十三日シンゴラに上陸した。

同師団は、当初マレー南東海岸のメルシン附近に上陸して、クアラルンプール方向に突進し、敵主力の退路遮断に任せしめられる予定であつたが、軍主力の突進意外に進歩したため、計画を変更して、陸路南下することとなつた。

軍は、これを速かに輸送するため、軍保有の自動車二百輛のほか、奇しくも牟田口師団長と期を同じくする西村、松井両師団長より贈られた各百五十輛の自動車を集結してこれに当らせた。師団は、一月三十一日クルアンに到着し、先着の佗美、木庭両支隊を掌握した。

かくて、上陸以来作戦日を重ねること五十余日、この間勇戦敢闘、一千余軒の敵中突破を完遂して、今待望のシンガポールを俯瞰

し、右から第十八師団、第五師団、近衛師団の精鋭水道の高地に響を並べ、牙城攻略の準備に着手した。

4 シンガポールの陥落

〔攻撃準備〕 抑々、シンガポールの防備は、元来海岸配備で、背面の陸正面防禦施設は、開戦後二箇月間に急造したものである。従つて、さほど堅固とは考えられないが、敵の抵抗は真面目且つ頑強と思われ、特にブキテマ附近の陣地はシンガポール防衛の要と考えられた。又、敗戦による志気の沮喪は、新增援部隊の到着によつて、逐次回復しつつあるものと判断された。

軍は、マレーにおける連続せる敗戦のため、志気沮喪のまま、要塞に遁入した敵軍の陣容未だ整わない間に、速かにこれを攻略するの必要を痛感し、軍司令官は、一月三十一日午前十時クルアン戦闘司令所において、攻撃準備に関する命令を下達し、攻略計画を開示した。

攻撃準備は、着々と進歩した。命令下達より一週間、正に血の滲むような努力が続いた。鉄道隊及び工兵隊の鉄道及び道路の修復作業、後方部隊の営々たる作戦準備は、特筆さるべきものであらう。

八日払曉各部隊の準備は成つた。

軍は、上陸開始を二月八日二十四時と定め、従来の攻略計画に、近衛師団の一部を七日ウビン島に奇襲上陸させて敵を牽制すること、近衛師団は第二練兵団として第五師団の後方より上陸する予定を変更し師団の熱望に依つて左第一練兵団として九日陸橋東側より上陸させること、軍砲兵隊は師団砲兵を統一指揮しないことの三項に関する修正を加えた。

軍は、四日その戦闘司令所をスクダイに置き、同日攻略実施に関する命令を下達した。

〔上陸——ブキテマの占領〕 牙城攻略の幕は切つて落された。

軍砲兵隊（野戦重砲兵第三、第十八聯隊、独立重砲兵第二大隊基幹）は、八日朝来、敵砲兵、指揮組織、飛行場等に対して猛火を集中し、各師団の砲兵またこれに加わり、第三飛行集団の猛爆と相呼応し、軍進まざるに、既に牙城の崩壊を想わせるものがあつた。

第十八師団（川口支隊欠——野戦重砲兵第二十一大隊属）は、ベルマ河以南地区より、第五師団（戦車第一聯隊属）は、同河東側地区より、共に八日午後十二時渡河を開始し、熾烈な砲火を冒して、いずれも上陸に成功、敵の執拗なる逆襲を撃退して、同日夕刻それぞれテンガー飛行場西側地区及びテンガー飛行場に進出した。

次いで、第十八師団は、十日夜ブキテマ西方地区に進出し、十一日払暁より同高地に対する攻撃を開始した。第五師団は、十日薄暮ベンジャンに突入し、一挙ブキテマ方向に突進し、十一日夕ブキテマ東側二五五高地を占領した。

戦況は順調に進展している。

諜報によると、ブキテマ高地にはコンクリート製陣地もあるらしく、軍砲兵隊の進出を待つて攻撃すべきであるが、今や敵に一刻の猶予を与えるべきでないとの判断から、第十八師団は、更に予備隊を増加し、混戦乱闘の末、夕刻敵を潰走せしめてこれを占領した。

爾後第十八師団は、十三日ギャップ西側高地を占領、十四日ケッペル兵営附近において激戦を展開した。この陣地は敵の恃む最後の拠点でその抵抗は頑強を極め、我方死傷続出、戦闘凄惨を極めた。力攻一昼夜、十五日午後に至つて一五〇高地を奪取して敵の死命を制した。

又第五師団は、逐次敵を圧迫し、十四日第三戦車団の配属を受け、同日夕から敵陣地の鎖鑰たる墓地に対し歩戦砲工の威力を集中してこれを奪取し、十五日その南側に向い戦果を拡張した。

近衛師団（西貢残置の近衛歩兵第三聯隊欠、戦車第十四聯隊属）は、敵を陸橋以東に牽制するため、搜索聯隊を基幹とするウビン島

支隊を、八日未明ウビン島に上陸させ、敵の抵抗なくこれを占領した。師団主力は、八日昼間陽動を行い、同夜ジョホールバル方面に転進し、九日夜同地西方地区において渡河してこれに成功し、十日朝マンダイ山北側高地を、十二日夜マンダイ山を完全に占領した。

爾後師団は、南部水源地東北に進出したが、九〇高地附近の優勢な敵と遭遇して戦況進展せず、師団長は、カラン飛行場の占領を企図し主力をバヤレバー方向に転用し、十四、十五両日同地附近の敵を攻撃して、十五日夕刻、カラン飛行場東北側シンガポール東郊に達した。

軍砲兵隊は、敵砲兵の妨害を受け、進出意の如くならなかつたが、十四日ブキテマ附近に陣地を占領し、敵砲兵の制圧破壊、交通遮断及び擾乱射撃に任じた。又第三飛行集団は、第三飛行団の主力を以て地上作戦に直接協同すると共に、シンガポールより脱出を企図する敵艦船を攻撃し、第十二飛行団の主力を以て制空に、又第七飛行団の主力を以てシンガポール島の要地及び敵砲兵を制圧した。敵陣地は爆煙に掩われ、彼我の砲声殷々と轟きシンガポールの市街は、空爆、砲爆、火災のため黒煙天に冲した。

〔敵我が軍門に降る——イエスカーノカ〕頑強に抵抗した敵も、遂に力竭きて我が猛攻に屈し、二月十五日午後一時、英軍軍使ニュビキン代将、我が第五師団正面に來り連絡を請うた。軍は、直ちに參謀杉田一次中佐を前線に派遣してこれと応接させた。

英軍軍使は、総督は停戦交渉のため日本軍司令官の來郎を希望している旨を申出た。杉田參謀は軍使に対し、降伏意志の有無を質したが、彼は明言を避けた。我方は、貴方に降伏の意志なければ、これ以上交渉の要なしと回答し、降伏条件についての書き物を手交し、若し英軍に降伏の意志あれば、この条件を受諾し、全条件の実施を部下軍隊に命じたる後、英軍司令官自らブキテマ道路上我が第一線に來りて、降伏を申出られたき旨を明かにした。なお英軍司令

官の来降決まれば、カセイホテルの頂上に白旗を掲げられたし、これによつて、我方は射撃を中止するであらうと附言した。かくて、英軍軍使は一旦帰還した。

次いで英軍司令官バーシバル中將、我が前線に來り、山下軍司令官は同日午後七時ブキテマ北方約一杆フォード工場においてこれと會見し、午後七時五十分無條件降伏を確認し、「降伏に関する回答書」に署名した。

軍は、直ちに各部隊に攻撃中止を命じた。

シンガポールは、遂に陥ちた。百年の牙城潰えた歴史的事実は別として、戦争遂行のための戦略態勢は、ここに一大転機を劃し、印度洋の門戸は西に向ひ大きく開かれた。

天皇陛下には、マレー方面における陸海軍の戦捷を嘉賞せられ、二月十六日次の勅語を賜つた。

勅 語

馬來方面に作戦せる陸海軍部隊は緊密適切なる協同の下に困難なる海上護衛並輸送と果敢なる上陸作戦とを断行し炎熱に耐へ瘴癘を冒し長驅進撃随所に勁敵を破り神速克く新嘉坡を攻略し以て東亞に於ける英國の根柢を覆滅せり朕深く之を嘉賞す

マレー攻略作戦經過は附図(第二)の如くである。

二 マニラの攻略

既に述べた如く、昭和十六年十二月八日より開始せられた陸海軍航空部隊の航空撃滅戦は、所期の戦果を収めたものの如く、中旬以降敵機の活動殆ど見るべきものがなかつた。

十日乃至十二日の間、アベリ、ビガン、レガスピーに先遣上陸した田中、菅野、木村各支隊は、予定の如く飛行場を占領整備し、更に戦果を拡張中であつた。

第五飛行集団(集団長小畑英良中將)は、十一日以降逐次ルソン島の占領飛行場に基地を推進し、主力を以て軍主力の上陸掩護及び地上作戦協力に、一部を以て残存敵機の撃滅に任じた。

マニラ攻略の第一段作戦は、予定の如く成功した。

風波のため難渋しつつも、十二月二十二日、ルソン島リシガエン湾の上陸に成功した第四十八師団(田中支隊及び菅野支隊欠、戦車二箇聯隊、十五榴、十加各二大隊属)は、速かにアグノ河渡河点を占領する目的を以て、ウルダネタ附近の敵を撃破し、二十五日夕刻アグノ河の線に進出して、同地を占領した。師団は、逐次南方に地歩を獲得し、主力は、逐次ビナロナン、タヌグの間に集結して、爾後の前進を準備した。

軍直轄のバギオ支隊(歩兵第九聯隊の大隊長の指揮する一箇中隊)は、二十五日夕刻同地を占領した。

(マニラへの進撃) 第十六師団(歩兵第九聯隊、田中支隊、三浦支隊欠)は、十二月二十四日未明、ラモン湾に上陸、タヤバス山系以西の地区に向ひ前進を開始し、敵を撃破して、サンパロック及びビンハーン附近に進出した。爾後、師団は敵の抵抗を排除しつつ、西進を続行し、二十五日バグビラオ附近に、二十七日その先頭を以てカンデラリヤを占領した。この日初めて先遣の木村支隊と連絡をとることが出来た。

ルソン島の敵は、第四十八師団及び第十六師団との戦闘に多大の損害を蒙りたるものの如く、イバ及びサンマルセリノ附近にあつた敵は、マリベレス方面に逐次後退中であり、米極東軍司令官は、二十四日マニラを脱し、コレギドール要塞に退避した。

本間軍司令官は、敵はコレギドール要塞及びこれに連繫するバタインの一角に拠り持久を策する算大なるものと判断したが、依然既定の方針に基いて、首都マニラを速かに攻略するため、主力を以て先ず当面の敵を撃破して、カバナツアン附近に向う前進を部署する

と共に、第二次輸送部隊として台湾の高雄に待機中の第六十五旅団に対し、二十九日高雄出航、マピラオ西方泊地に前進し、同地に上陸すべきを命じた。

〔マニラか、バターンか——米西戦争の例〕 第四十八師団は、二月二十八日アグノ河の線出發、戦況順調に進展し、二十九日にはカバナツァンの前面に進出した。

軍は、二十八日戦闘司令所をビナロナンに推進した。二十九日第五飛行集團は、第十一航空艦隊と協同して大挙コレギドール要塞を攻撃して多大の戦果を収めた。

この頃、空中偵察の結果、敵有力部隊がバターン半島に侵入した形勢が愈々顯著となつてきた。

ここにおいて、軍は爾後如何に作戦を指導すべきかが軍司令部内において問題となつた。即ち、依然従来計画通り一挙マニラに向うべきか、第四十八師団の有力なる部隊をパンパンガ河右岸に推進してバターン半島方面に対する爾後の攻撃を準備すべきかの問題である。

元來、比島作戦計画立案の当時において、大本営は、敵がバターン半島に立籠つて最後の抵抗をするものとは判断していなかつた。

第十四軍參謀長前田少将は、大本営幕僚との作戦會議において、米西戦争の例もあり、かかる場合のあることに言及したが、一般には深く顧みられなかつた。大本営は、米国の極東における政治的及び軍事的根拠たるマニラの攻略を重視し、敵野戦軍の撃破は、このマニラの攻防を繞つて行われるものと考えていた。従つて、比島に対する作戦計画は、迅速なるマニラ攻略という方針によつて貫かれており、第十四軍も亦この大本営の方針によつて作戦を指導して來たのである。今や、敵のバターン半島方面への移動を眼の前にして、爾後如何に作戦を指導すべきかは軍司令官に課せられた重大なる決心問題であつた。

熟慮の末、軍司令官は、当初の計画に従い、迅速にマニラを攻略するに決し、二十八日午後これに関する命令を下達した。

〔マニラの陥落〕 第四十八師団は、三十日払暁よりカバナツァン附近の敵を攻撃し、直ちに追撃に移り、三十一日バリウアグ附近を占領した。

菅野支隊は同日タルラックに進出した。

上島支隊（歩兵第九聯隊長上島大佐の指揮する同聯隊の歩兵二箇大隊基幹）は、同日朝カルメン附近出發、タルラック附近の敵を攻撃して、翌三十一日これを占領した。

第十六師団は、二十九日サンパブロ及びリバに進出し、翌三十日サントトーマスを占領した。

三十日の空中偵察の結果、タルラック方面の敵は、依然バターン半島方向に退避を続け、マニラ方面よりも兵力を移動中なるを知つた。

軍は、主力を以てマニラを攻略するの企図には依然變更ないが、第四十八師団の歩兵一箇聯隊野砲兵一箇大隊基幹をサンフェルナンド方面に推進し、デナルビアン及びヘルモサ附近に予想される敵陣地に対する攻撃を準備せしめることを決定し、同日夜これに関する部署を行つた。

昭和十七年一月一日、第四十八師団は、ブラカン、サンホセ及びデルモンテ附近に進出してマニラ攻囲の態勢を整えた。

菅野支隊は、同日バンバン附近の敵を攻撃し、上島支隊またこの戦闘に加入して、夕刻敵を撃破した。

第十六師団は、一月一日夜半サボテに、木村支隊はタナウアンに進出した。

第六十五旅団の出航は颱風のため一日遅延し、一日マピラオに上陸し、同地附近に集結した。

軍司令官は、一日カバナツァンに前進した。

かくて、マニラ攻略の態勢は整つた。

軍は、マニラ市の処理に關しては、これを完全に保護するため、軍隊の進入を控制していたが、一日夕刻、第四十八師団長より、「軍のマニラ市を完全に保護せんとする切なる希望は火災に依り既に失はれ兵団は要すれば此の火災よりマニラを救出するの必要を認め主力を以てマニラ市に進入しバシック河南側地区に兵力集結の企圖を有す右御指示乞ふ」旨の電報もあり、軍司令官は、マニラ市に対する敵の破壊を防止すると共に、同地邦人を救出するために、同日午後八時、第四十八師団長に對して、所要の兵力を以てマニラ市を占領確保すべきことを命じた。

次いで、二日午前十時、第十六師団長に對し、速かに所要の兵力を以て南部マニラ市を、又各一部を以てキャビテ及びバタンガスを占領すべきを命じた。

かくて、二日第四十八師団は、歩兵団長の指揮する歩兵三箇大隊を以て午後五時四十五分、第十六師団は、歩兵一箇大隊及び搜索聯隊を以て午後六時、共にマニラ市に進入し、重要施設の確保と治安維持に當らせた。第十六師団は、別に一部を以てキャビテ軍港及びバタンガスを占領した。

當時マニラ及びキャビテの重要施設は、撤退する敵のため、或は火災を蒙り、或は破壊せられ且つ土民の掠奪横行の状況にあつたが、日本軍の進入と共に、急速に治安と秩序とを回復するに至つた。

比島攻略作戦経過は附圖第二の如くである。

三 ビルマ作戦

1 攻略の初動

ビルマは、進攻作戦終結後における長期持久作戦遂行上、南方要

域の北翼拠点としてこれを確保すべき戦略的要機を具えているのみならず、中国に対する援將ルートの遮断と、印度に対する対英離反工作促進という大なる政略的意義もあつて、大本営は、開戦当初から、ビルマ全域作戦を実施することを熱望していた。然し開戦前においては、陸軍全般兵力の關係から已むを得ず、南方軍に對し、「南方攻略作戦間機を見て南部ビルマの航空基地を奪取し尚作戦一段落し状況之を許す限りビルマ処理の爲の作戦を実施す」る如く指示した。

〔大本営の作戦構想〕 而して、当初大本営の抱懷した作戦構想は、先ず泰國に進駐して同国の安定確保に任ずべき第十五軍（軍司令官飯田祥二郎中將）を以て、速かにビルマ進攻の準備を整え、作戦初期機を見て、南部ビルマの敵航空基地を覆滅して、マレー方面作戦軍の側背を安全にし、次いでラングーン附近を攻略して英將合作の拠点を粉碎し、更に作戦一段落に伴い、兵力を増加してビルマにある英將連合軍を撃破して、中国及び印度に対する圧迫を強化することにあつた。

大本営は、右作戦に任ずる第十五軍の兵力として差当り第三十三師団及び第五十五師団主力を基幹とする兵力を充當した。

〔進攻準備〕 飯田軍司令官は、十二月九日バンコックに入り、逐次到着する部隊を部署した。即ち、先に泰國安定確保のため、一時軍の指揮下にあつた第二十五軍隷下の近衛師団を十二月十一日以降鉄道輸送により原所屬に復帰させ、鉄道及び行軍により到着する第五十五師団の主力をラーヘン、メソード間に、その一部をカンチャナブリー西方地区に集結させ、又第三十三師団は、昭和十七年一月十日海路バンコックに上陸したので、これをラーヘン附近に集結させた。

軍の作戦準備において最も苦慮したのは、ラーヘン——メソード道を自動車道に改修する問題であつた。元來泰・緬國境附近の地勢

は、山地険峻、所々岩層露出し、且つ樹木竹林密生し昼なお暗い状態で、この道路の改修には多大の困難が予想されたが、幸い当時日泰間の友好は日に改善せられ、泰国の積極的協力もあつて、工事は順調に進捗した。

軍司令官は、予想作戦地の地形に備えて、第一線師団及び軍直部隊の車輛部隊を駄馬（牛）に改編する如く処置した。

「アナセリウムへの進攻」昭和十七年一月上旬頃における在ビルマ敵兵力は、歩兵三十七箇大隊、砲兵約十三箇中隊を基幹とする兵員約四万で、その配備の重点は、モールメン地区、東部シャン州、ラングーン附近及びマンダレー附近の四地区と判断せられ、印度軍及び重慶軍増加の気配も逐次濃厚となり、作戦にあたり十分なる考慮を必要とする情勢であつた。

ただでさえ貧弱な鉄道輸送力がマレーに對する優先輸送のため更に低下したこと、道路不良のため軍需品の集積輸送が遅延したこと及び車輛部隊の改編に時間を要したこと等は著しく軍の作戦準備を阻んだ。しかし一方敵機の来襲は逐日激化し、ビルマ方面に對する英軍及び重慶軍増強の徴候も逐次濃化してきたため、軍は準備不十分ながらも、速かに南部ビルマの敵航空基地を奪取するの必要に迫られた。

ここにおいて、軍司令官は、一月上旬バンコックにおいて作戦要領を確定し、速かに南部ビルマに進攻しサルウィン河の要線を占領して、ラングーンに向う爾後の作戦を準備するに決し、各部隊の前進を部署した。即ち、第五十五師団の歩兵第百十二聯隊の一部（沖支隊）を以て主力に先立ち、カンチャナブリー方面よりタボイ方面に作戦して敵を牽制させ、第五十五師団の主力を以てメソード附近泰・緬国境を突破して、モールメン附近を占領させ、第三十三師団を以て第五十五師団主力に続行してバアン方向に前進させる。

沖支隊は、一月四日国境を出発し、敵を牽制しつつ、一月十九日

タボイを占領し、第五十五師団は二十日国境を通過し、所在の敵を撃破し、沖支隊の牽制効果を利用しつつ前進し、二十二日カウカレィを占領した。次いで師団は、三十日モールメン附近に進出し、同地東側の敵を力攻して、三十一日午前九時モールメンを占領し、沖支隊をその隷下に復帰させた。又第三十三師団は、二月四日バアンを占領した。

2 ラングーン陥落

〔大本営の指導〕既に述べた如く大本営は、南部ビルマの航空基地奪取のほかは、作戦一段落後において実施する如く企図していたのであるが、全般的情勢上、速かに本格的ビルマ作戦を開始する必要を認め、一月二十二日即ち第十五軍が泰・緬国境を進攻している頃、南方軍司令官に對して「海軍と協同してビルマの要域を攻略すべき」を命じ、同時に左の要旨のビルマ作戦要領を示達した。

ビルマ作戦の目的はビルマに於ける英国軍を撃破してビルマの要域を占領確保し併せて対支封鎖を強化するに在り之が為第十五軍を以て成るべく速かにモールメン附近サルウィン河の線に進出して作戦準備を整へたる後主力を以てモールメン——ベグー道に沿ふ地区より速かに中部ビルマの要域を占領す

〔ラングーン占領〕南方軍及び第十五軍においては、ラングーンに向う作戦に關して逐次研究していたが、泰・緬国境附近の自動車道の構築が遅延したため、重材料及び彈薬の前送が進捗しないので、サルウィン河を越えて行かう作戦は二月初頭頃においては尚困難であると考えられていた。然し、英軍増援部隊のラングーン上陸、有力なる重慶軍の南下等の情報も入手され、マレー作戦も順調に進捗し、一月末ジ・ホールに達し、マラッカ海峡方面より海路補給も近く期待し得るに至ると予想されたので、南方軍は、二月九日第十五軍に對し、「現作戦に引続き努めて敵を撃滅しラングーン地方に進

出し且つ成るべく北方に地歩を獲得してマンダレー及びエナンジョン附近に向ふ作戦を準備すべき」を命じた。

軍司令官は、十七日モールメンンにおいて、ラングリン攻略の目的を以て先ずシッターン河畔に向うに決し、第三十三師団及び第五十五師団に対し、二月二十日ビリ河の線を通して、当面の敵を撃滅しつつシッターン河畔に進出し、爾後の前進を準備すべきを命じた。

第三十三師団は、二月十一日夜サルウィン河を渡河し所在の敵を撃破しつつ、二十二日シッターン河畔に進出、第五十五師団は、同日チャイトを占領した。

一月フィリップピン方面より転用せられ、第十五軍の作戦に協力を命ぜられた第五飛行集団長は、一月十五日バンコックに到着、第三飛行集団の指揮下にあつた第十飛行団を原所屬に復帰せしめられ、泰国を基地として直ちに在緬米航空勢力の撃滅を図ると共に軍の作戦に協力したが、基地の離隔と敵航空勢力の逐次増勢とのため、協力の如くならず、地上部隊は、主として夜暗を利用して行動するの已むを得ない状況であつた。

軍司令官は、二十日カマサインに、二十三日チャイトに軍戦闘司令所を推進した。

二十七日、軍は、ラングリン攻略の目的を以て、三月三日シッターン河を渡河し、主力を以てベグー以西の地区を先ずラングリン北方地区に前進するに決し、各部隊を部署した。

軍の第一線各部隊は、予定の如く行動を發起し、状況極めて順調に進展した。

この状況を見た軍司令官は、現作戦に引続きラングリンに向ひ突進するに決し、三月五日これに關し命令を下達した。

第三十三師団は、極力企図を秘匿しつつ急進し、六日ワネチャン北側地区に進出し、更に七日日没と共に行動を開始し、一挙ラングリンに殺到した。師団の一部には混戦乱闘に陥るものもあつたが、

歩兵第二百十五聯隊は三月八日午前十時ラングリンを占領した。

第五十五師団は、六日ベグー附近において、戦車及び装甲車約一三〇輜を有する優勢なる敵と交戦し、七日これを撃破した。

軍司令官は、九日ラングリンに入城した。

かくて第十五軍は、ビルマの首都ラングリンを完全に占領し、南部ビルマの攻略を完了した。

〔戦略的意義〕 ラングリンの領有は、同港を基地として海路補給を可能にし、英支の合作に一大罅隙を与え、南部ビルマの航空基地は我が航空部隊の作戦に絶大なる寄与を齎すこととなり、爾後のビルマ方面の作戦遂行を著しく有利ならしめた。

英軍の撤退により、ビルマの要人は他に避難し、又は拉致されたが、軍政施行後においては、ビルマ人はよく協力し、治安は急速に改善せられた。

3 中、北部ビルマの攻略

〔南方軍の指導——全ビルマ作戦〕 南方軍総司令官は、ラングリン陥落の前日、三月七日第十五軍同司令官に対し、現任務を続行すると共に、左に準拠してマンダレー方面の敵を撃滅すべきを命じた。

一、進んで戦機を捕捉し且つ放胆果敢なる作戦を以てマンダレー方面の敵特に支那軍に決戦を強要し努めて短期間に之を撃滅す

本作戦は概ね五月末迄に之を完了するに努む

二、前項作戦の為ラングリン地方に於ける攻撃準備の進捗に伴ひ増加兵団の集結を待つことなく行動を發起しマンダレー方面の敵を同地附近又は其の以南地区に求めて撃滅す

三、追撃に方りては遠く之を緬支国境に向ひ敢行し且つビルマの敵を一掃す

四、右作戦間エナンジョン附近の油田地帯及びバセインを占領し状況之を許すに至れば一部を以て速かにアキャブ飛行場を占領

す

マレー方面作戦終了に伴い、右命令と略々時を同じくして、第十八師団及び第五十六師団等を新たに第十五軍に加えられた。

〔マン会戦準備〕第十五軍司令部においては、ラングラー攻陥後連日討議研究を重ねた結果、三月十五日中、北部ビルマの作戦においては、「英將連合軍主力を概ね五月末迄にマン附近（マンダレーを中心とする中部ビルマ地方を広く包括す）に捕捉殲滅し次いで残敵をビルマ領内より掃蕩す」る方針を確定し、これに伴う計画を策定した。

軍は、兵力の補充、装備の充実、交通兵站施設の推進及び航空基地の整備を図る等次期作戦準備に専念すると共に、戦略要地獲得のため第一線各兵団を推進した。即ち第五十五師団にはトングー飛行場の占領を、第三十三師団にはエナンジョン北側地区進出とバセイン飛行場の占領とを、又三月二十五日ラングラーに上陸した第五十六師団にはトングー附近への集結をそれぞれ命じた。

第五十五師団は、三月十日ベグーを出発し、激戦を交えつつ北進し、二十六日トングー附近に進出、同地附近において頑強に抵抗する敵に対し突撃作業を実施して、三十日朝これを攻略した。

第三十三師団は、二十五日レバタン、ヘンサダの線を出発し、往く往く敵を撃破して、その主力は、四月七日アランミヤウを、又その一部は、二十三日バセイン飛行場をそれぞれ占領した。

第五十六師団は、二十八日トングー附近に進出し、直ちに第五十五師団の戦闘に協力した。

〔マン会戦——要域わが有に帰す〕三月十五日の軍作戦計画策定当時においては、その発起線をタウンギー、メークテラ及びエナンジョン北方地区を連ぬる線と予定していたところトングー附近における戦闘の結果敵の抵抗が真面目であつたことと、鹵獲文書により知り得た情報とより判断して、敵軍主力は、マンダレー以南の地

区に進出していることが略々明瞭となつた。そこで、作戦発起線を一段下げて、ロイカウ、ヤメセン、エナンジョンの線に改め、四月一日同線に向う前進を命令した。

軍司令官は、四月三日、トングーにおいて、左の方針に基くマン会戦計画を策定した。

軍は、有力なる兵団を以てラシオ方面の敵の退路を遮断せしめ、主力を以て、トングー——マンダレー道及イラワジ河に沿ふ地区よりマンダレー方面に前進し、敵軍主力の両翼を包囲し、マンダレー以西のイラワジ河に圧倒撃滅す爾後、ラシオ、バーモ、カーサの線以西に於て残敵を捕捉撃滅すると共に、機を逸せず有力なる一部を以て怒江の線に追撃す

各兵団は、四月初頭北進行動を開始し、第五十六師団は、蜿蜒たる稜線を踏破し、慘憺たる困苦を嘗めつつ鋭意北進し、第五十五師団は、四月十五日タウチを占領した。又第十八師団は、四月八日ラングラーに上陸し、鉄道及び陸路トングーに集結中であつた。第三十三師団は四月九日アランミヤウを出発し、エナンジョンの攻略に向つた。同師団は、十日以降優勢なる敵と激戦を交え、歩兵第二百十四聯隊は、十七日午前七時三十分油田地帯の中心部に突入してこれを占領した。

軍司令官は全般情勢から、会戦の大勢はタウンギー、メークテラの線において決するものと判断し、第五十六師団を以て、ラシオ方面に進進して敵の退路を遮断させ、第十八師団及び第五十五師団を以て、それぞれヤメセン東西地区に進出したる後マンダレー方面に突進して敵軍主力をイラワジ河畔に圧倒撃滅する如く部署した。第五十六師団は、二十日ロイカウに、爾後よく自動車部隊の特性を発揮し一日百十余料の速度を以て突進し、二十九日ラシオを攻略した。

第十八師団は、三十日敵を撃破してミンゲ河南岸に進出し、五月

一日同河を渡河し同日午後六時二十分遂に中部ビルマの要衝マンダレーを占領した。

第五十五師団は、二十六日カンタンを占領し、五月四日マンガレー附近に集結した。

軍司令官は、五月一日マンガレーに進出して作戦を指導し、第五十六師団を以て、怒江及びミイトキーナに向い敵を急追した。

師団は、各一部を以て、三日バーモを、八日ミイトキーナをそれぞれ占領し、更に師団主力を以て臘町、芒市、竜陵を攻略し、五日怒江の線に進出して惠通橋を爆破した。又十日夕微弱なる敵を撃破して騰越を占領した。

ビルマ作戦開始以来ここに半歳、ビルマの要域は悉く我有に帰した。この間英、印、ビルマ軍に決定的打撃を与え、南方軍の防衛態勢の強化に絶大なる寄与をなした。

爾後第十五軍は残敵掃蕩を継続し、且つ軍政の滲透に努力しつつ、防衛作戦に移した。

〔アンダマン、ニコバル諸島の攻略〕 アンダマン、ニコバル諸島は、印度洋における戦略上の要地で、ビルマ及びマレー防衛のためのみでなく、又ビルマ方面に対する海路補給の側面を掩護するためにも絶対確保を必要とする。

右の見地において大本営は、二月七日これが攻略に関して南方軍総司令官、聯合艦隊司令長官相互協議決定する如く指示した。

かくて、陸海軍協議の結果、同島の攻略は陸海軍の協同作戦を以て実施することとなり、海軍は川崎晴美海軍大佐の指揮する第十二特別根拠地隊分遣隊及び第九特別根拠地隊の一部を、陸軍は第十八師団の歩兵一箇大隊を充当し、上陸作戦は海軍が陸軍部隊を併せ指揮することとなった。

三月二十日夕刻、海軍第一護衛隊掩護の下にベナン島を出航、途

ブレア沖予定泊地に進入した。

攻略部隊は、同日午前六時半ロスの奇襲上陸に成功し、敵の抵抗を受けずポートブレア港一帯及び同地飛行場を占領した。

爾後攻略部隊は、諸島内各要地を掃蕩し、二十六日概ね掃蕩を完了した。海軍護衛隊は逐次シンガポールに帰還し、攻略部隊は同島の防衛に任じた。

ビルマ攻略作戦経過は附図第三の如くである。

四 蘭印の攻略

1 作戦構想

蘭印作戦には大局上次のような条件があつた。その一は、敵に石油資源破壊の暇を与えないように各方面から急襲的に攻略しなければならぬこと。その二は、この作戦は開戦後どうしても二乃至三箇月後となるので、連合軍の増援兵力特に航空の増援があることを当然予期せねばならず、作戦時期が遅れるに従い、ジャワは堅固な要塞となり易い。そこでなるべく早期に結末をつけたいという時間的制限であつた。

〔大本営の作戦構想〕 而して元来南方攻略作戦の構想は、マレー、フィリッピン、の両翼方面から網を入れて、目的の資源地帯たる蘭印を網の底に拘うような形になつてゐる。大本営の作戦計画立案の際、マレー攻略作戦と共に最も苦心を払つたのは、この蘭印攻略作戦であつた。その困難な点の第一は、蘭印に兵を用いるまでにマレー、比島の両大作戦を経過しなければならぬ。従つて、蘭印作戦開始の際の因子に幾多不定のものがあつた。就中攻略作戦の進むとともに、その占領地域に逐次に、しかも急速に整備せられる航空基地を以て、果して十分なる航空威力を蘭印に對し發揮し得るやということであつた。第二は、重要油田地帯のバレンバンを敵の破壊に

先だち無疵のまま占領できるかどうかということであつた。

右の第一の問題は、結局ジャワ本土に十分威力を発揮し得る陸上航空基地をジャワの本攻撃に先だち獲得出来るかどうかという問題になつた。これに適する主要な基地は研究の結果、ボルネオ東南部のパンジェルマシン、セレベスのマカッサル、ケンダリ、スマトラのパレンバン、タンジ・シカランの飛行場で、これら要地の占領と、占領後における迅速な飛行場整備に少なからぬ難条件があつたが、周到な準備と巧妙な兵力の運用により辛うじて成算を持つことができた。第二の問題は日本軍最初の空挺作戦を断行することによつて、極力これが達成に努力することとなつたのであつた。

この攻略作戦に任じる兵力は、陸軍は第十六軍及びマレー作戦に任じた第三飛行集団を主とし、海軍は第三艦隊、第十一航空艦隊を基幹とする蘭印部隊が主で、南遣艦隊を基幹とするマレー部隊もこれに協力した。

〔南方軍の指導——ジャワ攻略命令〕 南方軍は、昭和十六年十一月、ジャワ攻略のための作戦要領を第十六軍に指示して、その作戦準備に準備を与えた。

十二月下旬南方軍総司令官は、第二艦隊司令長官と協定して、ジャワ作戦を予定計画より約一箇月繰上げるため、これに関連するスマトラ及びボルネオ等の作戦もまた若干日繰上げて実施する修正計画に関して大本営に意見を具申した。

大本営は、右南方軍の意見具申を直ちに容認して、これに應ずる処置をとつた。

作戦計画修正に伴い、第十六軍は、作戦計画特に船舶運用に関する計画に複雑な修正を加える必要が起り、これが準備に忙殺されていたが、南方軍は昭和十七年一月二十日、第十六軍に対し左の要旨のジャワ攻略に関する命令を下達した。

一、南方軍は海軍と協同し速かにジャワを攻略せんとす

二、第十六軍は左記に抛り速かにジャワを攻略すべし

1 ジャワに対する航空制圧の成果を利用し概ね同時に主力を以て西部ジャワの一部を以て東部ジャワに上陸す

上陸作戦は敵海空の妨害を予期す

2 上陸後は敵を撃破して迅速にバタビヤ、スラバヤ及びバンドンを占領す

3 速かにジャワに航空基地を整備す

三、第三飛行集団長及船舶輸送司令官は第十六軍の作戦に協力すべし

〔第十六軍の編組〕 蘭印攻略に任ずる第十六軍は、昭和十六年十一月六日その戦闘序列を令せられ、軍司令官に今村均中将、軍参謀長に岡崎清三郎少将が補せられた。当時第十六軍の編組は第二師団（師団長丸山政男中将）及び混成第五十六歩兵团（歩兵团長坂口静夫少将）を基幹とするものであつた。

軍司令官は、十二月下旬、軍主力を台湾に集中して爾後の作戦を準備するに決し、昭和十七年一月初旬頃より逐次台湾に集中した。

この間及び爾後、軍の編組は逐次増強された。その増加部隊の大部は、既に他の方面の作戦に任じたもので、その主要なものは次の如くであつた。

第三十八師団（師団長佐野忠義中将）は、開戦初頭香港の攻略に任じ、昭和十七年一月四日第十六軍の戦闘序列に入り、同月下旬カラン湾に集合。但しその一部、第三十八歩兵团長の指揮する歩兵第二百二十八聯隊山砲一箇大隊基幹は、アンボン島攻略の目的を以て一月十二日香港出港ダバオに待機。

第四十八師団（師団長土橋勇逸中将）は、マニラの攻略に任じ、昭和十七年一月十四日第十六軍の戦闘序列に入り、マニラに集結。

〔第十六軍の作戦計画〕 軍司令官は、一月初旬来、サイゴンに戦闘司令所を開設して作戦準備中であつたが、一月十六日高雄に帰還

した。

これより先、軍司令官は台湾待機中、南方軍より示された作戰要領に基いて、概ね次の事項を骨子とする作戰計画を策定した。

一、混成第五十六歩兵団を基幹とする坂口支隊は南部比島ダバオ及び東部ボルネオの要域に対し作戰し主として石油資源及び航空基地の獲得に任ず

二、第三十八歩兵団長伊藤武夫少將の指揮する歩兵第二百二十八聯隊、山砲一箇大隊を基幹とする東方支隊はアンボンを攻略す

三、第三十八師団主力は、南部スマトラ方面に作戰し、パレンバン其他の石油資源の所在地を占領すると共にジャワ本土攻略の爲の航空基地を占領す

四、軍主力たる第二師団、東海林支隊（第三十八師団の歩兵第二百三十聯隊長東海林大佐の指揮する歩兵二箇大隊、山砲一箇大隊基幹）及軍直轄部隊は先づ高雄次いでカムラン灣に、又第四十八師団はリンガエン次いでホロ島に集中す

五、ジャワ本土に対する作戰準備完整に伴つて軍主力、第四十八師団概ね同時東西相呼応して上陸し作戰目的を達成す

2 ジャワ攻略の前哨戦

〔前哨戦の構想——ボルネオ守備軍新設〕 ジャワ攻略作戰に確算を与えるためには、既述の如く我が航空威力圏を推進するため、スマトラ南部、マレー、南部ボルネオ、南部セレス、チモール島及びバリ島の線に我が航空基地を獲得することが先決であつた。

マレー及びフィリッピンの攻略は、自らその第一歩を踏み出したものであつた。別に南方軍直轄の川口支隊（第十八師団歩兵第三十五旅団長川口清健少將の指揮する歩兵第二百二十四聯隊基幹）は昭和

十六年十二月十六日北部ボルネオのミリ及びセリアを、同二十五日クチンを占領した。この北部ボルネオ要地の攻略は基地獲得のほかに同地の資源を確保する目的を有するものであつた。次いで川口支隊は三月比島に転用せられた。

大本営はボルネオにおける軍政の急速なる滲透を図るため四月ボルネオ守備軍司令部を編成してこれを南方軍戦闘序列に編入した。軍司令官には前田利為中将が親補せられ、独立混成第四聯隊を基幹とする部隊が、その隷下に入らしめられた。又第十六軍の坂口支隊は十二月二十日第十四軍の三浦支隊と共にミンダナオ島ダバオを、又二十五日ホロ島を占領した。

かくしてマレー、英領ボルネオ、ホロ島、ミンダナオ島、パラオ諸島の線に、第一段の態勢を整えることが出来た。

〔作戰開始——前方基地攻略〕 かかる態勢において、第十六軍のジャワ本土攻略のための前哨戦は開始せられるに至つた。

当時ジャワの攻略に任ずべき第十六軍主力は、逐次カムラン灣及びマニラ附近、次いでホロ島附近に集中されつつあつたが、その先遣隊とも称すべき前方基地攻略部隊は、一月初頭より逐次作戰を開始した。その概要を述べれば次の如くである。

坂口支隊 一月十一日 〓 タラカン

同 〓 一月二十四日 〓 バリックババン

東方支隊 〓 一月三十一日 〓 アンボン島

坂口支隊 〓 二月十日 〓 パンジェルマシ

第三十八師団主力 〓 二月十五日 〓 パレンバン

金村支隊（第四十八師団の歩兵一箇大隊基幹） 〓 二月十九日 〓 バリ島

東方支隊 〓 二月二十日 〓 チモール島

右の諸作戰は、その大部分が陸海軍部隊の緊密なる協同によつて行われたが、パンジェルマシは陸軍のみでこれを攻略した。

このほか海軍は、一月十一日メナドを、又二十二日ケンダリーを占領した。

〔海軍及び航空部隊の活動〕 この頃マレー方面の戦況は著しく進展し、この方面に作戦中の第三飛行集団は、十二月二十八日以降二月十三日までスマトラ地区飛行場を五回に亘り攻撃して撃破一〇五機の戦果を挙げた。この間一月三十一日、第一挺進団（团长久米精一大佐）をスンゲイバナニーにおいて集団の指揮下に入れられ、バレンバン奇襲攻撃のための部隊の訓練、情報収集等に鋭意努力を続けた。

海軍は、この広大な地域に亘る作戦のため凡そ可動艦艇の全部を挙げて攻略部隊の船団護衛に当らねばならない状況であつた。当時ジャワ方面にはフリッピン及びマレー方面から逃避した連合国海軍艦艇が集結しており、その兵力も相当有力なものと推定されたが、日本海軍はこの敵に対して積極的作戦を考える余裕は殆どなかつた。

又海軍航空部隊はバリックパバン及びケンダリーを基地として、二月三日及び五日ジャワ地区の敵航空勢力を攻撃し、三日八四機、五日一六機を屠り、四日にはスラバヤ東方海面において巡洋艦七隻、駆逐艦五隻よりなる敵連合海軍を攻撃した。

かくして、ジャワ本土を圍繞する要地は悉く我有に帰し、ジャワ本土攻略の態勢は完了することとなつた。

3 ジャワ攻略作戦

〔兵要地理の概要〕 ジャワ島は、稍々南岸に近く中央山脈東西に走り、南北に数条の支脈を分岐している。平地は水田、湿地が多く、殊にスラバヤ南方及び東南方地区は水濛錯綜し、路外の行動は著しく制限を受ける。

軍の上陸予定地点は、舟艇の達着概ね容易である。しかし軍主力

の向つたバンタム湾は、上陸正面稍々狭く、又進出路不便且つ遠浅で、重材料の揚陸に棧橋を必要とする。主要道路は、殆ど自動車を通ずる良道であるが、これら道路の両側には並木が多く、倒木して障礙物に利用せられる。

〔敵前上陸敢行——東西呼応〕 軍主力及び東海林支隊は、海軍護衛の下に、二月十八日カムラン湾を出航して南下中、二十二日ジャワ海に敵艦隊を発見した。海軍はこれが攻撃を企図したため、二十六日の上陸予定日を二十八日に延期した。輸送船団はその間北上逃避した後二十三日再び南下を開始した。二十六日以降第三飛行集団の掩護下に航行中、二十七日、バンタム湾附近に敵艦隊を発見し、海軍の要求により、更に一日上陸を延期することとなつた。かくて軍主力は、二十八日午後十時半バンタム湾泊地に進入した。

第四十八師団は海軍部隊護衛の下に、二月十九日ホロ島を出航して東部ジャワに向つた。二十二日、突然上陸を二日延期する旨の軍命令を受領し、バリックパバン南方に待機し、この間坂口支隊と合一し、これを区処した。二十五日再び南下し、二十七日敵艦隊の攻撃があり、護衛部隊これを攻撃したため、上陸を更に一日延期するの已むなきに至つた。かくて、三月一日午前〇時十五分クラガン泊地に進入した。

軍主力は、三月一日未明猛烈なる敵海空軍の抵抗を排除し、ジャワ西端のバンタム湾、アラウン岬附近及びメラク附近に、東海林支隊はバタビヤ東方エレタン附近に上陸した。第四十八師団及び坂口支隊はスラバヤ西方クラガン附近に、それぞれ敵前上陸を敢行した。同日中早くも軍主力方面は、概ねチデユン川の線に、東海林支隊はカリヂャティ飛行場一帯の地区に、坂口支隊は、プロラ附近にそれぞれ進出し、第四十八師団また上陸点を距る概ね五十軒以遠の地区に敵を撃攘して地歩を獲得した。

上陸間軍司令官の乗船が敵の攻撃を受けて擱坐沈沈したが人員に

は大なる損害はなかつた。

敵は、組織的且つ徹底的に道路を破壊、阻絶していたが、軍の各兵団はよくこれを克服し、随所に敵の抵抗を撃破して、各方面とも猛進撃を強行した。

〔第二師団西部ジャワ攻略戦〕 西部ジャワの攻略を企図する第二師団方面においては、那須支隊は、三日夕刻ラワイアン附近に達し、四日夜同地附近の濠州兵守備隊を夜襲により撃退し、五日ポイトンゾルグの前方に到達した。福島、佐藤の両支隊は、三日マヂヤ、バラヂヤ附近に達したが、橋梁破壊のため爾後の前進困難となつた。師団長は、三日午後師団主力を戦況の進展順調なるポイトンゾルグ方面に転用し、福島支隊と佐藤支隊の一部を那須支隊長に配属した。那須支隊は、五日夜ポイトンゾルグに夜襲を決行し、二千乃至三千の濠洲兵を南方に潰走せしめ、六日午前六時同地を占領した。又佐藤支隊は、五日午後九時三十分バタビヤを占領した。師団は続いてバンドンに向い、前進中八日早朝同地の敵降伏を申出た旨の軍の通報を受け、又九日午後バンドン占領に関する軍命令を受領し、約二箇大隊を以て同地を占領した。

〔東海林、坂口両支隊の戦闘〕 カリヂヤティ飛行場に突進すべき任務を有する東海林支隊の挺進隊は、敵の反撃を撃退して一日正午カリヂヤティ飛行場に突入これを占領した。飛行場は直ちに使用可能であつたが、通信不通のため航空部隊に通報することが出来なかつた。支隊主力は二日未明、スパンに到着するや有力なる機甲部隊を伴う敵の攻撃を受けたが、第三飛行団の有効な協力によつてこれを撃破した。同日午後第三飛行団は勇敢にもカリヂヤティ飛行場に強行推進して協力を強化した。三日数回に亘り来攻した極めて有力なる装甲部隊に対し飛行団は適切な攻撃を行い、何れも敵の企図を挫折せしめた。支隊はバンドン敵要害の態勢整わざるに乘じ、これを急襲する目的を以て五日以後相次いでスパン、レンバンを占領

した。七日午後十時三十分敵の軍使支隊本部に到着し、バンドン防衛司令官ベスマン少将から停戦を申込んで来た。翌八日午前十時支隊長はレンバンにおいてベスマン少将と会見した。

ジャワ中部南岸チラチャップを占領して敵の退路を遮断すべき任務を有する坂口支隊は、相次いでスカルタ、ジョクジャカルタ、マゲラン、スマラン、ブルオゲルト等の要衝を抜き、八日遂にチラチャップを占領した。九日午後一時コックス少将の軍使来り降伏を申し出た。支隊長は、十日午前十一時十分ブルオゲルトにおいてコックス少将と会見し、降伏を容認した。

〔第四十八師団東部ジャワ攻略戦〕 第四十八師団は、東部ジャワ攻略の任務を以て、スラバヤの攻略を企図し、チエプー附近ソロ河橋梁の完成を待ち四日行動を發起した。師団主力は、チエプー——ケルトソノ——ジョンバン——モジヨケルト道を、敵の逐次の抵抗を撃破しつつ昼夜連続の突進を続け、六日モジヨケルトに達した。ボヂヨネゴロ挺進隊は、三日朝ボヂヨネゴロを占領し、続いて東進を継続し、七日ラモンガン、八日タリツセーを占領した。

これより先、モジヨケルトの戦闘において、スラバヤ陣地設備の詳細図を入手し、又第一線の報告により、敵はスラバヤ南側地区に氾濫地帯を構成し漸次増水しつつあるを知る。ここにおいて、直ちにこれを除去し、七日夜半以降逐次減水した。

師団は九日夕からスラバヤを攻略するに決し準備中、八日午前十一時、敵はスラバヤ南側橋梁附近に白旗を掲げ軍使第一線に到着したが、八日午後三時師団長はジャワ州知事と戦闘司令所において会見したが、統帥上の責任明確ならざるため会見を中止し、諸隊にスラバヤ進入を命じ、同日午後六時同市を占領した。

九日夕東部軍管区司令官イルヘン少将を招致し、降伏に関する我が要求を承認せしめ、且つ降伏軍の武装解除を行い、十二日夕これを終了した。

〔ジャワ全土攻略成る〕 かくて、蘭軍主力の降伏により、バンドン東南方にあつた米英軍約一万一千を始め、各方面の敵部隊相次いで降伏し、ジャワ全土の攻略を終つた。

4 パレンバンの攻略

マレー方面の戦況は、二月十五日の午後には敵軍の降伏によつて終末を告げたが、前日の十四日にはなおシンガポール島南部において激戦中であつた。この十四日にわが空挺部隊がパレンバン製油所附近に第一回の降下を行つた。

十四日が選定されたのはシンガポール陥落後においては、パレンバン方面の敵は警戒を至敵にし、場合によつては油田及び製油所を破壊する恐れがあるので、その陥落以前にこの日を選定するのが有利である。そして現にマレーの戦闘続行中なので、その大勢の定まらるべき十四日頃が適當であるという理由に基いたものであつた。

〔攻略計画と空挺奇襲準備〕 パレンバンの攻略は、先ず第一挺進団主力の空挺奇襲により、油田地帯を占領確保する。然し敵はこの驚愕の瞬間が過ぎると強力なる回復攻撃を実施する算が大である。その場合機を失せず地上部隊を以てこれを増強し、その戦果を更に拡張する必要がある。そこで十四日夜第三十八師団の田中先遣隊（歩兵第二百二十九聯隊長の指揮する歩兵一箇大隊半基幹）がパレンカ島のムントク泊地に進出し、一部（大隊長の指揮する歩兵二箇中隊基幹）を以てムントク飛行場を占領すると共に、主力は上陸用舟艇により海上機動を以てムシ河、セラ河、テラ河を遡航して既に降下している挺進団と協力してパレンバンを確保することになつてゐた。又更に十五日には挺進団の残部をして第二次挺進を決定せしめ、第三十八師団主力は、二十八隻の船団を以て十七日夕刻ムシ河口に到着し、満潮時を利用し船団のままムシ河を遡航して、パレンバンに上陸する計画であつた。

パレンバン挺進攻撃のため使用された航空兵力は陸軍偵察九機、戦闘約七〇機、襲撃九機、軽爆約二〇機、重爆約三〇機、計約一四〇機でマレー地区に展開し、海軍は陸攻約一〇〇機、戦闘約三〇機、陸偵六機、水偵約四〇機、計約一八〇機で主力はボルネオ西部、一部はマレー基地に展開した。

二月十四日、大陸高気圧は華北方面にあつて、マレーは依然風弱く晴れ又は薄曇りの天候であつたが、スマトラ方面は、天候悪化の直前にあるものの如く、層雲又は積雲多く、雲高は二百米余であつた。この日進攻の挺進団主力は二梯団となり、第一梯団は挺進第二聯隊の一部、輸送飛行二箇中隊、飛行第九十八戦隊（二箇中隊欠）、飛行第六十四戦隊及び飛行第八十一戦隊の一部からなつており、カハン飛行場を基地とした。第二梯団は挺進第二聯隊の一部、輸送飛行約二箇中隊、飛行第九十八戦隊の一箇中隊、飛行機五十九戦隊及び飛行第八十一戦隊の一部からなつており、クルアン飛行場を基地とした。第一梯団はパレンバン飛行場を確保すべく、第二梯団はパレンバン精油所を確保すべき任務を受けていた。

〔挺進降下決定〕 両梯団は、この朝薄明を衝いて離陸し、集合を終ると一路南へ南へと進んだ。陥落直前の断末魔に喘ぐシンガポールの天に沖する黒煙が遠くムシ河の河口にまで棚引いて、油煙のため視程は極めて不良であつた。

午前十一時二十六分主力は飛行場南方地区に、一部は十一時三十分飛行場西側地区に降下を完了した。同時に挺進団長久米大佐を載せた部隊長機は、飛行場西南約十杆の湿地帯に強行着陸した。飛行場方面では、十数門の敵高射砲及び高射機関銃が一斉に火を吐いたが、我が協同軽爆部隊は、直ちにこれが制圧に努め、又他の協同飛行部隊は、降下開始と共に物料投下を始め兵器、弾薬、糧食等を投下した。この時敵のスピットファイヤー五機の攻撃を受けたが、我が戦闘機の応戦により三機を撃墜した。我が方の損害は物料機一機

撃墜せられ、人員機一機不時着しただけであつた。

降下部隊のうち飛行場攻撃部隊は、随所に敵と遭遇戦を惹起しつつ逐次飛行場周辺に殺到し、漸次その兵力を集結した。この間パレンバン市街の兵営方面から敵増援部隊が乗車疾走して来たが、敢然これを攻撃して潰走せしめた。次いで敵の飛行場警備部隊、兵営等に対し到るところ挺進斬込み戦法を活用して戦果を拡張し、飛行場の東西両側に降下した部隊は午後九時連絡を確保し、飛行場を完全に占領した。

製油所攻撃部隊の主力たる中隊長以下約九十名は、工場南側の湿地に降下したが、投下の弾薬、銃器を逐次手に入れて奮戦、ムシ河支流西側工場に突入、頑強なる敵の抵抗を排し、翌十五日未明工場を占領した。又製油所の攻撃部隊の一部約三十名は、ムシ河支流東側の工場を攻撃した。この部隊は苦戦を続け且つ敵の砲撃及び放火により工場に大火災を起した。占領後の調査によれば、火災による価値の低下は比較的軽微であつた。

飛行場占領部隊の主力は、翌十五日午後降下の第二梯団の部隊を併せてパレンバン市に向い攻撃を行い、敵に大打撃を与えて薄暮同市を占領した。

〔地上部隊の策応と海軍部隊〕 パレンバンの地上攻略部隊たる第三十八師団の先遣隊は、海軍護衛の下に二月九日、師団主力は二月十一日、カムラン湾を出港し一路南下した。

第一南遣艦隊司令長官小沢海軍中將の指揮する艦隊及び第四航空戦隊は、船団掩護のため十日カムラン湾を出撃し、バンカ島北方海面に向つた。十三日母艦機偵察の結果、シンガポールにはなお商船十数隻在泊し、約四十隻の輸送船がバンカ海峡方面に南下中なるを認め、航空部隊及び水上部隊を以てこれを攻撃して、十八日までの間その大部を撃沈又は撃破した。

二月十四日正午頃、先遣隊の船団はムントク泊地に進入し、敵の

抵抗を受けることなく上陸して、飛行場を占領した。又ムシ河、セラ河、テラ河遡江の陸軍舟艇部隊は、午後三時遡江を開始した。翌十五日午前十時鳥海機から「敵巡洋艦三隻、駆逐艦五隻ガスパル海峡を通過北上中〇九三八」との報告があつた。これは和蘭海軍の反撃企図と判断し、小沢司令長官は直ちに攻撃するに決し、ムントクの輸送船団をムシ河口に、リンガ島東方を南下中の主力船団を一時北方に避退せしめた。同日午後航空部隊を以て攻撃の結果、エクスエータイプ巡洋艦一隻に火災を生ぜしめ、敵艦隊は南方に退避を始めた。主力船団は再び南下して、十七日夕刻ムシ河口に到着した。

先遣部隊の遡江行動は、途中三回敵機の攻撃を受けたが損害なく前進を続け、セラ河部隊と協同して十五日午前十一時頃先ず製油会社確保の挺進部隊と、次いでパレンバン市附近の挺進部隊と連絡を確保し同地の占領を確実にした。爾後テラ河部隊は、マルタブラに躍進し、敵の退路を遮断した。

〔南部スマトラ確保〕 師団主力は、十八日午前五時船団のままムシ河を遡航し、午後三時パレンバンに上陸した。爾後師団長は、計画の如く攻略作戦を進めジャンビー攻略の際敵の抵抗を受けたのみで南部スマトラを確保した。これにより、ジャワ攻略作戦に愈々確算の根拠を与えたのである。即ちこの作戦は、パレンバンの製油所を無疵のままに手に入れるという特別な作戦目的のみならず、ジャワ攻略前哨戦の一環として実行されたものであつたことは、既に述べた通りである。

5 ジャワ沖海戦

日本海軍は、ジャワ攻略部隊の上陸作戦開始に当り、これを妨害せんとした米、英、蘭海軍との間に壮烈なる海戦を惹起し、敵に決定的打撃を与えた。その主要なものはスラバヤ沖海戦、バタビア沖海戦及びジャワ南方の退路遮断戦であつた。

昭和十七年二月下旬スラバヤ方面には、巡洋艦五隻を基幹とする敵連合海軍が蟄居していたので、ジャワ攻略作戦には本格的な海戦の惹起が予想せられた。日本海軍は、これを予期しつつも、全艦艇を船団護衛に充当する必要があるから、上陸作戦前に敵艦隊を求めて攻撃する方策を執らなかつたことは、既に述べた通りである。ジャワに対する航空作戦は、ボルネオ以東に展開する第十一航空艦隊を以て東部ジャワ、南部スマトラに展開する第三飛行集団及び第二十二航空艦隊を以て、中、西部ジャワの攻撃を担当することとなつており、二月下旬著しく航空攻撃を強化して二十七日にはチラチャップ沖において米小型空母ラングレーを撃沈し、三月三日以後対濠洲攻撃をも開始した。

〔スラバヤ沖海戦〕 東部ジャワ攻略部隊たる第四十八師団の船団は、四十一隻よりなり、第四水雷戦隊、第二、第九駆逐艦隊護衛の下に二月二十三日寄港地バリックパンを出発し、二十六日朝ボルネオ東南端ラウト島南方において第五戦隊及び第二水雷戦隊と合し、同日午後五時三十分スラバヤ北西約六十哩に達した。ここでスラバヤから出撃した連合海軍と遭遇し、開戦以來始めての艦隊戦闘が惹起し、戦闘は夕刻から夜半に及んだ。

日没前二時間に亘る戦闘は、その大部が遠距離の砲戦に終始したが、後半日本艦隊の試みた突撃効を奏し、敵駆逐艦二隻を撃沈した。午後七時三十分頃、第五戦隊司令官は、突撃を中止して北方に避退し、敵もまた南方に避退したが、敵は日没頃北上し来り、夜半までの間彼此二回接触した。正午過、第二回目の接触において日本艦隊の放つた酸素魚雷による遠距離攻撃が効を奏し、一挙に巡洋艦二隻を撃沈した。重大な損害を蒙つた敵は、スラバヤ及びバタビヤ方面に避退した。この海戦を「スラバヤ沖海戦」という。

右海戦の結果上陸日は一日延期せられた。

二月二十八日夜、第四十八師団の船団はクラガンに入泊し、上陸

を開始した。我が艦隊は、ジャワ沖を遊弋しつつこれを掩護し、三月一日朝バウエアン島北西約百哩の地点に到達した。午前十一時頃、第五戦隊は駆逐艦二隻を伴つた巡洋艦一隻を発見し、適々附近海域にあつた第三艦隊司令長官直率の足柄、妙高と共にこれを包囲し、三隻とも撃沈した。この三艦はエクゼター、ホープ、エンカウンダーであつた。

〔バタビヤ沖海戦と退路遮断作戦〕 他の戦場においては、第七戦隊、第五水雷戦隊を基幹とする部隊が、西部ジャワ攻略部隊たる第十六軍主力の船団五十六隻を護衛して、二十八日夜バンタム湾の泊地に到達し、軍主力は上陸を開始した。同夜正子稍々過、二隻の敵艦が泊地に進入し来り、我が護衛艦艇との間に熾烈な夜戦が交えられた。我方はこれを邀撃し、掃海艇一隻、輸送船一隻沈没、輸送船数隻大破の損傷を受けたが、敵の両艦はこれを撃沈した。米巡洋艦ヒューストン及び濠洲巡洋艦バースであつた。右両艦と共に出撃した和蘭のエバステンも、同日スポーコー島の西方においてこれを屠つた。この海戦を「バタビヤ沖海戦」という。

スラバヤ及びバタビヤ方面にあつた敵連合海軍の中、バリ海峡を突破して脱出したのは米駆逐艦四隻のみで他は悉く撃沈又は破壊した。

これより先二月十九日ポートダーウィンを空襲した第一航空艦隊は、ケンダリーの外湾スターリング湾に帰着し、同月二十五日ジャワ南方海面作戦のため出撃した。その兵力は、赤城、加賀、蒼竜、飛竜を中核とするものであつた。又近藤第二艦隊司令長官の直率する南方部隊本隊は、同じくスターリング湾を出撃して機動部隊の東側を行動した。これらの部隊は、チラチャップから脱出して来た敵艦船を、三月一日乃至四日に亘つてジャワ南方海域において捕捉し、駆逐艦三隻ほか船舶一三隻撃沈の戦果をあげた。

蘭印攻略作戦経過は附図第四の如くである

五 バターン半島攻略戦

1 第一次攻撃

〔進撃準備——主戦力抽出せらる〕第十四軍は、昭和十七年一月二日マニラの攻略を終るや敵主力のバターン半島方面退却に乗じてこれを撃滅する企図を以て、同日新たに高橋支隊（野戦重砲兵第八聯隊長高橋大佐の指揮する歩兵第九聯隊、野戦重砲兵第八聯隊基幹）を編成して速かにデナルビアン附近に、又第四十八師団（歩兵三箇大隊を基幹とするマニラ残置部隊欠、戦車二箇聯隊、十五榴二箇大隊、十加一箇大隊属）を以て速かにパンパンガ河右岸に転進して、バターン半島に対する進撃を準備した。又第六十五旅団（旅团长奈良晃中将）は、五日以降エンゼルスに前進した。

偶々バターン攻略漸くその緒に就かんとする二日夜、南方軍命令が下つた。それは、マニラ攻略に伴い、第五飛行集団を泰国方面に、又第四十八師団を蘭印作戰のためそれぞれ転用せんとするものであつた。これは勿論、当初の作戰計画において予め明かにせられていたのであるが、今や開始せられんとするバターン作戰の主戦力たるべき部隊を抽出されることは、軍にとつては痛手であつた。然し当時軍においてはその他の現有兵力を以てする攻略も必ずしも至難とは考えていなかった。かくの如くバターン攻略作戰の推移は大本営にも南方軍にも未だ強く反映していなかった。

軍は、第六十五旅団を以て第四十八師団と戦線を交代させる如く部署した。

第四十八師団は、十二日マニラに集結して次期作戰を準備し、第五飛行集団は、七日戦闘行動を中止し、十日ルソン基地を進発新任務に就いた。

飛行集団転進後の軍飛行隊は、第十独立飛行隊長の指揮する第十

独立飛行隊（軍偵、直協各一箇中隊）、独立飛行第七十六中隊（司偵）、飛行第五十戦隊の一箇中隊（戦闘）及び飛行第十六戦隊（輕爆三箇中隊）を基幹とするものとなつた。

当時軍は、バターン半島の敵陣地の強度に関する判断を誤り、地形に関する認識全くなく、敗退する敵に尾して突破し得るものと考えていた。ただコレギドール要塞は、攻略困難な場合或は封鎖を要することもあり得ると判断していた。当時バターンの敵兵力は、要塞部隊のほか六、七箇師団を基幹とする約四万乃至五万程度と思われた。

〔追撃〕第六十五旅団は、八日ヘルモサ附近に進出して第四十八師団と戦線を交代し、戦車一箇聯隊、山砲二箇大隊、野戦重砲兵一箇聯隊と一箇大隊の転属を受け、十日ピアワン河の線に進出して当面の敵陣地を攻撃した。旅団は密林内に位置する見えざる敵砲兵の猛射を受け、混戦して指揮連絡困難に陥つた。旅団は更に準備を整え、十三日薄暮攻撃を再興し、陣地の所々を奪取したが、敵の集中火と猛烈なる逆襲のため、死傷続出して戦況の進展を見なかつた。

軍は、十二日戦闘司令所をサンフェルナンドに推進し、十三日この戦況を打開するため、在マニラ第十六師団より歩兵团長の指揮する歩兵第二十聯隊（第三大隊欠）基幹の部隊をサンフェルナンドに招致し、これを木村支隊とした。

木村支隊は、十五日夜サンフェルナンドに到着し、十六日以後モロン及びモウバン附近の敵を撃破して、二十五日バガックに進出した。

これより先、支隊は、支隊主力の戦闘を容易ならしめるため、二十二日夜恒広大隊をマヤカオ岬において乗艇海路カイボ岬に派遣した。同大隊は上陸点を誤認して二十三日未明キナウアン岬に上陸し、優勢なる敵の攻撃を受け、その重囲に陥つた。

第六十五旅団は、二十二日更に攻撃を再興したが、敵の抵抗頑強

で戦局を開し得なかつた。然るに十五日以来嶮難なる山地を突破して敵の左側背に迂回した歩兵第九聯隊の一箇大隊が空中補給を受けてつて敵の側背を脅威するに及び、敵は二十四日夕より全面的に退却を開始し、俄然戦況の好転を見た。旅団は直ちに全線追撃に移り、二十五日バランガ西方地区に進出して、二十七日以後サマツト山陣地に対し再三攻撃を反復したが、敵陣地堅固にして奏効しなかつた。

これより先、軍は更にバターン方面の戦力増強を企図し、二十五日マニラより第十六師団長の指揮する歩兵二大隊を招致する如く処置した。

軍は、サマツト山、オリオンの線は敵の前衛陣地で、その主陣地をリマイ、マリベレスの線と判断したので、一步といえどもマリベレスに近く地歩を獲得せんとして、二十六日日本村支隊に対し主力を以て西海岸地区をバガック南方九料附近に進出すべきを、又第六十五旅団に対し砲兵の追及を待つことなく主力を以てサマツト山方面よりオリオン西南方に向ひ当面の敵を急追すべきを命じた。

〔戦闘交戦——恒広大隊潰滅〕 木村支隊はバガック附近の敵陣地を攻撃してこれを突破したが、戦果拡張中敵の反撃を受け、その突進部隊（支隊左翼隊、歩兵第二十聯隊（二箇大隊欠））は三十日遂に突破口を閉塞せられ、敵の重囲に陥つたまま二月八日に至つた。第十六師団長は二十八日オリオンガバに到着し、木村支隊正面に兵力を増加して戦局の打開を図つたが、成功するに至らなかつた。

第六十五旅団は、二月一日十分なる準備を整えて更にサマツト山陣地を攻撃するに決し、戦力の恢復、攻撃資材の整備に努め、九日早朝より主力を以てサマツト山西北地区に進進して攻撃を準備せんと企図したが、八日軍命令によりこれを中止した。

先にキナウアン岬に誤認上陸した木村支隊の恒広大隊は、逐次苦境に陥り、第十六師団長は、更に一箇大隊をカナス岬に派遣してこ

れが救援を企図したが、優勢なる敵の反撃を受けて七日夜までにその戦力の大部を喪失した。師団は、これを救出するため、七日、八日の両夜に亘り有力なる舟艇群を派遣したが、友軍を発見し得ず、熾烈なる敵火並びに水雷艇の来襲を受け、僅かに八日夜傷者三十四名を救出し得たに止まつた。

〔攻撃中止——大本營に報告〕 二月八日軍司令部において軍爾後の戦闘指導に関する幕僚会議が開かれた。席上依然現兵力を以て攻撃を続行せんとするもの、力攻を中止して封鎖に止めるを可とするもの、一時態勢を整え増援兵力の到着を待つて攻撃を再興せんとするもの等議論紛糾したが、本間軍司令官は熟考の上、一旦攻撃を中止し現態勢を整理して後図を策するに決し、二月十日参謀長より大本營に対し次の如くその実情を報告した。

マリベレス陣地の攻略に就きては既に報せる所なるが、敵はオリオン附近よりサマツト山北麓を経てバカック附近に亘る線を第一線とし、大密林地帯に於て多大の日数と労力とを費し縦深ある築城地帯を構成し、各般の施設を完備しあり、而して前線に比島国防軍六、七箇師を、其後方に米人部隊を配置し、（推定兵力総計四乃至五万）其砲兵は約百門を算し、（相当数の十五種級加農を含むあり）其豊富なる集積弾薬と観測設備とを利用し、要所に対する的確なる標定の下に昼夜を分たぬ砲撃を実施し、我第一線及後方共部隊の行動を著しく妨害しつつあり。又マリベレス山頂を中心とし環状並放射状に自動車道を整備しありて、軽砲戦車及自動車等を自由に移動せしめ、且地形の慣熟を利用し我方兵力の不足及後方連絡の困難なるに乗じて、元来兵力に於て多数を占むる上戦力の集散離合に於て著しく其優勢を発揮しあり

又マニラ湾口よりバターン半島西海岸に亘る制海権は寧ろ敵側之を握りある状況にして、之が主因となり、我西海岸海上機動部隊は甚だしき苦境に陥り、遂に之を引上ぐるの止むなきに至れり

軍は、ナチブ山攻略の余勢に乘じ、二、三週間にて成功すべき見込を以てマリベレス山敵第一線陣地の攻略を開始せるも、局部に於て若干の成功を取めたる外、上述の理由特に補給の困難戦力の低下等に依り、意外の損害を蒙り全般的の成功を収むるに至らず現下の情況に於ては、此儘攻撃を続行するも成功の見込少く、且更に重大なる犠牲を覚悟せざるべからず最悪の事態に於ては比島作戦全般に重大なる影響を齎す惧なしとせず

而して全島の裁定国防資源の取得等に関する軍の任務に鑑み、之以上の犠牲を払ひて迄マリベレス攻略を続行するの適否に就ては更に検討を要するものあり。他方敵の持久力に就きても目下已に相当の食糧難に陥りあるものの如く、更に海上封鎖を強行すること等により、相当の効果を期待し得る状況に鑑み、軍に於ては茲に血涙を吞みて現在の態勢を整理し、暫く戦力増強を図り、爾後の攻撃再興の場合に備うると共に、併せて情勢の推移に應ずる適當なる施策を講ずる様決せらるるに至りし次第なり

ここにおいて軍は、十三日コレギドール要塞及びサマット山に対する砲撃を強化し、且つ第一線の陽攻を行い、以て先ず第十六師団の態勢整理を容易にし、次いで、ナチブ山南麓及びバランガ西方地区を堅固に占領して、バターン半島南部の敵を封鎖する如く部署した。

〔木村支隊左翼隊の奮戦〕 第十六師団は、軍命令に基く行動開始に先だち、極力木村支隊左翼隊救出のための攻撃を続行した。かくて突入部隊は敵の重囲を脱し、十五日十二時師団主力に合した。

木村支隊左翼隊はまことに善戦敢闘した。即ちこの突入部隊（歩兵第二十聯隊長吉岡頼勝大佐の指揮する第三大隊を基幹とする部隊）は、一月二十九日敵陣地に突入し、三十一日以来糧食彈藥欠乏し、空中よりする補給も密林に妨げられて果さず、或いは馬肉を喰い或いは樹脂を啜つて敢闘した。二月九日概ね敵陣地後端に進出せ

る時反転の命令を受けた。当時部隊は敵と剣々相摩す紛戦の状態であり、突入以来の重傷者百名を擁し、敵と離脱反転することは正に難事中の難事であつた。聯隊長以下悲壯な決意を以て、十日夕よりこれを決行したが、敵の抵抗頑強で死傷続出した。この間將校殆ど殲れ、相互の連絡も時に失つたが、軍旗を中心とする鉄石の團結を以て敵中突破に成功し、十五日午前十二時軍旗を奉じて帰還した。當時生存者は三百七十八名であつた。

かくてバターン半島第一次攻略は悉く不首尾に終り、各部隊の損耗甚だしく、急速なる進展も期待し得ない状況となつた。

2 第二次攻撃

バターン半島の戦闘膠着は、大本營及び南方軍を憂慮させた。攻撃遲滞して損害の続出することは忍び得ないことであるが、これによつて起り得る敵側の宣伝謀略と、これが与える精神的影響はこれを重視せざるを得なかつた。ただ他方面の攻略作戦は順調に進捗中なるを以て、バターン半島のみが未攻略のまま残つても全般戦略上よりすれば敢えて危険とはしなかつた。

〔陣地戦準備——兵力増強〕 バターン半島の敵陣地は予想以上に堅固に構築されているものの如く、大本營はこれを攻略するために、一時攻撃を中止し、十分なる準備を整えた後、陣地戦における攻撃の要請によりこれを突破することを目標として兵力を増強することとし、一月末から二月上旬に亘つて逐次発令された。増加部隊の主要なるものは次の如くであつた。（月日は到着日を示す）

第四師団（師団長北野憲造中将）（二月二十七日—四月三日）
第五師団 歩兵第九旅団長の指揮する歩兵一箇聯隊（四月五日）

日）

第十八師団 歩兵第三十五旅団長の指揮する歩兵一箇聯隊（四月一日）

第二十一師団 歩兵団長の指揮する歩兵一箇聯隊基幹（二月二十六日）

独立山砲一箇聯隊（二月二十七日—三月五日）

独立重砲兵一箇中隊（機械化二十四榴）（二月十四日）

重砲兵一箇聯隊（二十四榴）（二月十四日）

飛行第六十戰隊（重爆）（三月十六日）

飛行第六十二戰隊（重爆）（三月十六日）

〔攻撃準備部署と訓練〕 軍は以上諸隊の到着に伴い、三月四日攻撃準備に關し左の如く部署すると共に、第一次攻略不成功の有力なる原因が特殊地形における訓練の不備にあるを痛感し、各部隊及び到着する部隊に対し、堅固なる野戰陣地に対する攻撃戰闘就中砲兵火力に膺接する突撃戰闘、密林地帯内の近接戰闘等を演練項目として訓練を実施した。

一、第十六師団は十日より行動を開始し遅くも十五日迄に其の第一線を以てバガック河北側よりバガック、バランガ間分水嶺附近に亘る線に進出し攻撃の目的を以て敵情地形を搜索す

右に伴ひバタイン半島東海岸方面より師団進出線の後方に通する後方連絡線を速かに整備す

二、第六十五旅団は十日より行動を開始し遅くも十五日迄に其の第一線を概ねマルチック河両側台端の線に推進し攻撃の目的を以てバンチンガン河両側台上的敵情地形を搜索す

三、永野支隊（第二十一歩兵団長の指揮する歩兵三箇大隊、砲兵一箇大隊基幹）は十日より行動を起し遅くも十五日迄に一部を以てアボア附近よりニウマルヤ附近を経てピラール附近に亘る線に進出し敵情地形を搜索すると共に軍の左翼を警戒し主力は依然サンフェルナンド附近に在りて攻撃の爲の訓練を実施す

四、第四師団（當時サマール附近に到着しある歩兵三箇大隊、野砲兵一箇大隊基幹）は依然サマール附近に在りて攻撃の爲の訓練を実施す

練を実施す

五、軍砲兵隊（十五榴五箇中隊、十加二箇中隊、十五加一箇中隊基幹）は第一線部隊の推進に伴ひ要すれば一部の陣地を推進し敵情搜索に任ずると共に所要に応じ第六十五旅団及び永野支隊に協力す

六、軍飛行隊は主として整備を実施すると共に一部を以て地上協力に任せしめ特にサマット山北側及びカポット台上的敵陣地を偵察す

〔半島攻略計画——マッカーサー脱出〕 軍は三月十八日、第二期作戰計画を完成し、同二十二日次の如き要旨のバタイン半島攻略計画を策定した。

一、軍は主力を以て三月末日頃迄に攻撃準備の線をチアベル河タリサイ河の線に推進すると共に一部を以てバタイン半島西半部地区に行動し該方面に敵を牽制せしむ

此の間軍飛行隊をして海軍と協同しコレギドール島及敵後方施設を爆砕し且敵砲兵を制圧せしむ又攻撃準備の末期より敵の第一線地帯を爆撃して敵の志気を沮喪せしむ

二、軍主力方面に於てはチアベル河、バンチンガン河合流点附近よりサマット山北麓に亘る敵陣地に対し四月上旬攻撃を開始し第一陣地帯を突破してサマット山南麓東西の線に進出す次いで第一線兵団は当面の敵情を搜索すると共に態勢を整へ後方連絡を確保し砲兵を招致する等第二陣地への推進を準備す

バタイン半島西半部方面に行動しある兵団主力はリアング西北方地区に之を集結し第二線兵団とす

三、軍主力の攻撃前進に先だち軍砲兵司令官をして総攻撃当日第六十五旅団、第四師団の砲兵の指揮を統一し攻撃準備射撃を実施せしむ

軍司令官は、二十三日各部隊指揮官をサンフェルナンドに集め、

攻撃計画を開示すると共に攻撃準備に関する命令を下達した。

軍飛行隊は、この頃連日コレギドール要塞を猛襲し、又三月二十九日より四月二日に亘り、マリベレス、カムカーベン両飛行場及びリマイ西方陣地等を爆撃して多大の戦果を収めた。

敵将マツッカーサー大將は、三月下旬コレギドール要塞を脱出した。

〔攻撃開始、第一陣地帯突破〕 軍司令官は二十八日夜攻撃実施に関する命令を下達し、三十日その戦闘司令所をサンフェルナンドからオラニに推進した。この命令において軍は四月三日より攻撃を開始し、重点を第四師団右翼方面に保持し、パンチンガン河からサマツ山北麓に亘る敵第一陣地帯を突破し先ずサマツ山南麓東西の線に進出せんとする企図を明かにし、右から第十六師団、第六十五旅団及び第四師団を併列して攻撃せしめ、永野支隊には軍予備となることを命じた。そして、第十六師団及び永野支隊は当初敵の牽制に努めることを要求せられた。

四月三日軍は予定の如く攻撃を開始した。先ず軍砲兵隊は、午前九時効力射撃準備射撃を、次いで十時攻撃準備射撃を開始し、計画に基き十時から午後一時三十分には第一一次破壊射撃、午後二時から三時に亘り第二次破壊射撃を実施し、軍飛行隊の爆撃と相俟つて、我が攻撃前進に先だち敵砲兵並びにサマツ山西北麓の敵陣地を殆ど完全に制圧した。軍の攻撃開始に当り第十六師団及び永野支隊は、依然従来の態勢のまま主として火力を以て陽攻を実施して、敵の牽制監視に任じた。第六十五旅団及び第四師団は、共に三日午後三時攻撃前進を開始し、逐次敵陣地を攻略して同日夕刻パンチンガン河右岸からオールドマリヤ西方タリサイ河左岸の線に進出した。

右の有利な状況に処し軍司令官はこの戦機を捕捉して夜に入るも攻撃を続行し、速かに敵第一陣地帯を突破するに決し、午後六時これを命じた。四日朝来攻撃は更に進捗し、午後五時頃までにサマツ

ト山方面敵主抵抗線の突破を略々完成した。この日夕刻軍は永野支隊に対しオリオン山方面の搜索を命じ、第十六師団に対してはマルチック附近に兵力を集結すべきを命じた。

五日第六十五旅団は、サマツ山南方約三料半三角標高一四二一高地の攻撃を企図したが、同日夕までに攻略に至らず、第四師団は、午後零時五十分サマツ山頂を占領したが、カボット台方面より砲撃を受けて死傷続出し、激戦を展開した。しかし、各部隊の奮闘により夜に入りカボット台を占領する敵を残し、サマツ山附近一帯の敵第一陣地帯の突破を完了した。

〔攻略完遂〕 六日午後零時三十分第六十五旅団は、三角標高一四二一高地を占領し、午後五時第四師団は、カボット台を奪取した。永野支隊は、カボット台附近に進出して攻撃に参加した。

七日第四師団の正面以東において、我が第一線の攻撃稍々進捗し、同夜軍砲兵をサマツ山北麓に推進し、八日夜リマイ南方五料のラマオ附近からリマイ河の線に進出した。この日空中搜索の結果、東海岸方面の敵はカムカーベン及びマリベレス附近に向い退却中で、西海岸方面の敵もまた退却を開始したものの如く、マリベレス湾、シシマン湾、カムカーベン沖には敵艦船多数碇泊中なること判明した。軍司令官は、同夜十時マリベレスに向う追撃を部署した。第一線各部隊は四月九日終日追撃と力攻を重ね、同夜第四師団及び第十六師団はマリベレスに突入し、バタリン半島の攻略を完了した。

〔コレギドール要塞攻撃〕 軍はかねてコレギドール要塞攻略計画を立案中であつたが、十七日これを完了した。その方針とするところは、「砲撃威力の統合發揮に依る緊密なる協力の下に先ずコレギドール島尾部に急襲上陸して地歩を獲得したる後同島頭部に上陸し一挙同島を攻略す」るにあつた。

各部隊は鋭意攻撃を準備した。企画の秘匿に関しては少くも上陸時機を秘匿し、為し得ればコレギドール攻略企画を放棄した如く欺

騙し得れば有利なりと考え、陽動は勿論その他の昼間行動を敵に戒しめ、軍司令官は四月二十八日正式にマニラに入城して、天長の佳節の儀式を華々しく挙行し、コレギドール要塞は砲爆撃と封鎖とに局限する如く宣伝し、ミンダナオ方面に向う如く装つてマニラを発し、バランガに帰還した。

軍砲兵隊は、五月五日午後十時四十五分より午後十一時に亘り第四師団の左翼隊（歩兵第六十一聯隊、戦車第七聯隊の一部、山砲二箇中隊基幹）の上陸支援射撃を実施した。左翼隊は午後十一時十分カバリー岬附近及びノース岬附近の上陸に成功した。左翼隊は、六日昼数次に亘り敵の逆襲を受け戦闘熾烈を極めたが、午後四時三十分サンホセを占領した。

〔無条件降伏〕 これより先六日午後一時三十分米極東軍司令官ウエーニンライト中将左翼隊正面に來り降伏を申出た。軍はこれをカム

第五章 攻略作戦終末に伴う戦争指導

1 進攻作戦の進展に伴う攻略施策

諸戦における赫々たる勝利は、大本營及び政府をして、既に述べた如く先ず蘭印に対する無血進駐の可能性を想起せしめたが、次に來る課題は対重慶施策、対印濠施策等の問題であつた。

〔開戦時の対重慶判断〕 振り返つて開戦前東條内閣の国策再検討において、「対米英蘭開戦が重慶側の戦意に如何なる影響を与ふべきや」の問題についての大本營及び政府の結論は次の通りであつた。

一、日本の対米英蘭開戦は蒋介石をしてA B C D陣の団結による対日長期抗戦の決意を益々強固ならしめ当初は志気を昂揚し米英等との提携を愈々鞏固にし飽迄抗日戦に徹底し日支全面和平

カーペンに招致し、軍司令官と会見の結果、彼は他地域に対する指揮権なしとの理由でその降伏を單にコレヒドール島に限定しようとしたので、軍はこれをコレヒドール島に帰還させ、攻撃を続行した。

第四師団右翼隊は、六日午後十一時四十分敵の抵抗を受けることなく、パッテリ岬東南地区に上陸し、左翼隊と共に島内を掃蕩し、七日午前八時三十分同島を完全に攻略した。

この日ウエーニンライト中将は、在比全米比軍の無条件降伏を申出で、午後十一時五十分マニラ放送局を通じて全米比軍に投降命令を發し、各地に幕僚を派遣してこれを伝達させた。

第二次バターン攻略作戦経過及び南方全般攻略作戦経過の概要は附圖第二を参照せられたい。

の成立は少くとも全戦局の終結迄延期せらるべし

二、上海、香港等援蔣拠点の喪失、帝国の南進発展による緬甸ルートの輸送杜絶、我南方作戦の成果維持による南洋華僑の援蔣中止等となり財政経済上の逼迫を促進して其の實質抗戦力は漸減し戦力の通減と相俟つて一般大衆は勿論重慶政権主流の継戦意志にも重大なる影響を及ぼし灰色将領中南京側に寝返るもの逐次其の数を増加し遂に重慶側統一戦線の分裂を來し蔣政権は愈々微弱化するべし

即ち日支全面和平の成立は全戦局の終結まで延期せられるであらうという結論であつた。尤もこの判断は、直接重慶政権に対しては現態勢を以て推移し、一層積極的な政略施策を強化せざる場合の判断である。

そこで開戦時の「対米英蘭將戦争終末促進に関する腹案」において、重慶政権の屈伏促進のためには対米英蘭作戦の間接的成果を活用するほか直接重慶政権に対する作戦の強化が必要であると考えられていたのであるが、開戦時及び開戦初期においては、到底その余力はないものと認められ、それが具体的な計画はなかつたのである。

〔対重慶謀報路線の設定〕 然し一応前記の如く判断しながらも日本の対米英蘭開戦は、なんと云つても情勢の重大転換であるが故に、開戦に伴う重慶政権の動静は、大本営及び政府の重要関心事であつた。初期作戦の極めて有利なる進展に直面して益々然りであつた。

十二月二十四日大本営及び政府は、連絡会議において次の如き対重慶方策を決定した。これは戦争初期における日本の重慶政権に対する基本的態度であつた。

情勢の推移に伴ふ対重慶屈伏工作に関する件

昭和十六年十一月十三日連絡会議決定の「対米英蘭將戦争終末促進に関する腹案」に基き情勢の推移特に作戦の成果を活用し好機を捕捉して重慶政権の屈伏を策す

一、先づ対重慶謀報路線を設定す

本工作は大本営陸軍部に之に任じ関係各機関之に協力す

右工作は重慶側の動向を諜知するに止め屈伏条件等には一切触れざるものとす之が為新に獲得せる支那側要人及び其他外国人を利用する等の措置を講ずるものとす

二、帝国の獲得せる戦果と彼の致命部に対する強圧とによる重慶側の動揺に乘じ適時謀報工作より屈伏工作に転移す

其の時機方法等は大本営政府連絡会議において決定す

註(1) 本工作の実施に当りては国民政府を活用すると共に前記一、二を国民政府に十分徹底せしめ所謂全面平和の急速な

る成功に焦慮するが如き措置に出でざらしむる様留意するものとす

(2) 本工作に当りては我方の足許を見透されざる様特に細心なる考慮を払ふものとす

これより先、重慶政権に対する和平工作は、昭和十五年十一月新国民政府を承認するに至つてから後は、特に全く差し控えられていた。右連絡会議における全般を通じての意見は、今急いで重慶政権に対し工作を行うのは適當でなく、武力的圧迫が進めば先方から手を差し伸べて来る、それまで我方が急ぐと却つて足下を見られると云うのであつた。従つて右決定の主旨は第一項の先ず謀報路線を設定するということにあつて、第二項は今後における基本的な考えを明かにしたに過ぎず、「致命部に対する強圧」と云つてもその具体的な計画はまだなかつたのである。

〔当面の對外施策〕 昭和十七年一月に入るや大本営及び政府は、開戦後における敵国及び中立諸国の動静、就中作戦の有利なる進展に伴う印度及び濠洲等の情勢に鑑み、一月十日連絡会議において、次の如き施策を決定した。

情勢の進展に伴ふ当面の施策に関する件

情勢の進展に伴ひ昭和十六年十一月十三日決定「対米英蘭將戦争終末促進に関する腹案」に基き差当り左記施策を強化す

一、米英等の敵国

米英等の敵国に対しては国内に厭戦気分を醸成し以て継戦意志を喪失せしむるに努む

之が為特に作戦と呼応し各種宣伝を強化す

二、印度

英米との交通遮断並に對英協力の拒否及反英運動の積極化を目標とし作戦の進展に伴ひ逐次施策を強化す

本施策は大本営之に任じ関係各機関之に協力す

三、濠洲（ニュージールランドを含む）

南方作戦の進捗、英米との交通遮断等對濠重圧の態勢を強化しつつ濠洲を英米の覇權より離脱せしむるに努む
本施策は大本營之に任じ關係各機關之に協力す

四、南米諸国

南米諸国に対しては此等諸国をして實質的に中立を維持せしめ為し得れば樞軸國側に接近せしむるを目標とし工作の重点をアルゼンチン、ブラジル及びチリの三国に置く之が為スペイン、ポルトガル及び羅馬法王庁をも利用す

五、ソ連

日ソ間の静謐を保持すると共にソ連と英米との連繫の強化を阻止し為し得れば之を離間するに努む

六、泰國

日泰兩國軍の共同作戦を必要とする時期に至らば英米に對し宣戦せしむ

註(1) 第一項及び第四項に関しては特に独伊と密に提携施策するものとす

(2) 本施策は現下の作戦に即応せしむるものとし之が實施に關する大綱は連絡會議の諒解を経るものとす

(3) 印度及び濠洲に対する最後の處理に關しては別に定む
右決定に基き大本營陸海軍部は、對印度濠洲施策の主担任に關し、印度は陸軍、濠洲は海軍がこれに任ずることに申合せを行つた。

〔東條首相の議會演説〕 作戦の進展に伴い、東條首相は、帝國議會再開劈頭の一月二十一日及びシンガポール陥落直後の二月十六日の二回に亘り、議會において演説し、中国、印度、濠洲等に対する前記決定の趣旨に基く呼掛けを行うと共に南方占領地の将来における政治的帰属等に言及するところがあつた。

南方占領地の政治的帰属については、開戦前においても一応の研究が行われ、開戦後においては戦争指導上の重要課題として、慎重な研究が進められていたが、種々の考慮によりこれが最終的決定を行ふことは困難な実情にあり、たとひ決定を見てこれを過早に発表することは差し控うべきであると考えられていた。然るに東條首相は政治的效果を狙つて、右二回の演説において敢えてこの問題に言及したのである。即ちフィリッピン及びビルマに対しては将来独立の榮譽を与え、香港及びマレーは大東亞防衛の拠点として、日本がこれを確保すべき旨を明かにした。それは固より連絡會議の決定に基くものであつて、当時フィリッピン及びビルマを独立させることについては、格別の異論なく、又香港及びマレーは何等かの形で日本の実權下に収める必要があるとせられていた、その他の地域に關してはまだ結論が得られなかつた。

なお東條首相は二月十六日の演説において、「大東亞戦争の目標とするところは、我輩國の大理想に淵源し大東亞の各国、各民族をして、各々其所を得せしめ、皇國を核心として道義に基く、共存共榮の新秩序を確立せんとするに在る」旨を述べ、戦争目的の「新秩序建設」の面を強く表明したのが注目せられた。

〔チモール作戦に關連する對葡論争〕 チモール島に対する作戦に關連し第三國たるポルトガルに対する態度の決定は戦争指導上の一課題であつた。抑々チモール島は、空海の基地ポートダーウィンを擁する西北部濠洲と近く相對峙し、所謂濠北方面における攻防の戰略的要衝であつて、これを攻略することは初期作戦の一つの狙いであつた。同島は蘭領と葡領とに分れ、開戦時蘭領チモールは固より攻略地域の一として計畫せられていたが、葡領チモールに対する措置は決定していなかつた。葡領チモールに進攻することはポルトガルを敵側陣營に廻す虞が大であるので極力これを回避すべきであつた。

然るに当時既に濠蘭軍が葡領に進入し、葡領チモールの局外中立は破られており、作戦上葡領の要地クーバンを攻略すると同時に、葡領の要地デリーに対しても進攻することが必要であつた。そこで葡領に進攻することについては、政府も異存なかつたが問題は葡領の濠蘭軍掃蕩後同地より撤退すべきか否かの点であつた。統帥部、就中海軍統帥部は、掃蕩後も依然葡領チモールを、主として濠泊ポートダーウィンに対する作戦基地として確保したい希望が強かつた。

かくして一月二十八日の連絡会議において「対葡領チモール作戦に伴ふ対葡措置に関する件」が討議せられ、葡側が中立を保障する限り日本軍隊は撤退すべきであると主張する東條首相と、撤退すべきや否やは葡側の態度及びその他当時の情勢により決定すべきであると主張する永野軍令部総長との間に、相当の激論が行われた。

東條首相が政務輔弼の任を完うし得ないと述べれば、永野総長は統帥輔翼の任を完うし得ないと論じ、各々自説を固持して譲らず、東條首相は聖断を仰ぐの外あるまいとまで極言した。これは開戦後の連絡会議において緊張した場面の最初のものであつた。

然し二月二日に至り会議を続行し、結局両者の妥協により「葡領にある英濠蘭軍の掃蕩後は葡側にして中立を保障する限り帝国軍隊は該地域より撤退す但し葡側の態度及び全般作戦の情勢上已むを得ざる場合には引続き作戦基地として使用することあるべし」ということに決定せられた。

〔爾後の戦争指導に関する研究議題〕 シンガポール要塞に対する攻勢発起を目前にし、今や大本営及び政府は進攻作戦の予期以上の成功を確信するに至つた。爾後如何に戦争を指導すべきかは、固より開戦時の腹案に準拠すべきであるが、当時の諸情勢に即応して更めて検討すべき課題であつた。二月四日の連絡会議において、東條首相は爾後の戦争指導、大東亜建設の要綱及びこれらに関連する国

内指導等に関し速急に討議を進めたい旨を発言し、二月九日これが研究議題を決定した。その主なるものは次の通りである。

一、世界情勢判断

二、米濠並に米印濠間の相互依存關係之に並が遮断に依る影響
三、初期作戦の実績は予定計画に対比し軍事的政治的経済的に如何なる差異ありしや

四、占領地よりの物資取得の現状並に将来の見通し

五、船舶の現状並に之が増強対策

六、今後採るべき戦争指導の大綱

七、国民生活確保の具体的方策

八、帝国の資源圈を如何にすべきや

九、大東亜戦争の現情勢において帝国指導下に新秩序を建設すべき大東亜の地域

右の研究討議は、大本営及び政府事務局間の折衝を経て、関連事項を一括して二月下旬から三月上旬に亘り行われ、所要に応じ連絡会議構成員のほかに、湯沢三千男内相、寺島健通相、井野碩哉農相等もこれに参加した。

2 世界情勢及び既得戦果の判断

〔世界情勢判断〕 数次の討議を経て、三月七日連絡会議の決定を見た世界情勢判断は次の通りである。

世界情勢判断

第一、米英側の執るべき方策

米英は今後軍事的経済的財政的其他各方面に於ける協力を益々緊密化し一体となりて枢軸側戦力の低下に努めつつ他面自己戦力の急速増強を図り先づ其の対枢軸戦争指導の重点を歐洲に置きソ連と相提携して該方面の戦局を有利に展開せしむると共に対日反撃進攻拠点の確保強化に努め優勢なる兵力を保有するに至らば一挙

対日反攻を企図すべし即ち

一、差当り英は米ソと相携へて先づ速に独伊戦力の撃破を図ると共に地中海及び西亜方面を確保し日独伊の提携阻止に努むべし
尚英は東洋方面においては対日反撃並に英帝國結合保持の爲め極力印度洋の制海権及印度並に濠洲の確保に努むべし
二、差当り米は英ソと相携へて先づ速に独伊戦力の撃破を図ると共に濠洲及び印度洋方面においては対日反攻拠点の確保強化に努め且有力なる海上及航空兵力を太平洋方面に集中し其の一部を以て我が海上交通の妨害日本の中樞地区に対する奇襲其の他各種ゲリラ戦の実施に努むべし

三、米英は援ソ援蔣に力を尽すべく他方ソの対日牽制行動乃至は参戦に多大の期待を掛け極力之が実現に努めつつ差当り密かに東部ソ領に對日進攻拠点の獲得を策すべし

四、米英は戦力向上の時機を見て対枢軸大規模攻勢に転ずべく之が爲日本に対してはソ支と提携して大陸方面より直接我中樞部を衝くに努めつつ主力を以て濠洲及印度洋方面より逐次戦略要点を奪回反撃し来る算大なり
而して其の大規模攻撃を企図し得べき時機は概ね昭和十八年以降なるべし

参 考

(一) 濠洲（新西蘭を含む）の情勢

(1) 濠洲は専ら米及英の援助に頼りて戦力の増強に努め執的に対日抗戦継続を企図すべし

(2) 濠洲戦力増強の程度は濠と米英間の交通路の状況に依存すべし若し交通路の遮断長期に亘らば増強は不可能となるのみか戦力は低下すべし

(3) 濠洲は漸次対英關係においては自主的となるべきも対米依存の度を増すべし

(4) 濠洲国防力の隘路は人口の少きこと及工業殊に重工業生産能力貧弱なることに在りて其の強味は衣食に關しては如何なる長期戦にも対処し得る点に在り

(二) 印度の情勢

(1) 英米は印度の防衛を強化すると共に印蔣關係の緊密化を図り抗戦體勢の保持に努むべし

(2) 今後印蔣關係は援蔣ルートの開發計畫並英印妥協に關する蔣の仲介等に關連し漸次緊密化すべし

(3) 英は印ソ、印蔣關係を利用して米の支援を得て凡ゆる手段を尽して印度民衆をして対枢軸戦争に全面的に協力せしむることに努むべし

(4) 印度に於ける反英運動は枢軸側の戦果の拡大特に帝國のビルマ占領並日独の印度孤立化方策實現するに於ては枢軸側の対印内部工作と相俟つて其の積極化を見るの可能性あり

第二、ソ連邦の採るべき方策

一、ソ連邦は世界長期戦化を目的としつつ米英との提携協力を強化し対独抗戦に専念するに努むべし

此間ソ連邦は差当り帝國に對し現状を維持せんことを努むべし然れども米英の強要に依りては対日参戦の虞無しとせず特に春季独ソ戦がソ連に有利に進展したる場合には帝國の対米英戦の推移に伴ひ帝國の戦力が低下し又は其の彈力力を失ふに於ては米英と連繫するソ連邦の對日参戦を誘発するの算大なり又我が對ソ武力行使必至と判断せる場合には米に軍事基地を供与すると共に彼より進んで機先を制し奇襲的攻撃を敢行するの虞渺からず

二、東部ソ領に於ける現兵力（狙撃師団約二〇、戦車約一〇〇〇、飛行機約一〇〇〇）は日ソ間の現状変化なき限り本春以降

に予想せらるる独ソ戦況の推移如何に拘らず大なる変化なるべし

三、ソ連邦は援將行為を続行するの外我領導下の諸民族に対し主として思想戦により攪乱を策すべし

四、現情勢に於ては独ソ和平の可能性なるべし

第三、独伊の採るべき方策

一、独軍は本冬季節概ね対ソ攻撃準備を整へ得べく本年春夏の候に於て対ソ攻撃を再興すべし但本年中にソ連兵力を徹底的に潰滅するは至難なるべく又之に依りスターリン政権崩壊の可能性は見込なかるべし此間速かに高架索の占領を企図すべし

二、独は其の高架索作戦の進展に伴ひ西亞に於ける英勢力の一掃を企図し帝国との連繫に努むべし

右作戦の規模及進展の態様は一にソ連抗戦力の恢復程度及独軍の攻撃準備完整程度並土国の向背如何に繋るものとして今遽に予断し難し

三、対英本土上陸作戦準備は依然之を整へつつあるも英の屈伏崩壊の徴到来せざる限り当分進んで之を敢行することなかるべし但大西洋方面に於ては依然対英封鎖に重点を置きつつ逐次対米海上交通破壊戦を強化すべく其の効果は相当に期待し得べし

四、仏国に對しては逐次之を枢軸陣營に包擁するに努むべし

五、現情勢に於ては独ソ和平の可能性なるべし

第四、重慶政権の動向

一、重慶政権は逐次抗戦力を低下し且其の財政經濟状態は逼迫しあるも尚党及軍の威力を背景として靱強なる抗日意識を堅持し反枢軸陣營の最後の勝利を期待しあるを以て未だ抗戦意志を放棄するに至らざるべし而して此間益々ソ連との提携強化及び印度民族との接近を計ると共に抗日陣營の統一に努力するものと認めらる

二、米英の援將ルートの遮断、枢軸側戦果の拡大其他米英ソ依存の頼み難き情勢現出し且我國力増進するを見るに至らば遂にその抗戦体制の崩壊を招来すべし

第五、中立諸国の動向

一、仏国の動向

仏国は依然灰色的態度の持続に努め対独協力の積極化は尚躊躇すべし

二、葡国の動向

ポルトガルは現情勢に於ては其の領土権が尊重せらるる限りなるべく長く中立的態度を維持するに努むべし

三、拉米の動向

アルゼンチン、チリーは差当り中立的態度を維持すべきも早晩米に追従するの虞大なり

四、トルコの動向

依然中立を堅持するに努むべきも本春以後独軍の高架索作戦順調に進捗するに於ては枢軸側に参加するに至るの公算多し

五、西国の動向

西班牙は今直ちに枢軸側に参加し得ざる状態に在り

第六、彼我國力推移

其の一 米英の戦争遂行能力

米國は専ら生産部門の隘路是正及國家総力戰態勢の確立に努力し概ね一九四四年末期に至る間其の軍備及軍需生産能力は飛躍的に上昇すべし

然れども爾後は對外依存資源、勞力、輸送力等の不足により生産力の増勢漸次停滯の傾向を示す可能性あり

二、英國

現情勢を以て推移せば今後尚若干の戦力を増加すべし

然れども英本国は人的資源に於て殆んど限度に達しあり物的資源亦海外特に米に依存せざるべからざる状況にあるを以て制海権並属領植民地の喪失に伴ひ逐次其の戦争遂行能力は低下の傾向を示さざるを得ざるに至るべし

三、米英戦争遂行能力の総合的觀察

米英合作の総合戦争遂行能力は強大にして我に對し優勢なる戦力を急成し且長期に亘り戦争を遂行し得る能力を有す

其の戦意も亦一般に旺盛なるものありと雖も左の如き幾多の脆弱点を包蔵しあり

- (一) 人的戦力は物的戦力に伴はざるべし
- (二) 物的戦力膨大なるも米英特に米の政治経済機構は今尚国家総力戦に必要な臨戦態勢を整備し居らず之が確立には今後幾多の摩擦紛糾を生ずべし
- (三) 優勢なる軍備を有するも之が進攻拠点の喪失は其の価値を大いに減殺す
- (四) 英の戦争遂行能力は海上輸送力に依存するところ極めて大なり
- (四) 米の海上輸送能力は国力に比し貧弱にして援英に徹底し得ず
- (六) 米英の遮断分離が其の戦争遂行能力に及ぼす影響は日独間遮断分離の比にあらず
- (七) 英国は自治領植民地等との遮断分離により遂に崩壊を来す虞あり
- (八) 米英国民は生活程度高く之が低下は其の頗る苦痛とするところにして戦捷の希望なき戦争継続は社会不安を醸成し一般に士氣の衰頹を招来すべし殊に英の敗戦が米に及ぼす影響は極めて大なり
- (四) 米英の結合は自然なるも米英との提携は不自然にして其間

幾多の矛盾を有す

(四) ルーズベルト、チャーチルの政策は動々もすれば投機冒險に墮し国民必ずしも其の指導に悦服し居らず

其の二 ソ連の戦争遂行能力

一、現状に於いては低装備の狙撃約二〇〇師団を以てする東西兩正面同時作戦の遂行は可能なるべし

(一) 人的資源豊富なり

(二) 今春頃の軍需工業能力は独ソ開戦前の約五割なり

(三) 糧食は十分なり

(四) スターリンに対する信望厚く軍民共に目下のところ抗戦意識旺盛なり

二 高架索の喪失はソ連の物的抗戦力に大なる低下を来すべきも差当り本年対独戦の遂行は支障なかるべし

三、若しソ連にして長くレニングラード、モスクワ附近並高架索を確保するにおいては本年秋頃迄に其の能力を若干（今秋頃には開戦前の七割程度）向上すべきも爾後の増勢度は極めて緩慢なるべし

其の三 独伊の戦争遂行能力

一、独国

現国力を概ね維持し得べし

(一) 對ソ攻勢作戦遂行には差当り支障なし然れども本年度内にコーカサス作戦終結せざれば爾後大規模なる作戦を実施するためには石油資源不足する虞あり

(二) 人的資源及軍需工業能力は十分なり

(三) 糧食は勢力圏内の需要を概ね充実に得

(四) ヒットラーに対する信望厚く軍民共に戦争意志旺盛なり

二 伊国

伊の戦争遂行能力は独に依然する所少なからず

独伊間の交通確保せらるる限り伊は其の戦力維持に大なる困難なるべし

〔初期作戦の実績検討〕 右世界情勢判断と共に初期作戦の実績に対する判断は、爾後の戦争指導方策決定のための前提要件であつた。これについての連絡会議の決定は主要次の通りである。

初期作戦の実績は予定計画に對比し軍事
的経済的政治的に如何なる差異ありしや

第一、軍事

初期作戦に於て陸海軍共に予期以上の大戦果を収めたる結果差し当り米英をして守勢に墮せしめ我國土の防衛、主要交通線の確保等に関し有利なる情勢となりたる外現戦勢を活用せば長期戦完遂の爲め従来は守勢的戦略態勢を採るの已むなきを予期せしめたるに反し今や攻勢的戦略態勢に転じ得るの機運となれり

一 陸軍作戦は比島方面に於て若干遲滞を見あるの外全般に約一カ月の作戦期間を短縮進展せしめたり尚我が兵力の損耗に於ても予想外に輕微なり

殊に南方作戦の一段落後に予想せしビルマ作戦は南方において早期に得たる余力により既に之を開始し得るに至りたり

二 海軍作戦は緒戦に於て太平洋方面所在の米英艦隊の主力に対し大打撃を加へたる外在東洋敵海上兵力を殆んど撃滅したるに對し我が兵力の損耗は予期以上に僅少にして太平洋並に印度洋方面に於ける彼我の兵力關係は当分の間攻守互に其の所を變じ得るに至りたり

三、陸海軍航空作戦も亦我が損耗比較的僅少且多大の敵航空兵力を撃破し予期以上の戦果を収めつつあるを以て今後太平洋及び印度洋方面に於ける敵大航空兵力の展開を封じ得るに於ては敵航空兵力の急速増勢に對処し得る情勢となれり

四、米英は將來其の戦力向上せる晩に於て尚残存せる反攻拠点を

利用し大規模攻勢を企図し得べし

五、特に緒戦に於て敵軍に与へたる心的打撃は甚大なるべし

第二、政治

帝國を中心とする現下の世界政治情勢を開戦前の予想と比較するに概ね当初期待せる推移と些したる相異なきも其の大勢は予期以上帝國にとり有利に展開し居れり

第三、経済

緒戦の大戦果に依り

1 既定計画の地域に於ける資源の確保並に米英に對する重要物資の供給遮断を早期に概成し得たり

2 海上輸送力は概ね予定の状態を維持し在り

3 物資取得特に石油取得に付ては予定に比し極めて良好なる成果を挙げ得る見込確實なり

右に依り一般に物的戦争遂行力は予定以上の強化を予想せらるるに雖も食糧確保に付ては尚考慮を要する情況に在り

一、船舶輸送力

船腹量算定に関する各要素に付ては多少の異動あるも全体的には概ね既定計画通りなり

即ち拿捕船の利用減、徴備船及修繕船の増等は外国備船の増、C船（筆者註、民需用船舶）の喪失大破の減等に依り相殺せられ今後の引揚船は其のまま船腹量の増加となるべし

二 鋼材

（一）既定計画（昭和十六年十一月五日御前會議に於ける企画院総裁説明）

（1）十六年度鋼材生産量は物動計画策定時の計画量四七六万

噸に對し開戦時の計画量四五〇万噸とす

（2）十七年度に於ては南方作戦期間は年換算三八〇万噸程度に低下す

(→) 現状に基く見込

(1) 十六年度鋼材生産量四六五万噸にして既定計画に比し一五万噸増なり

(2) 十七年度に於ては船舶輸送力を既定計画通りとして屑鉄回収強化貯鉱の使用増加等により五〇〇万噸の生産を確保し得べき見込なり

三、米

(→) 十七米穀年度の当初需給計画は

内地 五九一三万石

台湾より 三一〇〃

朝鮮より 六二八〃

泰より 三〇〇〃

仏印より 七〇〇〃

計 約 七八五一〃

十六年度よりの持越 七〇七〃

十八年度への持越 六〇〇〃

(註) 本数量は一応概定せるも初期作戦中の実績に徴せば船腹及び荷役能力の關係上実現困難と概定せる処

(→) 泰仏印よりの分は十六年十一月以降十七年二月末日迄初期作戦中僅かに一〇〇万石を輸入し得たるに止りしと共に内地米及び台湾米の生産並代用食等の供給減に因り需給關係逼迫するに至り左の如く修正需給計画を確定するの要あり

五五四六万石

内地 七〇〇〃

朝鮮より 二二五万石

台湾より

泰 九九四〃

仏印 より

ビルマ

計 七四五五〃

泰仏印よりの分は現地荷役能力の限度を考慮し定めたるものにして今後之が輸送を確保すると共に止むる得ざるときは十八米穀年度への予定持越六〇〇万石を減少せしむることに依り緊急処置するを要するに至るべし

尚十七年十一月以降十八年三月迄の外米輸入予定数量は四四八万石とす

四、石油

(→) 既定の南方地域よりの取得見込量(十一月五日御前會議に於ける企画院總裁説明)

第一年 第二年 第三年

ボルネオ 三〇万軒 一〇〇万軒 二五〇万軒

スマトラ

南部 七五〃 一四〇〃

北部 二五〃 六〇〃

合計 三〇〃 二〇〇〃 四五〇〃

(→) 之に対し十七年度取得見込量

英領ボルネオ 七〇万軒

タラカン地域 二五〃

サンガサンガ地域 三〇〃

スマトラ 五〇〃

計 一七五〃

3 濠洲攻略に関する陸海軍の論争

既に述べた如く、進攻作戦の進展に伴い大本營及び政府は、濠洲

及び印度に対する施策に重大関心を寄せて来たが、今後の戦争指導の前途に横たわるものは実に濠洲及び印度の問題であつた。

濠洲及び印度は、前記「世界情勢判断」において強調している如く、米英の対日反攻の重要拠点であり、且つこれら地域の英帝国よりの離脱が英国の戦争遂行に及ぼす影響は、極めて大なるものがあると考えられていた。翻つて開戦時の計画において、日本は固より濠洲又は印度を攻略する意図を持っていなかつた。即ち濠洲印度に對しては「政略及び通商破壊等の手段に依り英本國との連鎖を遮断し其の離反を策し、又ビルマの獨立を促進し其の成果を利導して印度の獨立を刺激す」と定めていたに過ぎなかつたのである。

然るに初期作戰の予期以上の成功は、前記初期作戰の実績に関する觀察が示す如く、大本營陸海軍部をして、「長期戦完遂の爲、從來は守勢的戰略態勢を採るのも已むなきを予期せしめたるに反し、今や攻勢的戰略的態勢に転じ得るの機運となれり」との情勢判断をなさしめるに至つた。かくの如き有利なる情勢判断は、当期の陸海軍を通じての一致した見解であつたが、特に海軍においてはその傾向が強かつた。海軍は三月七日までの調査に基き、米國の戦艦五隻、航空母艦二隻、巡洋艦四隻、駆逐艦八隻を撃沈し、戦艦四隻、巡洋艦八隻、駆逐艦六隻を大中破したものと認定した。これに對し我方の損害は、甲級及び乙級巡洋艦各一隻の小破に過ぎず、しかもそれは既に修理が完成してゐた。

〔攻勢？ 守勢？——濠洲攻略論争〕 かくして海軍は軍令部及び海軍省を挙げて濠洲に対する積極論を強調し、これを攻略すべきを主張した。その理由を要約すれば、長期戦遂行のため守勢に立つは不利であつて、飽くまで攻勢的に作戰を指導して敵を對し守勢に立たしめることが肝要であり、この一般方針の下に米國の對日反攻の最大拠点たる濠洲を攻略するを可とすといふのである。連絡會議における前記研究議題の決定にあつても、結論が自ら濠洲攻略案に

歸着する如く誘導しようとした。これに對し陸軍は既定計画通り戰略的守勢による長期不败態勢の確立を主眼とし、自給自足態勢の整備と國家戦力の増強に努むべき方針であつた。この陸海軍間の意見の対立は、開戦以後において特筆せらるべき最初のもので、これを繞る陸海軍の作戰及び戦争指導等の幕僚間の論争は、二月九日より三四日に亘つて行われた。陸軍側特に參謀本部は、次の如き趣旨の理由で断乎として濠洲攻略論に反對した。

濠洲はその広袤中国本土の約二倍に匹敵し、人口約七〇〇万を算し陸上交通決して便利ではない。日本軍にしてこれが攻略を企図する場合、濠洲人はその国民性からして最後まで抗戦すべく、兵要地理的困難性と相俟つてその作戰は容易ならぬものとなることを予期しなければならぬ。

攻略に充当すべき兵力に就て陸軍が検討した所によれば、一応海軍は聯合艦隊主力、陸軍は十二箇師団基幹の兵力を必要とし、これに要する船舶は陸軍だけで約一五〇万総噸に達し、状況によつては更に多数の陸軍兵力の投入を必要とする場合もあり得る。このような大兵力を新に捻出する爲には、滿洲の對ソ戦備と中国方面における戦面を大幅に縮減するを要し、全般戰略態勢を著しく不利ならしめ、又船舶の全般運用に大なる変更を余儀なくせられ、物力的国力の培養に重大な欠陥を招来するであらう。

今や日本は既定計画に基く南方要域の攻略を終らんとしているが、今後は開戦時決定せられた戦争指導の根本方針に基き、國家の総力を挙げて持久戦争を遂行すべきであり、この際最も肝要なことは堅実なる計画の下に国力及び戦力の彈撻力を涵養することである。これが爲に南方作戰概成に伴い、陸軍徵備船は逐次解備せられ、開戦第八月以降は、開戦時二一〇総噸の約半数たる一〇〇万総噸に減額せられる予定である。

以上の如き既定計画を変更して、開戦以来南方に使用全兵力以上

の兵力を以て、今遽かに海上四〇〇〇哩を隔てた濠洲に進攻するが如きは、極めて放漫な作戦であつて、明かに日本の国力の限度を越えるものと断すべきである。凡そ戦争において最も戒しむべきは、武力戦の攻勢限度が自己の有する力を超越し、敵の策源に近く攻勢の挫折を招くことである。濠洲攻略案の如きは、正にこの戦史の訓へる危険を冒すものと謂うべきである。

〔妥協の行方——米濠遮断作戦〕 海軍は結局右陸軍の反対理由を諒承して濠洲攻略企図を断念した。然し海軍は爾後の戦争指導に対する積極意圖を放棄したわけではなく、海軍独自の作戦において、依然攻勢作戦を指導せんとしていた。

陸軍は濠洲攻略案を拒否したが、米英の対日反攻の最大拠点としての濠洲の重要性に大なる関心を寄せていた。国力及び戦力の大なる消耗を伴わざる一部の積極作戦により米濠を遮断し、濠洲の孤立化を図ることは希望するところであつた。それは即ち直接濠洲を攻略することなく、米濠遮断作戦によつて、米英の対日反攻企図を封殺せんとする考えである。この構想については陸海軍間に意見の一致を見、結局海軍の濠洲攻略のほか、サモア、フィジー及びニューカレドニア攻略作戦案は、後述する米濠遮断作戦即ち既定のポートモレスビー攻略作戦へと発達したのである。

〔米濠、英印濠関係の検討〕 以上の如き濠洲攻略問題にも関連し、前記「米濠並に英印濠間の相互依存関係並に之が遮断に依る影響」が、爾後の戦争指導方策決定のための研究議題となつたのであつた。これについての連絡会議の結論の大意は次の通りである。

米濠並英印濠間の相互依存関係並に之が遮断に依る影響

第一 米濠間の相互依存並に之が遮断に依る影響

濠洲は従来対英依存関係大なりしも今後に於ては軍事及政治的に対米依存関係漸次強化すべし

米濠間の完全遮断の継続に依り

一、濠洲は今後米国の援助に依る抗戦力の増強不可能となるべし

二、米国は南太平洋に於ける対日反攻拠点を失ひ且太平洋を通ずる米英の連繫は不可能となるべし

三、米濠間の物質依存関係は別紙の通り（筆者註、略）にして之が遮断の影響は米濠の経済力に對し決定的ならざるも濠の国防生産力の増強は不可能となるべし

第二 英濠間の相互依存關係並に之が遮断に依る影響

英濠間の完全遮断の継続に依り

一、濠洲は英国よりの軍事的其の他の援助の途を失ひ抗戦力の低下を來たすべし

二、英国は太平洋を通ずる米英連繫の拠点を失ふと共に東亞に於ける有力なる反攻拠点を失ひ且印度に對する遮断と相俟ち大なる心的打撃を受くべし

三、英濠間の物質依存關係は別紙の通り（筆者註、略）にして之が遮断の影響は戦争遂行上英に對し必ずしも決定的ならざるも濠は国防生産力の増強不可能となると共に遮断長期に亘るときは濠の経済困難深刻となるべし

第三 英印間の相互依存關係並に之が遮断に依る影響

英印間の完全遮断に依りの継続

一、大英帝国構成の支柱たる印度を孤立化し其の印度統治の直接王力を稀薄ならしめ之が離反の傾向を与へ且英帝国の權威を失墜せしめ英国の戦争遂行力に深刻なる打撃を与ふべし

二、英米は印度洋方面に於ける対日反攻拠点を失ふべし

三、英印間の物質依存關係は別紙の通り（筆者註、略）にして之が遮断は英国の物資調達力に直接且致命的影響は与へざるも西南太平洋地域よりの物資供給遮断と相俟つて其の追加的

影響は少なからず

四、印度は経済的に孤立し貿易の杜絶に伴ふ経済的不安を招来すべし

五、印度が濠洲阿弗利加西亜方面に対し有力なる人的物的資源の供給基地たるに鑑み之が遮断は此等諸地域に対し軍事及經濟上相当大なる影響を与ふべし

六、重慶と米英間の完全遮断を招来し物心共に重慶に与うる影響大なり

4 爾後の戦争指導大綱

〔陸海軍調整案採択〕 爾後の戦争指導に関し、前記濠洲攻略論争に現われた如き陸軍の守勢主義と海軍の攻勢主義との対立は、三月四日の陸海軍作戰部長及び軍務局長會議において一応調整せられ、三月七日の連絡會議において、次の如き「今後採るべき戦争指導の大綱」が決定せられた。

今後採るべき戦争指導の大綱

一、英を屈伏し米の戦意を喪失せしむる為引続き既得の戦果を拡充して長期不敗の政戦態勢を整へつつ機を見て積極的の方策を講ず

二、占領地域及主要交通線を確保して国防重要資源の開発利用を促進し自給自足の態勢の確立及国家戦力の増強に努む

三、一層積極的な戦争指導の具体的方途は我国力、作戰の推移、独ソ戦況、米ソ関係、重慶の動向等諸情勢を勘案して之を定む

四、対ソ方策は昭和十六年十一月十五日決定「対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」及昭和十七年一月十日決定「情勢の進展に伴ふ当面の施設に関する件」に拠る

但し現情勢に於ては独ソ間の和平斡旋は之を行はず

五、対重慶方策は昭和十六年十二月二十四日決定「情勢の推移に伴ふ対重慶工作に関する件」に拠る

六、独伊との協力は昭和十六年十一月十五日決定「対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」の要領に拠る

〔趣旨不明確——根本的調整なし〕 さて前記戦争指導大綱の第一項は、その趣旨が極めて不明確なものとなつてしまつた。これは正に陸海軍間の基本思想の相違の所産であつた。三月七日の討議において、賀屋藏相が「既得の戦果を拡充して」とは如何なる意味かと質問したのに対し、田辺盛武參謀次長は、これは補備的な作戰を意味するもので国力に大なる影響を及ぼすほどのものではないと答え、又第一項末尾の「機を見て積極的の方策を講ず」の意味に関し、武藤陸軍軍務局長より、この意味は第三項の「一層積極的な戦争指導の具体的方途」をも含むものと解する旨の発言があつたのに対し、田辺參謀次長は、これは積極的な意気込みを表現したのみで、實際やることは第三項を含まない意味であると主張した。陸軍の第一項については主眼は「長期不敗の政戦態勢を整へつつ」の字句にあつたのである。

然るに岡海軍軍務局長は、第一項に関し、我にして守勢に立てば、敵のため却つて攪乱せられるに至るべく、敵をして守勢に立たしめることが肝要である旨を強調し、海軍としては次の如き考えを持つていと述べた。

一、海軍を以て敵の海上兵力を撃滅する

二、敵の反攻拠点を覆滅する

三、枢軸側の結束を固め敵を各個分撃する

四、重慶政權を分撃する為にはビルマ作戰を強化して、重慶を孤立させる必要がある 又これに伴ひ印度を英より孤立させねばならぬ

五、濠洲及び布哇方面に対し積極的に兵を動かし、敵の海軍兵力を撃滅しその反攻拠点を覆滅するを要する

右に関し永野軍令部総長が、陸軍側は岡軍務局長の意見に同感なりやと質したところ、田辺参謀次長は、説明の順序はどうかと思うが大体の趣旨には異存ないと答えた。海軍の第一項についての主眼は「既得の戦果を拡充して」「機を見て積極的の方策を講ずる」にあつたのである。

以上の如き討議に徴し、東條首相はいずれにしても意味が通じないではないかと発言したが、結局この戦争指導大綱は、かかる陸海軍間の根本思想の調整が完全に行なわれないまま決定せられ、海軍の濠洲攻略論を封ずると共に、陸軍もまた海軍の攻勢思想に同調して一部の積極作戦を行なうという結論に帰着したのであつた。

尚この討議において、東郷外相は対重慶方策が、単なる「諜報路線の設定」だけで片づけているのに不満を表明し、軍事的解決の方途がないならば、外交的に何とか手を打つべきであり、これがために従来の対重慶和平条件を適宜緩和しては如何かと述べ、又独ソ和平斡旋についてもかなり積極的な意図を表明して注目をひいた。前者については、対重慶施策は焦つて手を出せば出すほど不利であるという意見が大勢を占め、後者については、斡旋に乗り出す以上は、日本の言い分を聞かねば実力をもつてこれを聞かせるという決意と準備が必要であるとして、現情勢では不適当であると決論せられた。

〔説明、上奏〕 右決定は既定計画と大なる変化がないので、裁可を仰ぐ必要なしと認め、三月十三日次の如く首相及び両統帥部長の列立上奏を行うに止めた。

謹みて大本営及び政府を代表して上奏致します

御權威の下今や初期作戦の一段落を見んとしますに際しまして大本営及び政府は二月下旬以来既得の戦果並に其の影響、世界情勢

の推移、帝国国家戦力の現勢等を慎重に検討致しました結果、「今後採るべき戦争指導の大綱」に関し完全なる意見の一致を見ました以下御説明を申し上げます

第一、今後採るべき対米英戦争指導の大綱に就きまして申すまでもなく今次の戦争は長期戦を覚悟して諸方策を進めなければならぬ即ち短期的に米英を屈伏せしむることの至難なるは勿論又妥協によりて到底此の戦争を終末し得ざるは既に開戦前より予期致した通りであります

併しなから緒戦以来今日迄の赫々たる戦果に依りて占め得たる政戦両略上の優位は現在の戦機を捉えて引続き更に之を拡充し政戦略に亘る長期不敗の態勢を整うると共に米英をして常に消極防守の態勢に陥らしむる如く国力の許す限り有ゆる手段を講ずるの必要があると存じます其重要な具体的方策に関しましては充分検討の上其の都度更めて御允裁を仰ぎたいと存じます

第二、長期戦完遂の為国力戦力涵養の必要に就きまして

帝国爾後の戦争指導に於ては常時国防弾力力を保有し国家戦力を充実して情勢の推移に応じ随時所要の方策を講じ得る如くすることが極めて必要と存じます

戦争遂行途上国防弾力力を喪失し国家が立直る力をさへなくした場合縱ひ一時の戦果は得ましても其の結果は返つて九俎の功を一簣に虧くに至るべきは幾多貴き戦史の証明する所であります

茲に於てか帝国の戦争指導も亦屈敵の為有らゆる手段を講ずる一方長期戦に対応する為の国家戦力の充実涵養に努力すべきを特に強調したのであります

第三、更に一層積極的な戦争指導上の新方策の採否に就きまして

大東亞戦争遂行途上に於て戦争目的達成の爲将来更に一層積極的な戦争指導上の新方策を採るべきや否やは今日迄の戦果のみならず更に広く深く全般の諸要素即ち彼我国力特に其の兵力の増強、我が作戦の推移、対ソ、対支の諸情勢、独ソ戦況等各種の条件を勘案して之が能否及可否を慎重に検討すべきことを明かにしたのであります

更に積極的な戦争指導の方策とは例へば印度濠洲等を攻略すると言ふが如き方策を指すものであります

第四、当面の対ソ施策に就きまして

対ソ施策は既に大本営政府連絡会議に於て決定を見ましたる事項即ち

(一) 「極力戦争相手の拡大を防止す」

(二) 「帝国は南方に対する作戦間極力対ソ戦争の惹起を防止するに勉む」

(三) 「日ソ間の静謐を保持すると共にソ連と米英との連繫の強化を阻止し爲し得れば之を離間するに勉む」

等既定方針に準拠すべきを明かにしました

但し固より之によりて対ソ即応の戦備を疎かにせんとするの意でないことは勿論でありまして必勝速決の作戦準備には万全を期せなければならぬと存じます

尚独ソ間の和平に関しましては現情勢に於きましては到底其の妥結は不可能と認められますのみならず此の際之が斡旋を試みすることは却て日独の関係を悪化し日ソの關係に紛糾を起す危険もありますので差当り我より進んで之を行ふことなきを明かにしたのであります

第五、当面の対重慶施策に就きまして

対重慶施策は既に大本営政府連絡会議に於て決定を見ましたる方針即ち「帝国の獲得せる戦果と彼の致命部に対する強圧とに

依る重慶側の動搖に乗じ適時謀報工作より屈伏工作に転移する時機方法等は大本営政府連絡会議に於て決定す」に準拠すべきを明かにしました

尚現在予期以上迅速にビルマ作戦が進展しラングーンも既に陥落し重慶側に相当の影響を与ふべきを予想されますが過早に我より進んで右屈伏工作を開始しまするは却て逆効果を生ずるの虞れが大でありますので別に定めらるる時機迄は之を行はざるやう致したいと存じます

第六、対独伊施策に就きまして

今後独伊との提携強化は戦争目的達成上益々必要なるを痛感せられますので独伊との協同に関しましては既定方針を堅持すべきを明かにしたのであります

右謹みて上奏致します

昭和十七年三月十三日

内閣総理大臣 東條英機
軍令部総長 永野修身
参謀総長 杉山 元

進攻作戦終末に伴う戦争指導の問題としては、以上述べた如き事項のほかに、前記の研究議題について数次の討議が行われ、逐次これが決定を見るに至つた。

〔船腹増強対策〕 戦争指導上の重要問題たる船舶問題については、特に大なる関心が寄せられた。

開戦時の造船計画量は、年平均六〇万総噸と決定せられていたが、三月七日の討議において、昭和十八年度六五万総噸、昭和十九年度八五万総噸と予定することに決定すると共に、船腹増強対策を次の如く決定した。

一、方針

船舶輸送力が物的国力の維持増強上絶対隘路なるに鑑み行政力

を挙げて船腹増加及輸送能率の増進の方途に集中施策すると共に徴備船舶に關し敵に其の既定計畫通り実施し又右に依る総動員物資輸送の実現に努む

二、要領船腹輸送力の隘路を打開する為現に為しつつある輸送力増強の諸施策を促進するの他輸送力の負担軽減に關し左の如き施策を併せ為すを要す

(1) 造船の急速増強及鉄鋼増産実施上左の如き循環矛盾を有す造船増強し鋼材増産を―石炭及鉄礦―船舶輸送力の為には要す之が為―石輸送を増―増大を要す―大するを要す之が為に

而して之が唯一の打開策は石炭鉄礦石の輸送量を減少し得る方法即ち屑鉄に依る鉄鋼増産の他途なし之が為屑鉄回収及産業設備整理に伴ふ屑鉄蒐集を速かに計画的に実施するを要すべし

(2) 輸送力の重要部分を占むる石炭の輸送量の軽減を企図する為洗炭状態を更に改善するを要す之が為要すれば洗炭設備を国家管理し之を整備拡充する等の非常手段を強行するの要あるべし

第六章 外郭要地に対する作戦

〔陸海軍戦略思想の対立〕 大本營は昭和十七年初頭、概ね予定の如く初期攻略作戦を終始し得るものと見透しの下に、その後の作戦を如何に指導すべきやにつき陸海軍両作戦幕僚間において検討を重ねていた。その作戦目標の組上についた地点はアリニューシヤン、ハワイ、フィジー、サモア、ニューカレドニア、濠洲、ニューギニヤ、コス、印度等であつた。陸軍統帥部が三月初旬頃までに出し

(3) 尚既定計畫として之が實現を促進すべき主なる事項は左の如し

- 1 戦時標準船の決定及計畫造船
- 2 港湾荷役の能率増進及出荷統制機構の確立
- 3 機帆船の計畫輸送体制の整備
- 4 船員の養成等船員対策

〔陸軍船解備問題〕 尚ここに問題になつたのは、既定計畫に基く陸軍徴備船の解備問題であつた。既定計畫によれば、陸軍徴備船は、開戦第八月たる七月以降は、一〇〇万総噸に減額することになつてゐた。然るに拡大したビルマ作戦遂行のために、陸軍は二〇万総噸の船舶の増加を必要とし、七月以降も一〇〇万総噸の維持を要求した。これは物的国力培養上の大問題であつて、鈴木企画院總裁と田辺參謀次長との間で激論が行われた。結局陸軍徴備船の解備は計畫通り実施するものとし、陸軍の別に二〇万総噸を必要とする要求に対しては、引揚船の促進及び拿捕船、機帆船、木造船等の利用促進を強化して別途これに應ずる如く努力することに決定せられた。この際、既定の陸海軍徴備船舶量を変更するときは、その都度大本營政府連絡會議の決定を経ることに定められ、この申合せは爾後嚴格に実施せられることとなつた。

た一応の結論はハワイ、濠洲及び印度に対しては制圧作戦ならばよいが大攻略作戦を伴うような作戦は避けるべきであるということであつた。かくの如く新たな大作戦を回避しようとする陸軍側の考えは前章でも述べた如く予定の範域を攻略した以上常に自己の国力特に戦力に相応した堅実さを以て戦略持久を策し、来攻する敵を破摧して持久目的を達成すべきである。このやり方は戦争の短期終末を

期し得ないところに欠陥はあるが、直接米本土に進攻するが如き積極的屈敵方策を見出し得ない日本としては己むを得ないことで、これは開戦時決定せられた戦争及び作戦指導の基本方針であり、軽々に変更すべきではないというにある。これに対して海軍側特に聯合艦隊の立脚する思想は濠洲、ハワイ、印度等の地域に對し、なし得れば逐次攻略作戦を伴う作戦を実施し、この際惹起する艦隊決戦により敵を破挫して敵海軍の抬頭を常に抑圧せんとする連続決戦の思想であつた。この例に見るが如き陸海軍戦略思想の相違は小は局地作戦より大は戦争指導に至るまで、戦争間常に對立して調整に苦しんだところであつた。恐らくこの考えの相違は陸上作戦と海上作戦との性格の相異に由来するものであらう。ともあれ、この對立は既述の如く連絡會議においても表面化し字句の修飾により一応議案を纏められたが両方の腹の中は元のままという状態であつた。かくして爾後の作戦指導に關し逐次に決定した陸軍統帥部の作戦構想は所謂外郭要地に對する作戦であつた。元來開戦前に予定した攻略領域の攻略後、その外郭要地に對し一部作戦を実施して、これを占領し又は制圧することは敵の反攻を制し、我が戰略態勢を強化することとなり、爾後の持久作戦指導上有効な作戦である。既述の米濠遮斷作戦も當然これに含まれるものであつた。

註 全般については附圖（第五）を参照せられたい。

1 セイロン島に對する航空進攻作戦

外郭要地に對する作戦の第一はセイロン島に對する航空進攻作戦であつた。

この作戦は海軍独自の作戦である。昭和十七年三月までに我が陸海軍部隊は南部ビルマ、アンダマン、ニコバル、マレー及び蘭印を攻略したので、印度及び印度洋方面に對し防衛態勢を確立すると共に、東印度洋の海上自由を確保するため、この方面の英艦隊に一撃

を与える必要があつた。

三月初頭印度洋にある英艦隊は空母二隻、戦艦三隻、甲巡四隻、乙巡一一隻を基幹とするものの如く、近く更に戦艦六隻、空母二隻を基幹とする部隊が増派せられる気配があり、その東印度洋における主要基地はボンベイ、コロンボ、ツリンコマリであつた。又敵航空兵力はビルマのものを合し約三〇〇機を数え、近く約二五〇機を増加せられるものと見られていた。

山本聯合艦隊司令長官は三月九日南方部隊指揮官近藤中將に對しセイロン島方面敵兵力を奇襲撃滅し兼ねてビルマ作戦海上護衛の完璧を期するため機動作戦を実施すべきを命じ、近藤中將は十四日これに關する作戰命令を下達した。

〔海軍南方各部隊の攻撃〕 攻撃のため南方部隊は主隊、機動部隊、丙潜水部隊、航空部隊及び馬來部隊に区分せられ、各部隊は作戰計画に隨つて左の如く行動した。

機動部隊は航空母艦五隻を擁する第一航空艦隊、第三戦隊、第一水雷戦隊を基幹とし、三月二十六日午前八時セレベスのスターリング湾を出撃しチモール北側海峡を経て印度洋に進出した。四月五日部隊はセイロン島南方に達し午前九時艦攻五三機、艦爆三八機、艦戦三六機を以て発進、十時四十五分から約一時間コロンボの攻撃を敢行し、敵戦闘機の猛攻を排して敵機約五〇機撃墜、港内商船約一〇隻撃沈破のほか、飛行場を爆砕した。又同日午後四時五十五分コロンボ南々西二八〇哩において、遁走中の英甲巡二隻、ド・セツトシャー、コンウォールを撃沈した。指揮官南雲中將は次いでツリンコマリを攻撃するに決し六日東南方に行動し、セイロン島の五〇〇哩圏外を迂回して四月九日セイロン島東方海面に進出した。同日午前十時二十分から約一時間に亘りツリンコマリに對し攻撃を加え、敵機撃墜約四〇機、重巡一隻、商船三隻を撃沈し、軍港、飛行場を爆砕した。又午後一時五十分ツリンコマリの南東七〇哩において敵

空母ハーミス型一隻を捕捉撃沈した。

丙潜水部隊は第二潜水戦隊（潜水艦六隻）を基幹とし四月一日から十日までセイロン島西方海面及びボンベイ方面の監視哨戒に従事し、この間敵貨物船九隻を撃沈破した。

概ねマドラス（含む）パビア島、シミール島西端を連ねる線以北のベンガル湾を行動して機動部隊に策応すべき任務を有する馬來部隊は、四月一日から十日間北ベンガル湾に作戦行動を続け、この間敵船約三〇隻を撃沈破し、十一日シンガポールに帰投した。

南方部隊主隊は四月二日セレターを出撃しアンダマン諸島方面に行動して支援に任じた。南方部隊指揮官は九日のツリンコマリ攻撃を以て、所期の作戦目的を達したものと認めて作戦を打ち切り十一日セレターに帰投した。

この作戦によつて我が海上威力は当分の間東印度洋を圧することが出来た。

2 ポートモレスビー海路攻略作戦と珊瑚海

海戦

ポートモレスビーはニューギニア東南部に位する濠洲の空海基地で濠洲北方地域における第一の戦略的要衝である。即ち日本軍これを占拠すれば海空に対し有利なる防衛をなし得べく、又濠洲にしてこれを保持せんかラバウル方面は常に脅威を受け足るを掬われるの感がある。

ここにおいて大本営は夙にこの点に着意し、ラバウル攻略直後の昭和十七年一月下旬これが攻略を決意し、二月二日これに関する発令を見た。

『作戦の構想』 この作戦は英領ニューギニア東部の要地とソロモン諸島の要地とを攻略して濠洲本土とこの方面との連絡を遮断すると共に、濠洲本土北方海域を制圧するを目的とした。使用兵力は南

海支隊と第四艦隊基幹の部隊で、先ず陸海軍協同して東部ニューギニア北岸のラエ、サラモアを攻略した後、なし得ればポートモレスビーを攻略し、又機を見て海軍単独でツラギを攻略して航空基地を獲得する方針であつた。

その後二月下旬頃ラバウル東方海域及び珊瑚海方面に敵機動部隊が現出してきたため第四艦隊はラエ、サラモアの攻略を延期していたが、三月五日に至り南海支隊の一部を含む陸海軍協同の攻略部隊は、ラバウルを出撃した。攻略部隊は三月七日夜、ラエ、サラモアに上陸して同地附近の敵を翌八日中に掃蕩した。

しかるに十日朝に至るや所在の我が艦船は敵機動部隊所屬機約六〇機、基地航空機約一〇機の攻撃を受け、沈没四隻、損傷七隻の大被害を受けた。この被害率は全数の約半数であり、敵機動部隊による大規模被害の最初のものであつた。

一方モレスビー攻略作戦については当時第四艦隊はその指揮下に航空母艦部隊がなかつたので二月二十日の米機動部隊のソロモン海域出現にも関連し前途を危惧しその実施を延期していた。聯合艦隊では二月二十七日第四艦隊を督促して急速攻略を要望し、第五航空戦隊（瑞鶴、翔鶴）を増援して攻略支援に当らさせることにした。当時聯合艦隊ではミッドウェイ攻略を六月に実行する腹案を持っていたので（大本営は未だこれを認めていなかった）この母艦二隻も五月十五日以後は原隊復帰を予告したほどである。従つて第四艦隊は是が非でも五月十五日までにこの作戦をやり遂げてしまわなければならないかつた。

一月下旬以来日本海軍航空部隊は躍起となつてモレスビーに猛攻撃を反覆したが、敵の飛行機は後から後からと補充され敵の前進基地としての機能は一向に低下の徴がないばかりか寧ろ着々強化され、四月末頃における南東方面米濠の第一線機は約六〇〇機と推定された。

〔海路攻略作戦発動〕 右の経緯を経たる後四月十八日の大本営指示により五月十日頃モレスビー攻略を断行することに決定し、本格的な諸準備がほとんど進められた。この攻略作戦は海路よりモレスビーに上陸を企図するもので、五月四日に南海支隊は第六水雷戦隊護衛の下にラバウルを出港した。

作戦計画に當つて第四艦隊が最も苦慮した問題は平均六節半という低速輸送船団を三昼夜もの長い間、敵の航空威力圏内を横歩きさせねばならぬ点であつた。

当時ラバウルに展開していた第二十五航空戦隊は、一六二機を擁する精銳で、テニヤンに司令部を置いていた塚原第十一航空艦隊司令長官の直接指揮下にあつた。基地航空部隊は四月二十八日以来その飛行艇基地をショートランドに進め、索敵範圍を拡げて連日哨戒飛行をやつて見たが、珊瑚海からソロモン群島一帯に亘る海面には敵影を認めなかつた。

モレスビー攻略に併行してツラギ攻略も行われる予定であつた。海軍ツラギ攻略部隊（呉第三特別陸戦隊）は予定の如く五月三日未明ツラギを無血占領した。ところが同地は翌四日午前六時三十分から六時間に亘り米艦載機延約八〇機の来襲に會つて駆逐艦一隻、掃海艇二隻、駆潜艇一隻沈没という相当の被害を蒙り、これによつて敵機動部隊の進出が明かとなつた。五月五日南下中の攻略主隊たる第六戦隊基幹の部隊は、敵のB一七の攻撃を受けた。我れには損害はなかつたが、しかし既に日本艦隊の企図と概貌は敵に察知されたに相違ない。

翌六日午前八時十分我が飛行艇はツラギの百九十二度、四二〇渾に空母一隻を有する敵機動部隊を発見したが間もなくこれとの接触を絶ち、反対に飛来した敵機は一四隻からなる我が輸送船団を発見してしまつた。

明くれば七日またまた敵は早朝から我が輸送船団上空に飛来し

た。これより先第五航空戦隊索敵機は午前五時三十二分ツラギの南西四〇〇渾に空母一隻を有する敵部隊を発見した。第五航空戦隊司令官原少将は直ちに全力攻撃を發令し、午前六時十分攻撃隊は發艦した。

〔海上決戦に転移〕 恰もこの頃その西方海面で我が水上偵察機から母艦一隻、戦艦一隻、甲巡一隻及び駆逐艦七隻より成る敵機動部隊をラッセル島の百七十度、八二渾に発見した旨報告してきた。六時四十分この報告を受け取つた第四艦隊司令長官は敵の機動部隊は二群ありと判断し、先ずラッセル島方面の敵を全力で攻撃することとし、七時これを全軍に發令した。

程なく第五航空戦隊からは既に東方の敵に対して攻撃を指向した旨の入電があつた。一方敵情判明に伴つて攻略部隊は午前七時護衛部隊の護衛下に取敢えず北西方に避退行動を開始し、次いで輸送船団をして津輕艦長の指揮を以て北上する如く指令した。

第五航空戦隊が選んだ目標は敵機動部隊ではなく大型油槽船と駆逐艦で午前九時三十分これを炎上撃沈せしめて帰還した。

一方我が輸送船団に対する敵機の攻撃はその附近にあつた我が母艦祥鳳に集中され、同艦は敵機約七〇機の雷爆撃の犠牲となり、遂に午前九時三十分デボイネ島の五九度五二渾で沈没の悲運に遭つた。

当日朝ラバウル発進の基地攻撃機隊及び同日午後二時三十分発艦の第五航空戦隊の攻撃機隊は、いずれも敵機動部隊に対し何等の効果を挙げ得なかつた。

かくして七日は錯誤の連続によつて失うところ多く、敵機動部隊には一矢をも酬ふことなく夜に入り、午後六時モレスビー上陸の二日延期を發令し、万事は翌八日の決戦に持ち越された。

八日午前四時發進した翔鶴の索敵機は六時二十四分味方位置から二百五度、二三五渾に目指す敵機動部隊を発見した。空母二隻、戦艦一隻、甲巡二隻、軽巡一隻、駆逐艦六隻、針路百七十度、速力一

六節であつた。第五航空戦隊の攻撃部隊は午前七時十五分発進した。その兵力は戦闘機一八機、爆撃機三三機、攻撃機一八機、計六九機であつた。我が機動部隊は三〇節の高速でスクールの間を縫つて南へ南へと急いだ。これより先、午前六時三十分頃から敵機はスクールの隙間から見え隠れながら味方に接触し、それらの敵機のものらしい感度の高い電波を早朝から探知していたので、早晩敵の編隊の来襲は避け難いと覚悟して警戒を厳重にしていたが、八時五十分から敵機は翔鶴に攻撃を集中して殺到し始め、九時四十分までの間に四次に亘る波状攻撃を受け同艦は火災を起して飛行機の発着が不可能になつた。しかし味方戦闘機の有効な反撃によつて二〇本の敵魚雷は一本も命中せず、阿艦は全速力航行に支障なく、そのまま北方に向つて離脱することが出来た。

一方味方攻撃機隊は予定地点に進出し午前九時二十分突撃に成功した。戦果は敵の航空母艦二隻に致命的打撃を与え、レキシントン型は沈没確実、ヨークタウン型は沈没の算大なりと報告してきた。

〔離脱、戦機を逸す〕 敵機動部隊に対する攻撃を終つた飛行機隊は午後零時三十分までに残存の唯一の航空母艦瑞鶴に収容を了つたが全機殆ど被弾があり、具さに激戦のほどを偲ばしめるものがあつた。機動部隊指揮官高木中将は攻撃力と保有燃料の減耗のため夜戦の高速航行に不安があつたので第二次航空攻撃を取り止め、一時敵から離隔して燃料の補給と飛行機の整備に専念することに決心した。

この状況を察知した井上第四艦隊長官は午後二時三十分これを承認し、次いで午後三時にはモレスビー攻略の無期延期並びに関係各部隊をナウル、オーシャン両島の攻撃部署につくように発令した。瀬戸内海の聯合艦隊司令部ではこの第四艦隊の北上命令が如何なる根拠によるものか薩張り判らないので、取敢えず、「追撃の必要あり情況知らせ」の照会電報を打つた。これに対し回答が来ない間

にモレスビー攻略延期の電報が入つた。聯合艦隊の幕僚はその消極的態度を批難し山本長官から第四艦隊宛に「追撃を続行して残敵を撃滅すべし」との電令が出ることになつた。

又大本営海軍部においても同様第四艦隊に対する不満の声高く、永野軍令部総長は「上村艦隊の二の舞だ。追撃命令を出せ」と色をなして憤激した。

第四艦隊は聯合艦隊命令に従つて積極行動を指令し、九日早朝から再び南下して索敵を始めたが、もはや敵の捕捉を望めなかつた。

次期作戦を念頭に置いた聯合艦隊は九日午後第五戦隊及び第五航空戦隊を第四艦隊の指揮下から取り上げ珊瑚海海戦は全く終りを告げた。この海戦は戦術的には日本軍の勝利であり、モレスビー攻略を抛棄せざるを得なかつた点から、戦略的には米軍の勝利ということが出来るであらう。

南海支隊の輸送船団は五月九日タラバウルに帰還上陸し、次いで、同月十九日新たに戦闘序列を令せられた第十七軍の編組に入れられた。

3 ファイジー、サモア、ニューカレドニア 作戦の準備

既に述べたように論争の末昭和十七年三月初頭濠洲攻略作戦を断念した大本営海軍部はその直後にファイジー、サモア、ニューカレドニア攻略作戦（F・S作戦と呼称した）の実施を陸軍部に提議した。F・S作戦の目的とするところは既に述べた如く、開戦以来米濠間の海上輸送頻繁にして濠洲は逐日米の対日反抗基地化しつつあつて、今にしてこれを制するに非ざれば手に負えぬこととなるであらう。濠洲攻略は直接その本体を制せんとするものであつたがそれが出来ないといすればファイジー、サモア、ニューカレドニアを攻略し、これを基地とする我が海空兵力を以て米濠間を遮断する必要が

あるというのであつた。

陸軍側は検討の結果その目的とするところは全幅同意するところであり、所要陸上兵力は歩兵三箇大隊を基幹とする支隊三箇を以て足りる見透しがついたので本作戦の具現に同意を表した。そこで三月中旬から両作戰部合同して作戰要領の研究並びに準備に着手し、四月上旬概ね成案を得た。

以上のように新作戦の準備を着々進めつつあつた四月上旬、大本營海軍部は突如としてF・S作戰の前にミッドウェイ、アリユンシャン攻略作戰を挿入すべきことを陸軍部に提案した。この作戰は後に結局は陸軍も同意してその実現を見ることになつたのであつたが、その経緯については項を更めて詳述する。

〔F・S作戰と第十七軍〕 その後F・S作戰はポートモレスビー海路攻略作戰の失敗とミッドウェイ、アリユンシャン作戰の挿入によつて少々影の薄いものとなつて来たが、その作戰準備は依然続けられた。そして五月十八日には新たに第十七軍の戦闘序列を命ぜられて陸軍中将百武晴吉同軍司令官に親補せられ、同日「第十七軍司令官は海軍と協同しニューカレドニア、フィジー諸島及びサモア諸島の各要地並にポートモレスビーを攻略すべき」大本營命令を發せられ、聯合艦隊司令長官に対しても同趣旨の命令が發せられた。本作戦の構想は左の如くであつた。

F・S作戰は之等諸島を攻略して米濠間の連絡遮断を強化すると共に諸方面よりする敵の反撃企圖を封殺することを目的とする。

陸軍は第十七軍主力（歩兵三箇大隊を基幹とする支隊三箇基幹）海軍は第二艦隊、第一航空艦隊を基幹とする部隊を使用し、ニューカレドニア攻略部隊は六月下旬ラバウルに、フィジー、サモア攻略部隊は七月上旬トラック島に集合し、聯合艦隊の作戰状況により七月初旬頃作戰を開始する如く予定する。

〔F・S作戰延期〕 然るに六月上旬におけるミッドウェイの敗戦

はこれらの作戰に大影響を与えることとなつたので大本營はその直後取りあえずF・S作戰の発起を約二箇月間延期するの処置をとり、充當作戰部隊は一部をビスマルク諸島方面に、主力をミンダナオ島及びバラオ諸島に集結待機せしめた。

4 ミッドウェイ、アリユンシャン作戰決定の経緯

〔提案突如、陸軍妥協〕 既述の如く昭和十七年四月上旬大本營はF・S作戰の検討を終り近く正式手續を執り得るまでに漕ぎつけたところ、大本營海軍部は陸軍部に対し突如として、F・S作戰の前にミッドウェイ、アリユンシャン攻略作戰を挿入せられたく、又この作戰実施の場合、陸軍より歩兵一箇聯隊を基幹とする兵力を以て協力せられたき旨提議した。陸軍作戰部としてはどの作戰にしても相当期間の研究準備を要するのに、僅か二箇月後に予定せられたF・S作戰の前にこの大作戦を行うという甚だ唐突なる申出の真意を疑つた。又海軍が、陸軍としては直ちに同意出来ないハワイ攻略作戰を企圖し、これに持つてゆくための準備作戰ではないかとの疑念も持った。これに対する海軍作戰部の説明は、この作戰はミッドウェイ単独の作戰で、ハワイの攻略は考えていない。海軍内の経緯としては、聯合艦隊司令長官山本大將が強硬にミッドウェイ、アリユンシャン作戰の実施を主張し、永野軍令部総長が既にこれに同意して終つたので陸軍が不同意なら海軍だけでもやるということであつた。大事はこのように本筋をそれて突進の間に運ばれた場合に兎角虚隙を生じ易いものである。

突然の重大提案によつて未だ頭の転換さえ出来ない陸軍作戰部の中には、こんな変な運び方をするならば陸軍は協力を断わるべきではないかとの意見もあつたが、開戦以来両軍よく協調し作戰があればど順調に経過したのに、今、感情的に対立を招くようなことがあ

つてはならぬ、陸軍が断れば海軍だけでもやるとまでいうのだから、この際いざこざなしに行こうというので遂に海軍の提案に同意を表した。尤も陸軍はアリューシャン作戦については北辺の防衛及び米ソ遮断の見地からその必要を感じていたことであつた。そこで五月五日に大本営は山本聯合艦隊司令長官に対し陸軍と協同してミッドウェイ及びアリューシャン西部要地を攻略すべきを命じ、ミッドウェイの攻略に任ずる一木支隊（歩兵第二十八聯隊長一木清直大佐の指揮する歩兵一箇大隊基幹）とアリューシャンの攻略に任ずる北海支隊（穂積松年少佐の指揮する独立歩兵第三百一大隊基幹）との戦闘序列を命じ且つ各々に作戦任務を附与した。同時に大海指、大陸指を以て本作戦に関する陸海軍中央協定を指示した。

〔聯合艦隊の決戦論〕 元来日本海軍では戦前から対米早期決戦即ち彼我の戦力比率が隔絶しない以前に米主力艦隊と雄雄を決したいというのが戦略の根本であつた。従つて南方資源地帯確保という第一段の目的を達成した後、次々に海上決戦の早期招来の手を打つて米艦隊に打撃を与え、これを反覆して彼我比率の均衡を我に有利に保ちつつ不敗の態勢を確立し、以て、世界情勢特に歐洲戦局の有利な進展に期待していた。特に山本聯合艦隊司令長官は是が非でも昭和十七年中には決戦に持つていかなければならぬという強い考えを持つていた。

同長官が開戦前の十一月五日附に出した命令ではミッドウェイ方面は海軍計画による第二段作戦期間に状況許す限り速かに、占領又は破壊することに予定されていた。又聯合艦隊參謀長宇垣少将が一月十四日自ら作成した作戦指導要綱案の結論として「聯合艦隊はミッドウェイ、ジョンストン及びバルミラの諸島を攻略し、航空勢力を前進せしめ、右が概成した時機に決戦兵力並に攻略部隊が大挙して布哇に進出して之を攻略すると共に敵艦隊と決戦し之を撃滅せんとする構想を樹てた。これに対し聯合艦隊幕僚の多数意見はハワイ

攻略は同地の基地航空兵力を撃破する妙案が差当つて見つからないので、この際は西に向つて印度洋で作戦するを可とすると主張したので、この案が採択実行せられ四月上旬末まで、これに主戦力を傾注することになつたのであつた。

〔海軍部内論議、六月断行決定〕 しかしその間第二段作戦全般に関し大本営海軍部と聯合艦隊の間で研究が開始され、特に二月中旬以降頻繁に行われたが、この当初においてはミッドウェイ攻略は具體的に論議の対象にはならず、ただ将来ハワイ攻略を行う場合、その前提作戦としてやる程度の漠然たるものであつた。然るに三月に入つて聯合艦隊は急速ミッドウェイ攻略の要あることを頻りに主張し始めた。これに対し大本営海軍部は反対の態度を採り、その理由としてミッドウェイ攻略それ自体は些して難しくはなからうが、問題はその後補給輸送難であり、更に敵の反撃に際し遠隔の根拠地から出ても到底間に合うまいという点を挙げた。

両者の議論は中々結着しなかつたが聯合艦隊の強硬な意志表示により、四月五日永野軍令部総長はミッドウェイ攻略作戦を実施することに同意した。しかしその実行の時機はなお確定するに至らなかつた。この方針は四月十六日大本営海軍部指示として発令されたのであるが、その二日後に敵機動部隊は日本近海に挺進来襲し、ドーリットルの飛行隊が東京その他の数都市を襲うこととなつた。

この空襲直後山本長官はミッドウェイを速かに我が手中に収め東正面に対する哨戒を強化しなければ、帝都空襲の反覆を防止することとは不可能であるとして更に強硬な意見具申を行つてこれが即行を迫つた。そこで、これに引摺られた大本営海軍部は遂に六月断行のことに最終決定を行い、予定されていたF・S作戦の前にこの作戦を挿入することに日程を改めた。大本営陸軍部は当時山本長官の発意なることだけは知つていたが、その他このような裏の事情を知らずに、既述の如く合意したのであつた。

聯合艦隊ではこの作戦をなるべく早い時期にやりたいと念願した。しかし何分にも印度洋作戦から帰還する主戦力は四月末にやつと内地に帰投できた有様で作戦準備に無理があり、一部には若干延

第七章 米機の本土来襲

1 米機動部隊の出現と我が海軍の遠撃準備

開戦劈頭ハワイに対する奇襲作戦によつて我が方は敵の海上兵力に一応の打撃を与えることは出来たが米海軍はやがて大勢挽回の挙に出るであらう。然し当分は航空母艦を中心とする機動部隊の奇襲を受ける程度であらうと判断していた。

南部太平洋方面においては敵機動部隊は昭和十七年二月一日にマーシャル群島を攻撃し、同二十日にはラバウル東北方海面に現出し、更に三月十日にはニューギニア、サラモア攻略中のわが艦船に対し大挙来襲し虎視眈々たるものがあるが如く思われた。

〔太平洋正面、本土防空の心〕 日本本土の太平洋正面は延長約三千哩に及ぶ広漠たる海洋に面しているの、敵艦隊の奇襲防止は中々難しいところであつた。

結局窮余の策として南鳥島の北方から千島の南方に亘つて、漁船を一列に配置して哨戒線を張ると共に、連日海軍の哨戒機を洋上遠く六百哩沖まで行動せしめ、これによつて敵艦隊の近接を早期に捕捉し、機を失せず反撃を加えるということが敵機動部隊に対してこの海洋正面を防衛する唯一の方法であるとして採用した。

この海上遠撃航空部隊は四月一日に南方作戦から帰還した歴戦部隊で新編された第二十六航空戦隊を加え、その総兵力は陸攻八〇機を根幹とするもので木更津を主基地とし一部の兵力を南鳥島に派遣していた。

期を要望する声も起つたが、夜明け前に残月があつて飛行機隊の夜間行動可能な点から六月七日を逸しては九一カ月遅らさなければならぬとして、予定通りに期日が決定せられた。

四月十日午後六時三十分航空母艦二乃至三隻からなる敵機動部隊は真珠湾北西方約四百哩に進出し、十四日頃には東京空襲を企図する徴候あるやを思ひしむる敵の無線情報が入つて来た。

〔触接と反撃〕 木更津、南鳥島の哨戒機には七百哩圏の綿密な索敵が命ぜられ反撃の計画は急速に樹てられた。この計画は、敵機の離艦出発点は恐らくは海岸から三百哩附近であらうと予想されるので敵機動部隊を空襲予定日の前日に発見し、必殺の昼間魚雷攻撃を以て第一撃を加え、更に近接せば黎明時に大挙雷爆による痛撃に引き続く連続猛打を以て敵の空襲を不可能に陥らしめようにするにあつた。そして印度洋作戦から帰投途上の南雲中将麾下の機動部隊を急速進撃させて敵を撃滅することにも期待がかけられた。

四月十日以降洋上の天候は連日晴れ渡つて哨戒飛行は相次いで行われたが、敵情は依然として不明のまま日が経つた。果然四日十八日午前六時三十分海上哨戒線の監視艇第二十三日東丸から「敵空母三隻見ゆ、わが地点大吠岬の東六百哩」の電報を受領した。

軍令部からの通報でこの情報を知つた第二十六航空戦隊は直ちに攻撃機隊の発進準備を命じ、午前十一時三十分先ず触接機として陸上攻撃機三機を発進させた。その後哨戒線の監視艇から報告に接せず、又当日午前六時三十分に出発した哨戒機からは、午前九時四十五分敵の双発機二機を東京の東六百哩附近に発見したことが、敵艦隊については何等の報告がなかつた。しかし在再時を空しうして戦機を逸することを懸念した攻撃機隊は午後零時四十五分進発に決

し、陸上攻撃機二九機は戦闘機二四機の掩護により敵を求めて東進した。

一方防空に関しては、敵の空襲は十九日であらうと判断されたので警報発令を差控え、ただ横須賀鎮守府管区にのみ午前八時三十九分警戒警報が発令された。

聯合艦隊では敵発見の第一報で対米国艦隊作戦第三法を発令したので、第二艦隊は入港早々の横須賀から急拠出撃し、又、印度洋から帰国途上にあつた第一航空艦隊は、バシー海峡から速力を増して敵方に迫つた。十六日に瀬戸内海を出発して濠洲東岸に向いつつあつた第八潜水戦隊六隻も方向を転じ、更に敵の出現位置の西方約二百哩の配備に就いていた第三潜水戦隊の三隻も敵に向つて殺到しようとしていた。

2 敵機の奇襲

日本海軍では敵の空襲が十九日午前より以前に行われることは絶対により得ないとの判断の下に、あらゆる反撃態勢が右に述べたようにに整えられていたのであつた。

しかしこの判断は敵の機動部隊から飛び立つ飛行機は航続力の少ない艦載機であるという仮定の上に立つていたもので、これが錯誤であつた。敵のB二五爆撃機は十八日の午後一時頃から約五十分間に亘つて房総方面を経て次々に飛来し、東京、横浜、川崎、横須賀、名古屋、神戸を攻撃して通り魔のように立ち去つた。警報のサイレンは爆弾が落ちて始めてから鳴り出し、飛び上つた邀撃戦闘機が高度を上げている間に、超低空の敵機は悠々と目標を攻撃したのであつた。

当時この敵機の行動は謎として、その真相把握に悩んだが、中国の我が占領区域南昌に不時着したB二五型機の搭乗員の調査により次の事実が明かになつた。即ちドーリットル陸軍中佐指揮の下に日

本空襲志願者よりなる爆撃隊は約一箇月の訓練を受けた後、空母ホーネットに搭載してアラメダを出撃し、途中僚艦エンタープライズと合同し日本に向つたのである。

敵の空襲計画では日本の東方四百哩から発艦して夜間空襲を行い、翌朝中国基地に着陸することに予定されていたが、十八日早朝日本軍の監視艇に発見されたので機動部隊に対する反撃を避けるため、昼間強襲を行うことに変更して大吠岬東方六百五十哩から発進したのであつた。

このような訳で、我が索敵機が搜索海面の尖端に達した際には敵母艦群は既に圏外に出ていたので発見出来なかつたのである。

〔ミッドウェイ作戦を生む〕 日本本土は遂に敵機の蹂躪を受けた。本土直接の防空に任じた陸軍防空部隊は急遽これに応戦しその直後東部軍から敵機九機撃墜の発表があつたが、事実敵には大した損害を与えずに終つたようである。太平洋正面の防衛には弱点がある。これを強化するためにはミッドウェイ攻略をこの際速かに実行するほかに策がないとの主張が山本聯合艦隊司令長官の意見具申になつて軍令部に強硬に述べられた。

元来ミッドウェイ攻略の是非は軍令部、聯合艦隊間に既に論争が繰り返されたことで、米機の本土空襲は山本長官の論拠を大いに強めることとなつた。かくてこの戦争間最も不幸な結果を生んだミッドウェイ作戦の決行が間もなく確定されたことは既に述べた通りである。

3 浙贛作戦の発動

〔作戦目的——大陸航空基地覆滅〕 日本初空襲のドーリットル飛行部隊に対する内地防空部隊の攻撃は殆ど成果を挙げ得ずに、敵は中国方面に飛び去つた。大本営は直ちに支那派遣軍にこれを通報した。支那派遣軍は主として華中方面所在の戦闘機を以て随所に邀撃

せしめ若干の成果を挙げ、その一機を既述の如く南昌附近に不時着せしめた。太平洋方面の空母から発艦して日本を爆撃した後大陸に着陸するという敵の奇策は大陸特に華中方面の敵航空基地が健在する限り、何回も繰り返され得るであろう。先づ大陸の基地を占領又は破壊して敵側の使用を封ずるに如かずというので、大本営陸軍部は直ちに之に応ずる作戦的処置を進めた。即ち大本営は支那派遣軍に内報して研究せしめ、次いで四月三十日支那派遣軍総司令官に対し大陸命を以て「成るべく速に作戦を開始し主として浙江省方面の敵を撃破して其の主要航空根拠地を覆滅し該方面を利用する敵の帝國本土空襲企図を封殺すべき」を命じた。これと同時に参謀総長は大陸指を以て地上兵力を以て攻略すべき敵航空根拠地は主として麗水、衢州、玉山附近の敵飛行場群及びこれに伴う諸施設とし、その他の飛行場群に対しては航空部隊等により制圧破砕に努むべきこと及び敵飛行場群を攻略せば所要の期間これを確保し、情勢これを許すに至らば飛行場、軍事諸施設並びに主要交通路等を徹底的に破壊した後原駐地に復帰すべく反転の時期等は別に示す旨を指示した。

〔支那派遣軍の作戦要領〕 右に基き支那派遣軍は各方面より兵力を抽出して第十三軍（軍司令部上海）を増強し、その主力を以て五月十五日杭州方面より敵東部第三戦区軍（司令官、余漢謀）に対し攻撃を開始し、金華、玉山、衢州、麗水附近の敵飛行根拠地を覆滅せしめ、第十一軍（軍司令部漢口）の一部を以て西部第三戦区軍を

攻撃して第十三軍に策応せしめ、且つ第一飛行団をして各地の敵飛行基地を攻撃せしめる作戦方針を樹て急拠作戦準備を進めた。つまり、東西から挟撃する打通作戦である。

第十三軍は余杭（杭州西南）附近から奉化附近に亘る約百五〇軒の正面に四箇師団と一箇旅団を展開し、一箇師団を第二線とし、総兵力歩兵五三箇大隊基幹の兵力を以て十五日予定の如く攻撃を開始した。戦況は有利に進展し、同月二十八日に金華を、六月七日には麗洲を、いずれも激戦の後攻略し、続いて六月十二日玉山、十三日広豊、二十四日麗水を、それぞれ攻略した。

第十一軍は二箇師団を第一線とし、総兵力歩兵二六箇大隊を基幹とする兵力を以て鄱陽湖南側の南昌附近において攻撃を準備し、五月三十一日夜攻撃を開始した。六月四日撫洲を、十二日建昌を、十六日貴溪をそれぞれ占領し、その先頭部隊は七月一日横峰において第十三軍の先頭部隊と相会し、ここに浙贛打通を完成した。

〔作戦の終末〕 七月二十八日大本営は支那派遣軍総司令官に対し、浙江作戦終了後金華附近の要域を確保すべきを命じ、又反転時機は八月中旬末とすべきことを指示した。ここにおいて攻略諸部隊は約二箇月間に亘り攻略地域に駐まつて予定の破壊を実施し、八月十九日反転作戦を開始し、兩軍とも概ね八月下旬を以て原態勢に復帰したが、金華附近のみは我が国製鉄に必須の螢石産地として新たに確保地域に加わることとなつた。

第八章 ミッドウェイの敗戦とアリニューシヤンの攻略

1 作戦地方面の状況

ミッドウェイ島は直径六哩の円形環礁で、その内側東南部に位置するサンド島及びイースタン島は共に石花質の砂よりなり、概ね平坦

で地面は疎生した熱帯性植物を以て蔽われている。

同島には開戦前、米海兵隊約七五〇名の一箇大隊が駐屯していた。その後若干増強しているものと認められ、多数の陸上砲台、高射砲、探照燈を以て防備されている。陸上及び水上航空基地、潜水

艦基地、無線電信隊等の施設があり、堡礁があるので、上陸戦闘には相当の困難を伴うものと思われる。

この島は敵機動部隊の我が本土近接時の重要な哨戒基地となるのみならず、大型機を以て我が占領下にあるウェーキを直接攻撃出来る唯一の基地である。第一段作戦以後日本海軍が太平洋東正面に積極作戦を実施する場合は、アリューシャン群島と共に甚だしく我が行動を制し得る戦略的地位にあつた。

〔敵艦隊の動静——作戦の鍵〕 ミッドウェイ、アリューシャン作戦前日本海軍が知り得た敵状況は次の如くであつた。即ちアリューシャン方面には敵艦艇、航空機、重要施設等を認めない。ダッチハーバー以外は従來の調査の通り敵の防備は極めて手薄である。

当時ミッドウェイ島方面の敵情について日本海軍は次の通り判断していた。即ち同島には嚴重な防備を施し、飛行艇約二四機、戦闘機約二〇機及び陸軍爆撃機約一二機を常駐するほか、所要に応じこれを二倍に増加することが可能であり、その飛行哨戒は進出距離六百哩程度で昼夜を分たず警戒中である。又ハワイを含むこの方面所在の敵艦艇は航空母艦二乃至三隻、戦艦二隻、甲巡四乃至五隻、乙巡三乃至四隻、輕巡四隻、駆逐艦約三〇隻、潜水艦約二五隻と推定され、この艦隊はミッドウェイ作戦に関連して出撃の算が大であり、就中同島が攻撃を受けた情報によつてハワイから出動する場合が最大であろうと判断された。この敵艦隊の動静こそミッドウェイ作戦の鍵ともなるべき関心事であつたから、その根拠地たる真珠港の偵察を実施する計画を樹てた。即ち五月三十一日を期し二式飛行艇を以てマーシャル群島のウォツジュを出発点とし、中継基地フレンチフリゲート礁において潜水艦より燃料補給の上で奇襲偵察をやることにして準備を進めた。然るにいざ実行の段になつてフレンチフリゲート礁に敵の水上艦艇があつて警戒嚴重なる旨、當の補給潜水艦から報告があつたので差し当り一日延期して見た。しかし依然

として警戒緩和の徴もなかつたのでこの偵察は中止され、結局敵の機動部隊に対する唯一の確認手段であつたこの偵察も行われないことになつた。僅かに伊号第一六八潜水艦が六月一日夜半から二日昼間にかけてミッドウェイ島及び周辺の偵察をやつただけで作戦が開始されることになつた。

アリューシャン方面において最も懸念せられるのは霧であつて、當時の季節は一年中で最も作戦に適する時期であるが、霧の発生を予期せねばならない。ミッドウェイ方面は天候による大きな支障がないものと判断せられた。従つて當時アリューシャン群島方面作戦が天候不良のため日程を若干遅らせることがあつても、ミッドウェイ方面の作戦は予定通り実施の腹案であつた。

2 ミッドウェイ、アリューシャン作戦の構想

ハワイ作戦終了後、聯合艦隊司令部は、瀬戸内海西部柱島泊地の旗艦大和にあつて、全般作戦指導を行うと共に新作戦の準備を実施した。南方攻略作戦の一段落と、昭和十七年四月印度洋方面作戦の終了に伴い、聯合艦隊水上部隊決戦兵力を瀬戸内海西部に集結せしめ、基地航空部隊の大部を太平洋東正面に配備し、着々次期作戦の準備を進めた。

大本営は昭和十七年五月五日山本聯合艦隊司令長官に対し、陸軍と協同してミッドウェイ及びアリューシャン西部要地の攻略を命令した。當時聯合艦隊司令部において計画せられていた太平洋東正面作戦、即ちミッドウェイ、アリューシャンに対する作戦構想の大意は次の如くであつた。

一、一般方針

作戦方向はミッドウェイ島方面とアリューシャン群島方面とに二分するが、両者を緊密に連繫せしめる一体の作戦とし、要地の攻略作戦自体も重要な作戦目的であるが、この攻略作戦を契機とし

て反撃の爲出現を予期せられる敵艦隊を捕捉撃滅することも目的とする。従つて敵が両方面の何れに集結出現した場合も、充分之に応じ得るよう有らゆる兵力配備を考慮し、聯合艦隊決戦兵力を之に充て得る如くする。

二、ミッドウェイ方面の作戦

1 作戦要領

機動部隊を以て攻略部隊の上陸前ミッドウェイを空襲、所在兵力及び防禦施設を壊滅し、攻略部隊を以て同島を一挙に攻略すると共に反撃して来る場合は、ハワイ、ミッドウェイ間に潜水部隊を配置し、機動部隊及び主力部隊はミッドウェイの北乃至北西海面に、攻略部隊は同島の南乃至南西海面に待機して之を邀撃する。

2 各部隊の行動

占領隊たる第二連合特別陸戦隊（二箇大隊約二千八百名）及び陸軍一木支隊（一木清直大佐の指揮する一箇大隊基幹、約三千名）は、第二水雷戦隊及び第七戦隊護衛の下に五月二十八日夕刻サイパン出撃、六月七日上陸を決定する。

第一機動部隊は、五月二十七日早朝内海西部出撃、六月五日午前一時三十分ミッドウェイを空襲する攻略部隊主隊たる第二艦隊は、五月二十九日早朝五時内海西部出撃、途中サイパンから出撃した部隊を掩護し、上陸当日は概ねミッドウェイ島の南乃至南西に進出して上陸部隊の直接掩護を行ふ。

攻略部隊の水上機部隊は、六月六日キヌア島（ミッドウェイ島西北西約十七哩）を占領して飛行基地を設置し其他の部隊は七日上陸戦闘に直接協力する。

主力部隊（第一艦隊）は、五月二十七日朝内海西部出撃、各部隊を支援しつつ上陸当時ミッドウェイ島北西六百哩に進出する。

基地航空部隊は、艦隊の行動に策応して広範囲の索敵哨戒を実施すると共に二式飛行艇二機を以て五月三十一日から六月三日の間、真珠湾の奇襲偵察を実施する。

先遣部隊（潜水部隊）の主力は、右飛行艇の行動に協力すると共に六月六日迄にハワイ、ミッドウェイ中間に散開線を構成し敵艦隊の反撃に備へる。

ミッドウェイ島攻略後は、第二連合特別陸戦隊、各種砲九十四門、機銃四十挺、甲標的（註、特殊潜航艇）六、魚雷艇五を同島に配備し、六月中旬以後更に甲標的の四、発射管（四連装）二基、二十口径砲十二門の増加を予定する。

二、アリューシャン方面の作戦

1 作戦要領

北方部隊（第五艦隊基幹）は、機動部隊を以て攻略部隊の上陸前ダツチハーバー、次いでキスカ、アダックを空襲、所在兵力及び防禦施設を壊滅し、攻略部隊を以てアツツ及びキスカ両島を攻略する敵有力部隊の反撃に対してはミッドウェイ方面主力の行動と相俟つて之を捕捉撃滅する。

2 各部隊の行動

第二機動部隊は五月二十六日大湊出撃、六月四日ダツチハーバー南方海面に進出して同地を空襲し、六月六日キスカ、アダックを空襲する。

アツツ攻略部隊（第一水雷戦隊、陸軍北海支隊）は、五月二十九日大湊出撃、アダック島及びカナガ島の要地を急襲し、諸施設を徹底的に破壊した後六月八日頃同島を撤退し、次いでアツツを攻略する。

キスカ攻略部隊（第二十一戦隊、海軍陸戦隊）は、二十八日大湊出撃、途中幌筵に寄港、補給の上六月三日同地発、七日キスカに上陸する。

北方部隊主隊は概ねキスカ攻略部隊と行動を共にし、六月七日以後アダック島南方海面に進出して全作戦を支援する。

状況によりミッドウェイ作戦主力部隊の警戒部隊（第二、第九戦隊基幹）は、キスカ南方五百哩に進出し、北方部隊の作戦支援を行ふ。

先遣部隊の一部は作戦開始前北米沿岸、アリューシャン群島各要地の偵察を行ふ。

アッツ、キスカ両島攻略後キスカは海軍、アッツは陸軍部隊之が守備に任ずるキスカ島には特別陸戦隊約五百名、砲八門、機銃四挺を攻略と同時に配備し、七月以降目標的の四、発射管（四連装）一基の増加を予定する。

3 ミッドウェイ作戦の経過

〔進撃開始——海軍記念日〕 参加各部隊は海軍記念日の五月二十七日午前六時南雲中将麾下の機動部隊の内海出撃を先頭に、相次いでミッドウェイを目指して進撃を始めた。

これら各部隊は、開戦以来約半歳に亘る大作戦により、乗員の補充交替、艦船、飛行機の整備に多忙を極め、充分なる訓練は固より本作戦に関する研究の余裕少く、聯合艦隊より示された計画をそのまま鵜呑みにして出撃するの已むない状況であつた。

当時聯合艦隊の作戦兵力中ミッドウェイ作戦に直接参加したものは主力部隊、機動部隊、攻略部隊、基地航空部隊及び先遣部隊に区分されていた。

主力部隊は旗艦大和坐乗の山本聯合艦隊司令長官の直接指揮する戦艦七隻、軽巡三隻、小型空母一隻を基幹とした。

第一機動部隊は赤城（旗艦）、加賀、飛竜、蒼竜の航空母艦四隻を基幹とし、その搭載機は艦上爆撃機八四機、艦上攻撃機九三機及び戦闘機八四機、計二六一機で、このほかミッドウェイ攻略後同地に

展開予定の基地航空部隊の先発戦闘機三六機を各航空母艦に分載していた。

攻略部隊は第二艦隊司令長官近藤中将指揮下の戦艦二隻、重巡八隻、軽巡二隻、小型空母一隻、水上機母艦二隻を基幹とし、これに上陸作戦兵力たる一木支隊の約三〇〇名及び第二連合特別陸戦隊約二八〇名を搭載した輸送船一二隻を随伴した。

基地航空部隊中ミッドウェイ作戦に協力すべき第二十四航空戦隊は、陸上攻撃機、戦闘機各七二機及び飛行艇一六機を以て南洋諸島に展開していた。

又先遣部隊の潜水艦計一五隻は六月六日ハワイ、ミッドウェイ間の散開線についたが、進出途中海面の掃航索敵が錯誤によつて行われなかつたため、敵機動部隊はこの配備完了時には既に同海面を通過してしまつた後で、後に戦局に重大な影響を与えることになつた。

〔戦機動くも敵情不明〕 敵情は判然としないまま各部隊は刻々とミッドウェイへと近接した。三十日には敵潜水艦らしい電波が長文の緊急電報を発信していたが、その潜水艦の位置からして我が輸送船団を発見報告した疑いは多分にあつた。果然六月四日朝六時この船団がミッドウェイ島の南西六〇〇哩附近に達した時、敵の偵察機に発見され、次いで同日午後以降敵の陸上機から攻撃を受けることになつた。

一方機動部隊は六月一日、二日に補給を実施した後、満を持して東方に進撃中、海上の視界漸時不良となり次いで濃霧の来襲を見るに至つて一切の視覚信号は全く不能となつた。適々三日午前十時三十分にはミッドウェイ島に向けて針路変更を行わねば予定日の作戦に間に合わないという事態になつたので、已むを得ず無線封止を破つて変針命令を長波で発信した。既に電波が出た以上、機動部隊の所在は敵に曝露したものと思わねばならない。かくて二十四節の高

速で北西からミッドウェイに近迫する機動部隊は緊張の極にあつた。

四日午後三時十分敵哨戒機らしい電波を我が機動部隊の至近に感じ、続いて午後四時四十分掩護部隊の利根から二百六十度方向に敵機約一〇機発見の報告があり、又午後十一時三十分雲間に隠顕する触接機らしい燈光を二回認め、直ちに戦闘配置についたが何れも確認に至らず、恐らくは誤認によるものと判定された。この頃の南雲中将の情況判断では、わが機動部隊は未だ敵に見えられていないと認める。敵艦隊は攻略作戦が進捗せば出動反撃してくる算がある。我としては先ずミッドウェイ島を空襲し、敵の基地航空兵力を潰滅し上陸作戦に協力した後、敵機動部隊が若し反撃して来たならば、これを撃滅することが可能であるという考えであつた。

〔ミッドウェイ空襲——運命の兵装転換〕 予定に従つて、五日午前一時三十分ミッドウェイ空襲の第一次攻撃隊は飛竜の飛行隊長友永大尉指揮の下に、戦闘機三六機、爆撃機三六機、攻撃機三六機の編隊を以て発艦し、攻撃に向つた。この攻撃隊は発進後間もなく敵飛行艇の追跡触接を受け、目指すミッドウェイの三〇哩附近に近くやこの飛行艇は我が攻撃隊上空に吊光弾を投下して米戦闘機の誘導に當つた。これに引続き彼我戦闘機の間にも猛烈な空中戦を展開し、美事に敵機を圧倒した後目標上空に進入したが、地上に敵機を見なかつたので飛行場その他軍事施設を爆破して帰途についた。

ミッドウェイ飛行場の敵機は、わが攻撃隊の近接通報によつて避退や反撃のため飛び立つていたので、攻撃成果不十分と認めた友永隊長は、午前四時「ミッドウェイに対し第二次攻撃の要あり」との意見を電報した。

当日の早朝、機動部隊の南方及び東方海面に対する索敵機は、午前一時三十分から二時の間に発進したので、四時十五分に右意見具申電報が南雲中将の手許に達した時には、未だ敵艦隊に関する何等

の報告もなかつた。そこで敵の水上艦艇の出現に備えて待機中の第二次攻撃隊をミッドウェイ島に指向するに決し、同攻撃隊艦上攻撃機の兵装を魚雷から八〇〇匁の陸用爆弾に転換を下令した。

〔敵の先制第一撃——敵艦隊判明〕 これより先午前二時三十五分頃から敵の触接機は機動部隊の周辺に隠現していたが、四時頃に至つて敵陸上機の来襲が始まり、六時五十分頃まで殆ど連続的に執拗な攻撃が反覆された。この間六時二十分頃からは敵艦載機の雷撃を受けたが、我が戦闘機及び防禦砲火を以て猛反撃を加え、殆ど大部の敵の来襲機を撃墜し、六時五十分過ぎには全く敵の機影なく、機動部隊は何等の損傷をも蒙つていなかった。

この陸上機の来襲中、五時頃になつて初めて敵艦発見の第一電が入つた。それは四時二十八分利根の索敵機の発信で、「敵らしきもの十隻見ゆ、ミッドウェイよりの方位十度、二百四十哩、針路百五十度、速力二十節」であつた。引続いて附近天候や敵針敵速の報告が二回来たが、肝心の兵力内容については判明しなかつた。そこで直ちに「艦種知らせ」を指令したところ、利根機から五時九分に「敵兵力は巡洋艦五隻、駆逐艦五隻」と報じて来たが、五時三十分に至り「敵は其の後方に空母らしきもの一隻を伴ふ」ことを明かにした。かくして敵航空母艦の存在が確実になつたので、南雲中将は連合艦隊司令長官に情況を報告すると共に、この敵に向わんとする意図を明かにした。

しかし、この攻撃に指向すべき第二次攻撃隊の艦隊は魚雷から陸用爆弾へと兵装の転換中で速急な発進が不能であり、即時使用可能なものは艦爆隊のみであつたが、掩護に任ずべき戦闘機は来襲敵機撃墜のため在空中であつた。偶々帰投中の第一次攻撃隊は六時頃から母艦上空に姿を現わし始めたので、この収容を終つてから攻撃隊を発進することに決した。この頃第一航空戦隊（赤城、加賀）は七時三十分、第二航空戦隊（飛竜、蒼竜）は七時三十分乃至八時の

間にそれぞれ発進可能な報告が来ていた。

〔一瞬遅し——大勢決す〕 かくて第一次攻撃隊の收容を終り、第二次攻撃隊発進準備も殆ど完成し、既に「準備出来次第発進」の艦隊命令も下り、その第一機が飛び出さんとする瞬間、七時三十五分敵の艦上爆撃機約三〇機が突如として急降下爆撃を加えて来た。各母艦の甲板上は発艦前の飛行機で埋まり防禦には最悪の状態であった。命中弾は多数の誘爆を起し、旗艦赤城を始め加賀、蒼竜の三艦共に火災を発して何れも落伍の已むなきに至つた。残る航空母艦は僅かに飛竜一隻となり戦局の大勢は瞬時に決してしまつた。損傷艦は何れも通信さえも出来ず、火災も当分鎮火の見込みもないので、機動部隊指揮官は附近で警戒中の巡洋艦長良に移乗して作戦指揮を執るに決し、八時三十分将旗を同艦に掲げた。残存の飛竜を中心とする機動部隊は一路北方へ走りながら戦闘継続中であつたので、長良もその路を追つて合同を計つた。

〔飛竜独力奮戦——最後壮烈〕 飛竜に坐乗中の第二航空戦隊司令官山口多聞少将は孤軍ながら敵機動部隊の攻撃を決意し、七時五十八分戦闘機六機、爆撃機一八機を発進させた。この攻撃隊は熾烈な敵戦闘機及び防禦砲火の妨害を排除して九時七分エンタープライズ型敵空母に直撃弾を与え、これを大破せしめた。

〔註〕 米側資料によればこの母艦はヨークタウンであつた。

これより先午前五時三十分蒼竜を発進した触接機の飛竜掃還後の報告により、既報のエンタープライズ型のほかにその北方に別にエンタープライズ型及びホットネ型空母を基幹とする機動部隊の存在が明かにされた。よつて飛竜の残存全飛行機を以てこれが攻撃を行うことに決し、友永大尉指揮の攻撃機一〇機は戦闘機六機の掩護下に午前十時三十分発進した。本攻撃の成果は敵空母一隻に魚雷三本を命中せしめ、別は大巡一隻を大破したと報ぜられた。

〔註〕 戦後の調査ではヨークタウンに魚雷二本を命中させたのが

実相である。

以上、三次に亘る攻撃によつて飛竜は攻撃兵力の大部を失ひ、僅かに戦闘機六機、爆撃機五機、攻撃機四機を残すのみであつたが、飽くまで敵の残存空母の撃滅を企図して薄暮の攻撃を準備した。しかしこの攻撃隊が正に発進しようとした午後二時三分に敵の爆撃機一三機の爆撃を受け、唯一の生残り飛竜もまた遂に大火災を起し、今や航空母艦は全滅の悲運に陥つた。第二航空戦隊司令官山口少将及び飛竜艦長加来大佐は総員を退去せしめた後、飛竜艦橋において従容として自決し、艦と運命を俱にした。

〔避退行動と聯合艦隊〕 突嗟の間に惨敗を喫した南雲中将は、徒らに敵の航空攻撃を蒙らんよりは一旦西方に避退した後夜暗に入るを待つて反転近迫して夜戦を行うことを企図した。午後二時頃の場合では戦果の判定から推定して敵には尚少くとも一隻以上の母艦健在と判断していたが、午後三時半筑摩機から傾斜火災中の敵空母の東方に敵空母四隻、巡洋艦六隻及び駆逐艦一五隻西航中の報に接した。かくて敵兵力がなお予想外に大なるを知ると共に日没時の飛行接触も見込みない状況となつたため、夜戦を企図するも成算に乏しく、且つ翌天明時以後の離脱更に困難を加えることを予想して夜戦の企図を抛棄し、北西方へと避退を続行することになった。

一方、聯合艦隊旗艦では朝来の敵情に鑑み全力を以て当面の敵艦隊を撃滅するに決し、午前九時二十分北方アリューシャン方面に行動中の第二機動部隊（竜驤、隼鷹）に合同を命じ、次いで戦況上午前十時十分にはミッドウェイ島及びアリューシャン群島攻略の一時延期を令した。その後一旦は夜戦を決意したが、戦況は時と共に不利に展開しつつあるを看取した山本長官は、午後九時十五分攻略部隊及び機動部隊に対し主力部隊に合同を命じ、更に午後十一時五十分にはミッドウェイ島攻略の中止を命じた。

機動部隊は、六月六日午前中なお敵機の攻撃を受けながら辛くも

危機を脱し、同日午後には主力部隊及び攻略部隊の大部に合同した。聯合艦隊長官は大勢既に決したものと認め、先に招致を發令した第二機動部隊を北方部隊に復帰させ予定のアリュウシヤン要地攻略を再興させることにし、午前七時これを發令した。

〔慘敗——不幸の連続〕 これより先き六月五日、決戦海面に進出中、午前十時十分の聯合艦隊命令によつてミッドウェイ島砲撃を命ぜられた栗田少將麾下の第七戰隊の重巡洋艦四隻は全速力で同島に近接し、六日未明に艦砲射撃を決定せんとし突進していた。同隊がミッドウェイ島の西方九〇哩に達した時に、前記午後九時十五分の聯合艦隊命令によつて砲撃を取止めて合同を命ぜられたので、針路を反転した。その直後先頭の旗艦熊野は敵浮上潜水艦を発見したので緊急回避信号と共に転舵したところ、この信号の通達が不徹底で三番艦三隈は四番艦最上と衝突し、最上の前部は切断して航行困難の状況となつた。その後三隈は最上を護衛して西方に避退中、六月七日午後六時四十五分以後ミッドウェイ島の西方約五〇〇哩において敵艦上機の連続攻撃を受け三隈は遂に沈没した。

これによつて敵機動部隊の追撃を知つた山本長官は、この敵を我がウェーキ島基地航空圏内に誘致して反撃せんことを企圖し七日正午この命令を發した。しかし敵艦隊はその手に乗らず、その後東方へ離脱してしまつた。

かくしてミッドウェイ海戦は日本側の惨敗を以て終りを告げた。日本海軍は航空母艦四隻をその搭載機と共に失い、巡洋艦三隈を犠牲にしたのに対し、米側は航空母艦ヨークタウンが我が飛行機の雷爆撃によつて大破後我が伊号第一六八潜水艦に止めを刺され沈没したのと、これと運命を共にした駆逐艦ハムマンを喪つたに過ぎなかつた。

ミッドウェイ攻略部隊の第二聯合特別陸戰隊及び一木支隊は、攻略中止に伴い六月十三日午後グム島に到着し、一木支隊は大本營

直轄となつて同島に集結して、訓練を行うこととなつた。
(註) 海戦経過については篇末挿圖参照。

4 アリュウシヤン要地攻略作戰の経過

聯合艦隊は、細萱戊子郎中將麾下の第五艦隊に、第二機動部隊(第四航空戰隊の空母竜驤及び隼鷹、重巡二隻、第七駆逐隊基幹)第一水雷戰隊及び特別陸戰隊一隊を加えて北方部隊を編成した。これに協力する陸軍兵力は北海支隊(穂積松年少佐の指揮する歩兵一箇大隊、工兵一箇中隊基幹)で、支隊は作戰に関しては海軍北方部隊指揮官の指揮を受けることとせられた。

北方部隊の作戰前の準備はミッドウェイ作戰部隊の場合と同じく各増援兵力は充分な準備時間の余裕を得られなかつたが、極力促進して予定の出撃に間に合うという状況であつた。この頃アリュウシヤン方面の敵情は潜水艦を以て偵察した結果、上陸予定地附近には艦船、飛行機及び重要施設を認めて居らず、ダッチハーバーには駆逐艦以下の小艦艇、アラスカのコデチャック方面には巡洋艦以下の輕快艦艇若干ある程度と判断されていた。

〔出撃、反転、再興——アダック攻撃中止〕 北方部隊は五月二十

六日出撃の第二機動部隊を先頭にして、二十八日キスカ攻略部隊、二十九日アダック、アッツ攻略部隊と何れも大湊を出撃した。各部隊とも連日の濃霧と荒天に悩まされながらも航行を続け、第二機動部隊は六月四日、五日の両日ダッチハーバーを空襲して相当の成果を収めた。然るに六月五日ミッドウェイ方面において重大な戦況に直面した聯合艦隊は、アリュウシヤン攻略を一時延期し、集中可能な全力を挙げてミッドウェイ西方において敵艦隊と決戦するに決し、既述の如く同日午前九時二十分及び十時十分これに関する命令を發した。これに基き第二機動部隊及び第一水雷戰隊は直ちにミッドウェイ方面に向い急航中、更に六日午前七時聯合艦隊命令によつ

で第二機動部隊を北方部隊に復帰させられた。

ここにおいて大本営はミッドウェイ方面の情況に鑑みアタック島攻撃を中止し、アッツ、キスカは予定通りに攻略することに計畫を変更して、これに関する命令を發した。これより先アッツ、キスカの阿攻略部隊は一時反転していたが、右電命に基く「アリューシャン作戦再興、上陸期日を六月八日とする」旨の六日午後一時發北方部隊命令により再び攻略地に向い進撃に転じた。上陸は敵の妨害なく順調に行われた。この間聯合艦隊司令長官は、ミッドウェイ作戦の経過に鑑み敵機動部隊が北上する場合を顧慮して、六月八日に戦艦二隻、重巡二隻及び航空母艦瑞鳳を基幹とする部隊を、更に十三日に航空母艦瑞鶴及び重巡二隻を相次いで北方部隊に編入した。しかし敵潜水艦及び飛行艇の来襲があつたほか、有力なる部隊の来攻はなかつた。かくしてアリューシャン要地の攻略を終り、キスカ島に推進せられた我が飛行艇により北方の哨戒を強化することが出来たが、ミッドウェイの攻略が失敗に終つたためにアリューシャン攻略の戰略的価値は局地的なものとなつてしまつた。

5 海洋主動権の転移と敗戦の秘匿

開戦以来太平洋に、印度洋に 所狭しと活動した我が聯合艦隊の中核たる母艦部隊は、今や、翔鶴、瑞鶴等大型四隻を残すのみで、百戦練磨の母艦機搭乗員もその大半を喪つてしまつた。海洋到る所に敵を圧倒した初期作戦の成功は母艦部隊に負うところ与つて大きかつたのに、情勢は急転した。この実相を知らされたのは、海軍以外では大本营陸軍部の首脳と作戦関係者の一部のみであり、その衝撃は強烈であつた。

〔全戦局の転機——反省〕 この時を転機として日本海軍は当分積極作戦を見合わせ、何とかして会戦間隔を求めて戦力の回復を急がねばならぬこととなつた。そして差し当り既定計畫のF・S作戦を

二カ月間延期し、次いでこれを中止することとした。かくして太平洋における主動的地位が敵の手中に歸し、戦争の前途は恐るべき苦難の道を進んであらうことを思わせた。

然らば、かかる重大な敗戦の原因は何であつたか。既に述べたミッドウェイ作戦發足の経緯を見れば明かなように、この作戦実施の決定そのものに慎重を欠いたところがあり、又これが実施に任じた艦隊自身の搜索、警戒及び行動の適切を欠いたことも重大の原因であつた。勝つてかぶとの緒がゆるんでいなかつたとは云えないものがある。しかのみならず更に重大な過誤があつた。それは敵側に日本海軍の暗号が解読せられたことである。事前に我が企図を知つた敵が網を張つて待つていたその真只中に入つたのであつた。

〔註〕 戦後の調査によれば、二月八日ウエーキに敵機動部隊来襲の際、拿捕された我が監視艇の中から暗号書を取り出したということがある。

もうこうなつては凡てが不幸と過誤の連続で、勝利に導くことなど思いもよらぬ、臍を噛んでも及ばぬことであつた。

〔敗戦秘匿の苦慮〕 日本海軍としては敗戦の弱味を出来るだけ敵に秘匿し、又国内的には急激な衝動を与えないためにこれが掩蔽に勉めた。

当時赤城は六日午前二時味方駆逐艦の魚雷により処分し、飛龍は六日漂流中を我が飛行機が発見し、これが処分のため駆逐艦を派遣したが発見するに至らなかつたので、沈没前後の事情は敵側には不明であつたろうと推定出来る節もあつた。そこで大本营海軍部は六月十日我が損害を航空母艦一隻喪失、同一隻大破、巡洋艦一隻大破という發表を行つた。しかしアメリカ側六月七日の發表では、日本艦隊に与えた損害として空母二隻乃至三隻を撃沈、空母一隻乃至二隻を大破と断定しているので、対外的の効果は殆ど無かつた。

他面ミッドウェイの敗戦を国内に秘匿するための防諜処置は徹底

的に行われ、海戦の損害は一部の関係者を除いては海軍軍人にも秘密にされ、又沈没艦の乗員は暫くの間離詰にされていた。しかし敗戦の噂は時と共に巷に漏れ、結局この海戦に関する作爲的の発表は信を天下に失墜する端緒をなしたのであつた。

尚このミッドウェイ海戦と併行して実施したアリユーション群島の要地攻略は、概ね計画の如く作戦目的を達成したので、この敗戦を秘する宣伝に利用された。しかしこの両作戦の価値には大きな懸隔があり、又我が方の損害が余りにも大きかつたので、こんなことで世界の目を掩うことは到底出来なかつた。

〔機密戦争日誌の記事〕 この間の事情を、機密戦争日誌は次のように記録している。関係部分を原文のまま転記する。

昭和十七年六月六日

「アリユーション」「ミッドウェイ」攻撃作戦ノ報告ナシ

「ミッドウェイ」附近彼我海上決戦惹起セラレツツアルカ如ク小

野田大佐（筆者註、海軍部戦争指導班長）ノ言に依レハ樂觀ヲ許

サス一本一ナラント

願ハクハ快勝ヲ祈ル

参謀本部、軍令部共開戦以來ニナキ緊張ヲ呈ス

同年六月七日

一、「ミッドウェイ」「アリユーション」ヨリ報告ナシ海外放送

ニ依レハ米ハ大勝利ヲ得アリト盛ニ宣伝シアリ部内憂愁蔽ヒ難

キモノアリ

F作戦延期ノ件ヲモ第二課ハ考慮シアルカ如シ

二、断乎既定計画ヲ遂行スルヲ要ス

同年六月八日

一「アリユーション」ハ成功セルカ如シ但シ「ダッチハーバー

」ニアラスシテ「キスカ」上陸ナルカ如シ不安去ラス

「ミッドウェイ」未タ決戦中ニシテ彼我共ニ相当ノ損害アル

カ如ク上陸作戦ハ延期セリトカ從ツテF作戦亦延期セリトカ作戦課当課ニ何等ノ連絡ナシ朝來作戦課軍令部ト連絡頻繁ナリ

二、第六回大詔奉戴日陸軍ノ綜合戦果紙面ヲ飾ル

三、海軍開戦以來初メテ憂色蔽フ陸軍トシテモ大勝利切願スルコト変ラス

同年六月九日

一「ミッドウェイ」海戦ハ帝国海軍ノ敗勢ヲ以テ終了セルカ如ク帝国ノ「ミッドウェイ」攻略ノ作戦目的ハ遂ニ頓坐ス

開戦以來最初ノ黒星、海軍トシテハ断腸ノ思ヒナルヘク陸軍トシテモ衷心遺憾ニ堪ヘス

然レドモ光明ノ明滅ハ戦ノ常道ナリ

日露開戦初頭帝國戦艦二隻ヲ失ヘルモ東郷聯合艦隊司令長官ハ泰然自若ナリシト云フ航母数隻ノ損傷一時的ニハ致命的打撃ト

ハ云ヘ戦争ノ前途ハ尚遠遠鞏固ナル意思ヲ堅持シ戦争目的ノ完

遂ニ邁進スヘキナリ

二、「アリユーション」方面作戦一部ハ成功セルカ如ク詳細不明

作戦課ノ独善的機密保持モ時ニ害アリ政略上ノ施策刻々機ヲ

失シツツアリ当課ニ何等ノ連絡ナクF作戦モ延期シタルカ如シ

三、宣伝ノ見地ヨリスルモ今次作戦ハ完全ナル失敗ナリ 海軍ノ

対内的立場モ困難トナラン

同年六月十日

一、「ミッドウェイ」海戦「アリユーション」作戦ノ戦果ニ関シ

大本營発表ス

海軍苦シイ発表 同情ヲ表ス

遂ニ「ミッドウェイ」作戦ノ作戦目的達成セス

二、海軍ノ損傷本年末迄ニハ完全ニ恢復スヘシト云フ

三、何レニスルモF作戦ハ二、三ヶ月遅延スルカ如ク作戦課当課

ニ何等連絡ナキハ遺憾トス

對濠洲、對重慶戰爭指導モ時期的ニ変更ヲ余儀ナクセシメラル
同年六月十一日

一、「ミッドウェイ」「アリューシャン」作戰ノ戦果ニ関シ新聞

一齊ニ之ヲ飾ル

赫々タル戦果ニ国民ハ歡喜ス何ソ知ランF作戰ハ数ヶ月遅延シ
戰爭指導ハ玆ニ難関ニ達ス

「今後執ルヘキ戰爭指導ノ大綱」ノ主眼ハ文面ニハ明示ナカリ
シモノ米濠遮斷ノ強化徹底ニアリシ筈ナリ海軍輕卒ナル「ミッ
ドウェイ」作戰ヲ行ヒ米濠遮斷作戰ヲ輕視セサリシヤ

米「ソ」ノ分斷モ濠遮斷ニ比スレニ第二義的ノモノナラサリシ

第九章 防衛態勢の整備

1 大本營の指導

昭和十七年六月 初期攻略作戰の一段落を見たので、大本營、政
府連絡会において同年三月決定した今後採るべき戰爭指導の大綱中
の「既得の戦果を拡充して長期不敗の政勢態勢を整へつつ機を見て
積極的の方策を講ず」との方針に基き、長期不敗の戰略態勢を確立
することとなつた。その主要なる措置は軍容の刷新及び南方軍防衛
態勢確立であつた。

【軍容の刷新】 開戦前に強く考慮されたことは、南方要域攻略の
途中においては、北方ソ連の攻勢を受けないかということであつ
た。然るに今や北方には格別の不定なくして初期攻略作戰を終了し
得たが氣負つて斬り込んだ切先が南に向いているので我が態勢を整
えて八方睨みの構えをとろうというのが即ち軍容刷新である

軍容刷新の具体内容としては南方攻略諸軍をして防衛態勢をとら

ヤ

陸軍作戰課亦海軍ニ追隨シ深厚ナル考慮ヲ欠キタルノ譏ナクン
ハアラス

死兎ノ齡ヲ算スルノ愚ハ之ヲ排スヘキモ最高統帥ノ追究スヘキ
ハ作戰目的ニ對スル深厚ナル考察之ナリシナリ

米濠遮斷ノ大作戦ヲ直前ニ控ヘテ敢ヘテ「ミッドウェイ」「ア
リューシャン」作戰ヲ行ハントシタル真意奈辺ニ在リヤ

戦果ノミ追究シテ戦争ハ終ルモノニアラス作戰目的ヲ達成シテ
始メテ戦争ハ逐次終末ニ近ツクモノナリ作戰当事者ハ動モスレ
ハ戦果ニ陶醉シ目的ヲ忘却シ遂ニ輕卒トナリ而シテ失敗ス

しめ、節約し得る兵力を満洲又は中国方面に転用してその防衛を強
化し、又内地における部隊は改編、復員等の処置と相俟つて兵備上
の弾撥力を蓄えようといふのである。この措置は六月以降作戰地の
状況により逐次実現せられることとなつた。

これより先六月六日陸軍大臣、參謀總長は軍容刷新に関する連署
上奏を行い、その際參謀總長は次の如く説明申し上げた。

只今陸軍大臣と共に連署上奏しましたる昭和十七年陸軍軍容刷
新に関する件に基き全軍の兵力運用に就きましては目下統帥部に
於て次の様に致し度と考へて居ります 即ち南方方面に於きまし
ては南方要域の安定確保及外郭要地に対する作戰準備の爲所要の
兵力を配置する外爾會の部隊は主力を内地に、一部を満洲、支那
に復員又は転用し支那に於きましては各種の手段を尽して對敵圧
迫を依然繼續し北方に関しましては従来通り極力戦争の發生を防
止する大方針の下万一の場合に処し得る必要なる態勢を整うるこ

とを肝要と存じます。

次いで參謀総長が申し上げた軍容刷新の内容の骨子は左の如くであつた。

一、南方方面

指揮統帥機關を改編し占領地軍政施行の体系を整備する

抽出可能予想兵力としては近衛、第二、第四、第五師団等を内地に帰還せしめ、第三十三師団等は支那へ、第六十六師団等は満洲へ夫々転用する

又第十四軍（比島）を大本営直轄とする

第三航空軍司令部を新設し、約五箇飛行団を基幹とする航空関係諸部隊を統率せしめ、印度及支那に対する進攻作戰並にスマトラ、ジャワ等の要地防衛に当らしめる

二、支那方面

第三、第六師団を復員し、北支に戦車第三師団を新設し南方より第三十三師団を転用する

南方より一飛行師団司令部及所要の部隊を転用する

三、満洲方面

作戰計画に基く指揮統帥機關即ち方面軍司令部、中間軍司令部等を新設し且第七十一師団及戦車第一、第二師団を新設する

又満洲の防衛及作戰準備上可能な範囲に於て、兵力特に古年次兵等を復員する。第二航空軍司令部の下に飛行師団二箇を隷屬せしめ、南方飛行部隊若干転用する

四、内地方面

第五十二師団を復員する

（註）この計画はその後敵の反攻等とも関連し情勢変化のため

大部の実現が困難となつた。即ち南方から抽出した兵力は第四師団と軍直部隊若干のみとなり、内地の第五十二師団の復員も取止めとなつた。

〔南方軍基本任務の更改〕 南方地域の作戰に任じた諸部隊は開戦

時の進攻に関する命令に基き行動していたが、大本営は六月末進攻作戰の一段落の機会においてその任務を更改し「南方要域を安定確保すべき」持久任務を附与することを決定し、六月二十九日これを発令した。その主要なる事項は、第一に比島の第十四軍を南方軍から切り離して大本営直轄としたこと、第二に南方軍総司令官及び第十四軍司令官に新任務を附与したこと、第三に右諸軍の新任務達成のための行動の準備を与え、特に陸海軍現地部隊協同の準備を指示したことの三項目であつた。

第十四軍を大本営直轄としたのはフィリピンが地理的に他の南方地域と隔絶し、又特性を異にするので、大本営がこれを直轄することにより南方軍の負担を軽減すると共に、作戰及び軍政に関する施策の徹底を図ることにあつた。

南方軍総司令官の新たな基本任務の要旨は左の如くであつた。

一、大本営は大東亞戦争完遂の爲南方要域を安定確保して自給必勝の態勢を確立すると共に情勢に即応する作戰を準備す

二、南方軍総司令官は海軍と協同して左記に準拠して南方要域の安定確保に任ずると共に外郭要地に対する作戰を準備すべし

(一) 緬甸、旧英領馬來、スマトラ、爪哇、旧英領ボルネオに対しては之が防衛を完うすると共に速に軍政の普遍滲透を図る

る

(二) 泰国及印度支那に対しては之が防衛に協力す

(三) 緬甸、印度支那、泰国方面よりする対重慶圧迫を続行す

(四) 印度及支那に対し所要に應じ航空進攻作戰を実施す但し與地に対する地上進攻作戰に関しては別命に依る

(五) 所要に應じ海軍軍政主担任地域の防衛を援助す

(六) 印度、濠洲及支那等に対し所要の宣伝謀略を実施す

三、參謀総長は其隷下船舶部隊の中所要の部隊を一時南方軍総司令

令官の指揮下又は区処下に入らしむることを得

四、細項に關しては參謀總長をして指示せしむ

又第十四軍司令官に対しては「海軍と協同し比律賓の安定確保に任ずべし之が爲特に速に軍政の普遍滲透を図るものとす」と命令せられた。なお右命令に關連し參謀總長は、南方軍總司令官に対し南方要域防衛のための陸海軍中央協定並びに外郭要地に対する作戰準備要綱を指示した

〔基本任務のための陸海軍協定〕 陸海軍中央協定の要旨は次の通りである。

防衛方針

- 一 陸海軍協同し極力艦艇並航空兵力を以てする進攻作戰を実施し敵の反撃企圖を破摧するに努む
- 二、速に占領地域の殘敵を掃蕩し又所要に応じ附近要地を戡定すると共に諸要地の防衛を強化し陸海軍緊密なる協同の下に敵の來襲に対し之を先制撃破す

三、南方海面及内地方要域間の海上交通を安全ならしむ

防衛要領

一、進攻作戰要領

- 1 海軍は占領地域一帯の海面を制圧索敵警戒に任ずると共に適時濠洲並印度洋方面に対し航空進攻作戰及潜水艦戰を実施し又敵情に応じ艦艇を以て洋上に進撃し敵艦船を捕捉撃破す
- 2 陸軍は其の航空部隊を以て主として西南支那及東北印度方面に於ける敵航空勢力其の他要点的破摧に任じ又所要に応じ附近敵艦船等の攻撃に協力す

二、防衛の分担

- 1 占領地域の海上防衛は海軍其の他の直接防衛はアンダマン群島、ニコバル群島、クリスマス島、小スンダ列島及旧蘭領ボルネオ以東の旧蘭領印度は主として陸軍其の他は主として

陸軍之に任ずるを原則とするも作戰の要求に応じ陸海軍協同之に任ず

- 2 速に陸海軍協同又は単独占領地域の殘敵を掃蕩すると共に附近要地に対し所要に応じて戡定作戰を実施し諸要地の防衛を強化し警戒を嚴にす

- 3 敵潜水艦の侵入を阻止する為海軍は防備上必要とする海峡等を閉鎖又は制扼す但し陸軍担任地域に於ける右実施に方りては現地關係陸軍指揮官と協議するものとす

- 4 南方要域に於ける主要港湾の海上防備は海軍之を担任す

- 5 前二項の防備実施の爲必要ある場合は海軍は現地關係陸軍指揮官と協議の上陸軍主担任地域中の所要の地点に防備施設を設置し且所要の人員を配備す

- 6 敵の攻略企圖に際しては海軍主担任地域中のアンダマン群島、ニコバル群島、小スンダ列島方面に対しては所要に応じ機を失せず陸軍之を増援す右の期間同方面の防衛（防空を除く）は主として陸軍之に任ず

- 7 防衛分担の大綱を以上の如く概定するも陸海軍協同之に任ずるの精神を以て相互緊密に連繫し常に協同の綜合威力發揮に遺憾なきを期す

三、海上交通保護

- 1 海軍は南方海面一帯に於て敵潜水艦の侵入を阻止すると共に之が掃蕩を強化す

- 2 南方海面及内地南方要域間海上交通保護は海軍の担任として陸軍之に協力す

陸軍關係船舶護衛實施の細項に關しては關係陸軍海軍指揮官間の協定する所に依る

〔セイロン作戰要綱〕 而して外郭要地に対する作戰準備要綱として次の如き要旨を指示したことは注目に値する。

一 錫倫作戰

1 作戰目的

錫倫島を攻略して印度方面に於ける敵勢力を制圧するに在り

2 使用兵力

陸軍 一乃至二師団

海軍 聯合艦隊の大部

3 作戰時機の設想

独逸の西亜作戰進捗に依り印度方面の敵が西方に牽制せられたる時期とす

4 作戰準備事項

(イ) 教育練成

之が為第三十八、第四十八師団は夫々北部スマトラ及爪哇に集結し主として熱地に於ける上陸作戰を訓練せしむるものとす

(ロ) 情報の収集

(ハ) 作戰要領の研究

5 作戰名稱

十一号作戰と呼称す

二、其他印度洋洲及昆明等に対する作戰資料を収集す

〔大本營の真意 独伊東進に策応〕 この際大本營が右の如くセイ

ロン島の攻略の研究準備を稍々具体化せしめた真意は、独伊勢力が西部印度洋に及ぶ場合を顧慮し、これに策応するためのものであつてこの作戰実施の公算は必ずしも大なりとは思つていなかった。六月二十九日の上奏の際、杉山參謀総長はこの問題につき左の如く説明を行なつた。

外郭要地に対する作戰準備中将来の情勢推移に依りましては比較的生起の公算ありと判断せられます錫倫作戰に就ては稍々具體的準備を示して其の作戰要領を研究せしめ其他に就いては作戰資

料等の収集に勉むる如く指示致度と考えて居ります當時独伊勢力の東進について、大本營が如何に觀察していたかは、七月七日F・S作戰の延期に關連し永野軍令部総長が上奏した説明中左の一節により窺ひ知ることが出来よう。

六月中旬に於ける地中海海戰及トルク陥落を契機と致しまして、独伊の北阿作戰は彼我共に予期せざる急速度を以て進展し間もなく東地中海に於ける英海軍の根拠地アレキサンドリヤを攻略し得る情勢となりました之が為英國の地中海東部に於ける制海權及制空權は殆ど喪失し其の艦艇の大部も地中海より紅海或は印度洋方面に避退するの已むなき状況に至つて居ります

此の情勢が将来の戦局に及ぼします影響は極めて大なるものがございますして独伊のマルタ攻略及独軍の近東方面進出も可能となり又枢軸側不敗の態勢確立の可能性も著しく増大することとなります従つて此の際我方が独伊に策応して西部印度洋方面に於ける敵増援部隊の遮断及敵艦隊の撃滅を図りますことが大局上極めて有利なる情況となりました

前記指示のほか參謀総長は、南方要域における航空基地設定要綱を示達して、次期作戰に即応すると共に南方要域防衛のため必要な航空兵力の維持培養に遺憾なからしめ、特に修理、補給施設の整備を重視すべきことを明らかにした。又南方要域においては我が任務達成を容易にするため、所要の武装団体等を育成し得る旨明示した。

2 南方占領地行政の滲透

作戰開始以来これに膺接して行われた軍政は、極めて順調に進展した。敵性勢力の一掃と共に、治安は恢復し民心は安定し、昭和十七年春夏の候に至ては、フィリッピン、マレー、ビルマ等における一部残存敵匪の蠢動があつたはかは、情勢全く平靜に帰し、軍政機

構の整備と共に現地における軍政諸般の態勢は、逐次整えられるに至つた

〔軍政実施の状況〕 各方面における軍政実施の状況は、昭和十七年五月二十九日杉山參謀総長が行つた次の上奏文によつて窺うことが出来る。

占領地域の治安の恢復並軍政の滲透度は概ね作戰の進捗度と併行致しまして各方面共順調に推移致して居ります 各地区毎に其の概要を申し上げます

一 馬來、スマトラ地区

治安の状況は益々良好で御座ります

軍政の機構に就きましては軍政部の下に馬來は一〇名の知事及昭南市長をしてスマトラは一〇名の支部長をして治めしめて居ります尚此の支部長は近く州知事を以て代らしめらるる筈で御座ります

現地住民の軍政に対する協力状況を申し上げますと当初軍の對華僑施策が適當でありました為華僑の協力が最も積極的で御座りまして産業部門の建設に対しても相當な役割を演じて居ります原住民たる馬來人は頗る従順で御座りますが全くの無氣力で万事消極的では御座ります又印度人は華僑に追隨して居るような次第で御座ります

各種機關の復興状態に關しましては一般行政機關の整備に伴ひ道路、鉄道、通信機關、瓦斯、水道、電気等も概ね復旧致しまして重要産業たるゴム、ボーキサイド、錫、マンガ、鉄、油等は所望量の取得には概ね支障のない有様で御座ります

二 ボルネオ地区

治安防衛上顧慮すべき点は殆んど御座りません 軍司令部（筆者註、ボルネオ守備軍昭和十七年四月編成）到着以來逐次軍政の滲透に努めて居りますが日尚浅く且交通極めて不便の上

に殆んど平和的に進駐が行はれました關係上原住民中には今尚相當英蘭依存の風潮が強くありますので今後は正に努力を要することと存じます

軍政機構に就きましては別に軍政部というものは設けて御座りませんが軍司令官の下に五名の知事が居りまして地方行政に當つて居ります

三 爪哇地区

爪哇島の治安は迅速に恢復致しまして諸施策総て順調に進んで居ります

占領直後の暫定的措置として目下各師団にも軍政の実施を担任せしめて居りますが近く軍政部要員の増強に伴ひ之は切上げる予定で御座ります

軍政機構に就きましては就來軍政部の下に各洲に知事等設けて行政に當らしめますることは他と同様で御座りますが下級官吏には勉めて多くの原住民を利用する様心掛けて居ります

原住民でありますインドネシア人は多年和蘭の無力化的政策の爲直ぐには役に立ちませんが漸次教化して行きたいと考へて居ります

四 緬甸地区

緬甸は漸く作戰が一段落して各兵団は殘敵掃蕩中でありまするが治安は一般に良好で御座ります特に緬甸人一般の對日感情は極めて親目的でありまして日本軍の進む所箒食壺漿して之を迎うると云つた状況でありますので治安は急速に平靜化するものと期待致しております

緬甸の軍政は今漸く其の緒に就きつつある程度でありまして行政機構等も目下検討し準備中で御座ります但し緬甸の国内状況は相當複雑でありまして各民族間特に緬甸人、印度人間對立的關係でありますし今後の民族指導には相當な注意を必要と感

ぜられます

五 比律賓地区

比律賓に於きましては未だ呂宋島の中南部以外の治安の確立を見て居りませんが当分相当の兵力を保有致しますので治安の急速なる恢復を期待しておる次第で御座ります

軍政に就きましては軍司令官の指揮下の中央、地方共に在来の統治機構を最大限に利用して着々成果を挙げて居ります産業及文化施設は南部比島及北部呂宋以外は漸次復旧して居りまして特にマニラ周辺地区は大体戦前の機能を發揮して居ります

以上種々申上げましたが全般と致しましては軍政の施行は克く作戦に膚接し予定の如く順調に進捗致して居りまして治安の確立、重要国防資源の取得は固より軍の現地自活も概ね可能であると存じて居ります

南方文化學術関係諸機関の保存に關しましては現地軍に於きましても大いに努力して居りますが取敢へず保存業務の為パタビヤ及昭南の博物館、バンドンの地質調査所、クアラランポーの博物館と農業試験場、比律賓の科学院等には内地より所要の専門學者を派遣する如く目下準備中で御座ります

〔軍政總監部の新設〕 六月南方軍の防衛態勢確立に伴い、大本營は特に軍政の滲透を重視した。これがため各軍の軍政要員を増加すると共に南方軍に軍政總監部を新設し、将来の經濟建設、民旅指導、交通通信施設の運営等広汎なる分野に亘り、各軍の軍政施行を統轄指導せしめることとした。軍政總監は南方軍總參謀長の兼任であつた。

右軍政には、村田省藏、砂田重政、桜井兵五郎、大達茂雄、児玉秀雄等を始めとする各界の権威者が現地に進出して、これに参劃した。

3 陸軍の重慶進攻作戦構想

昭和十七年春以降大本營陸軍統帥部作戦幕僚の一部においては、対重慶作戦計画の考案に没頭していた。それは南方初期攻略作戦が概ね計画通りの攻略を完遂し得るものとの見透しがついたので、この際四川省の要域を攻略して重慶政權を屈服せしめ、ここに政略上満支の盤石の基盤の上に立つて、大持久戦に対処せんとする考えであつた。

〔作戦要領内示〕 四月上旬大本營は今後機会を求めて重慶方面に対する大進故作戦を行う企図あることを、支那派遣軍総司令官畑大將に内示して、本作戦を研究すべきことを要望した。このとき大本營において内示した作戦要領の骨子は次の如くであつた

昭和十八年春頃より約一〇箇師団を基幹とする一方面軍を以て南部山西方面より、又約六箇師団を基幹とする一軍を以て宜昌方面より攻勢を開始する。各軍は当面の敵を撃破して、方面軍は西安平地を確保すると共に、広元附近に進出し、又宜昌方面より進攻する軍は万県南北の線附近に進出して各爾後の作戦を準備する。作戦準備の推移に伴ひ更に攻勢を發起し、重慶成都を攻略すると共に四川省の要域を占領し、更に状況之を要すれば一部兵力を以て敵の抗戦基地を掃蕩する。

攻勢開始より四川要域占領迄の間を概ね五ヶ月と予想する。

右の作戦間現占拠地域を確保安定し、所要の方面に於て敵を牽制抑留して進故作戦を容易ならしめる。

この作戦を五号作戦と呼称する。

〔五号作戦準備要綱示達〕 この作戦実施のための兵力は、支那派遣軍の兵力を主体とし、一部の兵力、特に渡河兵力及び渡河資材並びに後方部隊の主力等の軍直轄部隊を内地、満洲及び南方から転用増強することとした。これら増加兵力に關しては具體的検討を進めた

結果、八月末までに概ね実現の目途を得たので、九月三日参謀総長は大陸指を以て五号作戦準備要綱を示達した。この頃南北ガダルカナル方面の戦況逐次激化するが如き徴候があつたので、この準備要綱においては本格的作戦準備実施の時期を保留し、取敢えず一部の準備を進めることとした。即ち五号作戦準備は昭和十七年九月から一部の準備に着手し同年秋季頃の情勢を見て作戦を実施するや否やを決定すること、作戦を実施することに決定の場合においては、更に本格的準備を完成した後、昭和十八年春頃以降に作戦発動を予期することを示したに過ぎなかつた。

